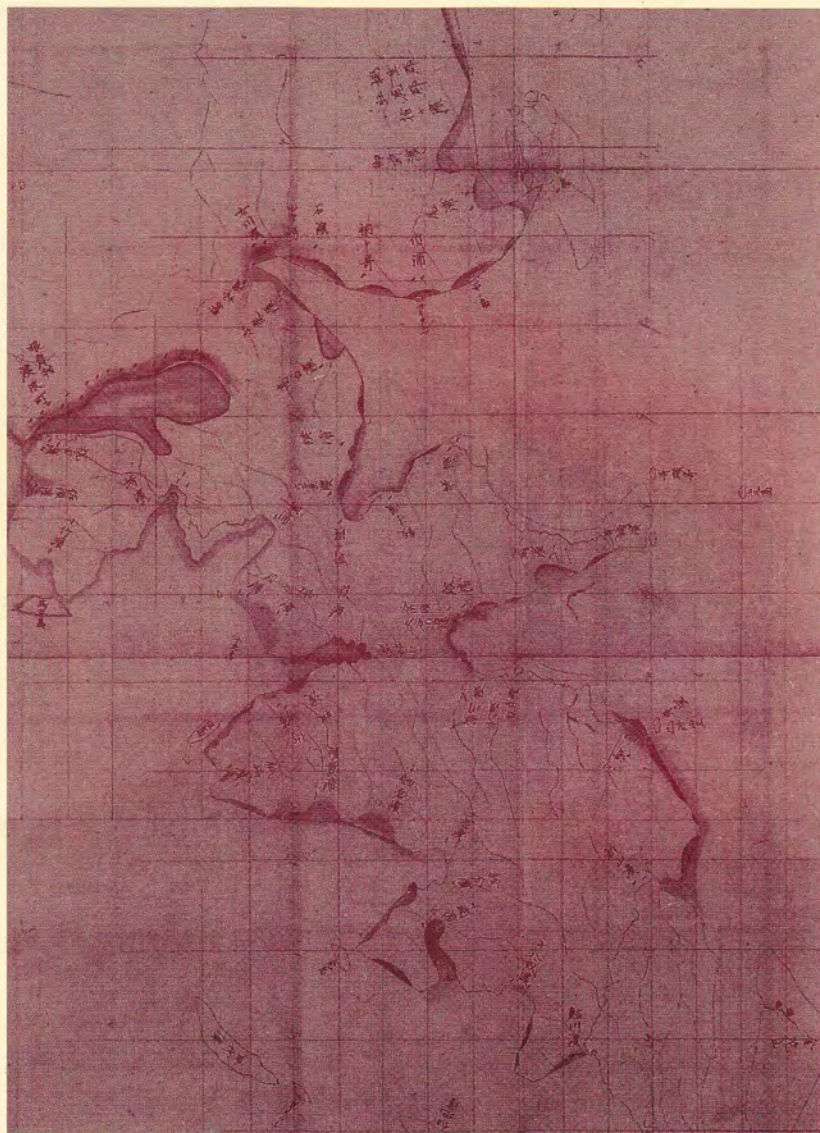


史料と伊能図

# 伊能忠敬

研究

二〇〇六年 第四六号



伊能忠敬研究会

石巻から牡鹿半島、女川を過ぎて北に向かう第二次測量の経路である。東南方向に牡鹿半島が延びる。半島先端部は測量されておらず、不確かなスケッチ図になっており、測線は東南端近くの鮎川濱から新山濱に抜けている。瀬戸を隔てた金花(華)山もスケッチ風に描かれている。この辺りの測量の大半は「船中測量」によっている。海岸線に沿う半月状の濃色部分は海中引縄の測線とスケッチによる海岸線の間の海面である。

享和元年(一八〇一)九月はじめの日記によれば、小淵(測)浦発、鮎川濱泊の日、平山郡蔵らを手分けて鮎川の先、山島(岬の先端方面)測量に遣ったが「行路都合不宣」、新山濱までを測量して戻った。金華山へは鮎川濱から船で渡り、新山濱に戻っているが、測量はしていない。「(登山愈)(注：登山を楽しむ)曇天遠山遠岬不見」とある。新山濱から発った翌日は強風で海上測量が困難なため、前後二手に分けて鮎浦まで、陸(岡)を測った。前半の測線が海岸線の中側、崖の上を通っている。

北端付近、天測の☆印が見える分濱で、命により宿を提供した秋山宗(惣)兵衛は、かつて忠敬の仙台旅行の際、道中で知り合い意気投合した人物で、二四年後の偶然の再会となった。日記にもその喜びが特記されている。惣兵衛はその後三日ほど同行して送別したとある。

鈴木 純子

(表紙題字は伊能忠敬の筆跡)

目次 46号

巻頭 幸田露伴の傳ふる伊能翁のこと  
話題 「こしんつあま」賛歌―祖母の思い出―

タダタカそれともチュウケイ?

江戸府内図が一橋大学に

香取市誕生記念特別展―鷹見泉石展―

記念館へ佐原周辺絵図を寄贈―山口昭司さん―

大図の誤記と二度目のご奉公

散歩 平安時代の勘解由さん

芳名録より こぼれ話

特集 人間貴晩晴

二つの受賞 児童生徒に対する教育の周辺

犯罪の減少を願う

「草苔堂蔵書」公開へ―武田威さん―

新史料研究 「文化の開拓者 伊能忠敬翁」(二)

鳥取に残された古星図―天文古書籍研究―

忠敬と亜欧堂田善

伊能図の朝鮮九山の同定図

研究ノート 伊能隊の宿泊した家がわかった!

伊能測量隊の経度の測定(二)

秋韻夢筆1歌舞伎「松浦の太鼓」

2 安曇野と私

3 根本顕彰会で訪問した伊能記念館

4 上吉田村での晴天観測の星

地域史料 越後岩船測量―与惣左衛門覚書(四)

忠敬談話室だより 古文書ロマン 小倉記念碑「献花の集い」六七

盛況旭川展 間展と天王星 新しい息吹が能登から 宮内文書

日々の話題 お知らせ

表紙図解説 鈴木純子

編集協力 前田幸子

少年 読本	一
伊能 洋	二
佐久間達夫	六
井上 靖子	一〇
伊能記念館	二七
編集 部	四一
辻本 元博	四四
福田 弘行	四九
伊能 陽子	一一
村井 純孝	一四
中富 道利	一六
編集 部	一七
宮内 敏	二〇
上田 勝俊	二八
松宮 輝明	三四
辻本 元博	四二
加藤 巷児	四六
佐久間達夫	六〇
杉浦 守邦	五〇
柏木 隆雄	五一
川上 清	五二
荻原 哲夫	五三
風間 広吉	五四
編集 部	七一

## 幸田露伴の傳ふる伊能翁のこと

伊能翁の如く華麗ならずして摯實なる一生の經歷を具せる人は、最も國家人民に對して益を與ふるにも關せず、世間は之を尊重稱讃すること餘り深からざるが如し。されど世間は其實多く伊能翁の如き人を有せざるべからず。これ予の敢て再び伊能翁を傳ふる所以なり。人の一生は其人の華麗なる經歷を有せる人を以て偉大なる功績を遺せる人なりとするが如き傾きを有するは少年思想の稚弱なる人に免れ難き習ひなりとす。

己亥夏

幸田露伴著、富岡永洗画「少年読本」第十三編はしがきより（明治三十二年博文館発行）



鼻眼鏡の忠敬さん



## 「いしんつあま」賛歌 ―祖母の思い出―

伊能 洋

いつの間にか私より年長の肉親は、姉一人を残すのみとなった。以前から、祖母孝（こう）のことを書いておかねばと思いながら、手をつけられずにいたが、覚えていることもあやふやになって来たので、この辺で記憶の一端を書き留めておこうと思う。

伊能孝は、忠敬より四代目となる三郎右衛門景文とひさの長女として、慶応二年佐原の忠敬旧宅で生まれた。女ばかりの五人姉妹で、私が高校の頃まで四人が揃って長寿を保っていた。嗣子が居なかったために、同族の伊能七左衛門家から端美（たみ）を婿養子に迎えた孝は、八十八年を同じ家で過ごし、生まれた暁の上で人生を終えるという、女性では珍しい生涯を送った人だった。一八六六年生まれの孝は忠敬の没年から僅か四八年後の誕生ということになる。三郎右衛門家の後見として、忠敬の遺品の整理・保存に力を尽くしてくれた同族、伊能茂左衛門節軒は晩年の忠敬を見ており、孝始め五姉妹の名付け親であった。孝にとって忠敬は、今私たちが考える以上に身近かな親しい存在としてのチュウケイ先生であつたに違いない。

孝は私の父康之助、長女、次男と三人の子を生んだが、次男は十代で病没した。

たまたま太平洋戦争中に小学生だった私は縁故疎開で、東京原宿から終戦まで祖母の許に預けられ、佐原の国民学校に通うことになった。

末子の私が、成人して東京に居た姉や兄よりも、祖母と佐原に近しくなった所以である。先般上梓の「世田谷伊能家伝存・伊能忠敬関係文書」で大変お世話になった安藤由紀子さんはこの時の同級生で、直接祖母の話を聞かれたのが忠敬に関心を持ったきっかけになったと言われている。六十年後にこのような深い縁でつながろうとは思わなかったことだ。祖父は私が二才だった昭和十一年に亡くなったので記憶はない。

都会育ちで田舎の暮らしにまったく縁のなかった子供の目には、映るものすべてが珍しかった。忠敬以前からさまざまな商いをして来たので、小野川に面して大きな店構えを持っていたが、祖父の死後は商売をすることはなかった。店の前には出岸（だし）という専用の船着き場があつて、米俵を積んださつぱ船（和船）が着く光景を辛うじて覚えていた。

千坪ほどの敷地内には結構な面積の屋敷畠があつた。戦時中の自給自足の必要もあつて、祖母は若い住み込みのお手伝いさんを相手に畠仕事にも精を出していたが、何と言っても彼女のライフワークは忠敬の遺品を保守すること、事跡の顕彰、P・Rにいそしむことだった。

毎日のように全国から見える旧宅の見学者に、丁寧に應對し、測量器具を縁側に並べ、大きな地図を吊るして説明するのが孝の日課だった。私はと言えば学校から帰ると、おくらと呼んでいた土蔵からの遺品の出し入れを手伝い、だれも居ない時には現在重要文化財に指定されている量程車（曳き歩いて距離を測定する）にまたがって縁側を走らせ、祖母に大目玉を喰らったりしていた。

現在の天皇は小学生時代にも来宅されたことがあり、学年が近い私





は親近感を覚えてお迎えの列に並んで居た記憶がある。後年、平成四年には美智子さまと共に再度お出でになり、旧記念館など見学された。芳名録を見ると大正から昭和初期に知られた政治家、軍人、財界人、学者、作家、音楽家など多士済々の名前が並んでいるのに驚く。

今、思い出しても一般の見学者（小、中学生も多かった）に対して祖母が嫌な顔をしたり粗末な扱いをしたのを見た覚えがない。もちろん無償のボランティアで、昭和二九年に天寿を全うするまで実に六十年を越える天職であった。

一方、主婦としての日常の作業も多岐にわたり、四季さまざまな伝統行事を守り、例えばムシロを広げての梅干し作り、紫蘇の葉を一枚一枚干し並べてのゆかり作り、箕を振っての豆のさや取りなどが一幅の絵のように思い出される。「何があっても朝茶を一杯」と朝食の前にはお茶と一個の梅干しを頂くのが習わしだった。

旧宅は店と呼ばれていた四部屋棟と、忠敬書斎の五部屋棟とが、広い板の間を持った台所をはさんで緒ばれていた。店の左半分は広い土間で、商売の終わり頃は油樽が並んでいたようだ。現在、店舗部分は江戸時代の間取りに復元修復されたので、当時とは多少異なる。書斎棟は、ほぼそのままである。

店の奥二つが祖母の部屋で、私が居たのは書斎東南の角の六畳、障子の外には用水を見下ろして手摺りの付いた長さ二間の張り出し廊下、今で言えばベランダがあり、まことに風流な部屋だった。が、ガラス戸などはなく火鉢だけの冬は隙間風が身に沁みた。書斎の二部屋の長押には数本の槍、薙刀が掛けられていて恐かったが、戦時中の金属供出で姿を消した。

屋敷内には、店と母屋の外に土蔵倉をはじめ二つの収納庫、薪蔵、油小屋（菜種油を絞る作業所）、味噌・炭部屋、麹室、氏神様、離れと呼んだ一軒家などの建物群があった。

氏神さまは、母屋から数十メートル離れた五十坪ほどの敷地に、石積み土台があり、五六段の階段を登った上にあった。一間四方ほどの瓦葺きの上屋の中に納められていたが、後には椎の太木が被さるように枝を張り、小さな神社並みの規模だった。伊能家のさまざまな年中行事はこの氏神様を中心に運ばれていたように思う。

現在は小さな本殿のみが用水横に残されている。

土蔵の扉は重く、鉄の大きな錠前が珍しかった。中には大きな長持ち、鎧櫃、和軍笛、二十人前ほどの客膳、大皿、高張提灯、書籍、もちろん測量器具の数々など道具屋が今見たら涎を流すであろう品々が所狭しと積まれていた。祖母はそのすべてを覚えていて、探すの手に間取るといことがなかった。遺品以外の品々の大方は、祖母が亡くなって市に寄贈するまでの間に、いつの間にか散逸してしまった。

離れの一軒屋は三部屋ほどの小さな家だったが、常に親戚や縁者の青年が何人か、佐原中学（現佐原高校）に通うために寄宿していた。当時旧家では書生を置いたり学生を寄宿させるのはよくあることだったが、祖母の面倒見のよさは格別だったようである。

薪蔵には薪と共に枯松葉や枯れ草がうず高く積み上げられ、大八車も置いてあって私たち子供には格好の隠れんぼの場所だった。味噌部屋は細長い薄暗い土間で、漬物樽や味噌樽が黒々と並んでいるのが怖かった。

土蔵横の撥ね釣瓶は台所の水がめと風呂場の湯船に竹の水道管で連結していて、毎日の水汲みは私の重労働の日課だった。撥ね釣瓶の横には大きな無花果があつて柿の木と共に秋の楽しみだった。土蔵脇には肉桂の木があり細根を掘っては齧ったものだ。

屋敷内を流れる幅一間ほどの用水は、昔は農業用水で樋橋を通り小野川を跨いで流れていた。石垣の間にザリガニが顔を出し、春には子鰯やタナゴが群れをなして上がって来て私たちは歓喜の声を上げたものだ。大盥を浮かべて舟遊びをしたことも懐かしい。

因みに当時畠で作っていたものや自生していたものを数えると、トマト、胡瓜、茄子、人参、大根、蕪、南瓜、まくわ瓜、里芋、蚕豆、いんげん、さやえんどう、十六ささげ、枝豆、ほうれん草、小松菜、

からし菜、つまみ菜、葱、韭、山椒、茗荷、花では芍薬、立葵、コスモス、ダリヤ、向日葵、秋海棠、鶏頭、小菊などがあり多彩だった。

戦前には使用人も多かったようだが、町屋の娘だった祖母が戦時中とはいえ、いっぱしに畠仕事をこなし、肥担桶まで担いだのは曾祖母の教育によるものだったのだろうか。

なお、敗戦直後の東京は食糧難で野菜は貴重であり、月に一度くらい小学生の私がただ一人汽車に乗って、リュック一杯畠の野菜を背負い、東京の家まで運んだものだが、今の小学生を見てみると自分のことながら信じられない思いである。

祖母は小柄だが恰幅は良く、出入りの人々に「ごしんつあま」（新造さま）と呼ばれて慕われていた。美人とは言えないが、笑顔が素敵な人でユーモアのセンスもあり、絶対に人を見下したり、高飛車なもの言いをしない人だった。

いたずら盛りの私は、もちろん怒られることもあったが、本気で物差しを持って追いかけられたことがなつかしい。

浴室は外湯で中庭の隅にあり、母屋から十メートルほど離れていたが、夏など敷石の上を下駄を鳴らして戻ってくる祖母は腰巻き一枚で、おおらかなものだった。

私の耳が痛んだ時には、雪の下の汁で名医ぶりを見せ、腹をこわせば直ちにゲンノショウコやセンブリを煎じて飲まれた。

新しいものも積極的に吸収し、トランプ、花札、ダイヤモンドゲーム、チェッカーなど遊び相手もよくしてくれた。

手先も器用で、お手玉や姉妹人形を作ることなどお手のものだった。が、特に見事だったのは糸手毬を作ること。十数色の絹糸をかがって、

何を見るでもなく正確な幾何文様を刺していくのを啞然として眺めていたものだった。

古和紙を裂いて紙縫りを作ることも学んだが、未だに祖母のように真つすぐで腰のある紙縫りを捻ることは出来ない。

文字もよく書いた人で、巻紙を左手に筆を宙に躍らせて手紙を書く姿が、子供心に不思議だった。分厚い手帖に太い万年筆で書かれた朝鮮旅行記を見た覚えがある。

整理、整頓もキチンとした人だったが、後年蔵をのぞくと「何々が入っていた箱」と上書きされた空き箱が丁寧に紐でくくられて積まれており、私たちは顔を見合わせたものだった。

今、数えてみると私が世話になった頃の祖母は、すでに七十代も後半でさぞ大変だったろうと思うが、常に屈託なく何かをしていた姿しか思い浮かばない。毎日を生き生きと充実して過ごした晩年だった。好奇心を失わず勤勉に生きることが長寿の秘訣だったのかも知れない。

戦後の農地解放で佐原のあらかたの土地を失い、父も三井物産から移って社長となった三井木船が敗戦により整理会社となったために、経済的には祖母の人生の中で最も困難な時代だったと思うが、「困ったものだネ」と言いながら、祖母の笑顔が消えることはなかった。

祖母が亡くなって、佐原の旧宅を守る人間が居なくなつたために、東京住まいの父母は旧宅と遺品を佐原市（現香取市）に寄贈する決心をした。耐震耐火の記念館設立は父母の積年の願いだったが、国、県、市の協力を得て昭和三十六年四月に伊能忠敬記念館の開館が実現した。現在の記念館は二代目で、平成十年に川向こうの旧茂左衛門家の敷地に新築されたものである。

つまるところ、忠敬より五代目の孝のお陰で、忠敬の遺品は旧家に

よくある散逸や売り立てを免れ後世に残ることになったと言える。慶応に生まれて、明治、大正、昭和と激動の八十八年を、明朗でフランスのとれた女性として、常に前向きに生きた祖母の一生は、実に興味深いものがあるが、一代記を書くだけの資料と筆力を持ち合わせないのが孫としては残念なことである。



忠敬旧宅書齋外観

（イラスト・写真 伊能洋）



# タダタカそれともチュウケイ？

佐久間 達夫

今から十年程前、ある会合で、伊能忠敬のことが話題にのぼり、「忠敬の名前の読みは、タダタカかチュウケイか」ということになり、それを傍聴していたS新聞社の記者が拙宅へ訪ねてきた。

左肩にカメラをさげ、右手にメモ用紙を持ったその記者は、応接室の椅子にすわり、暫く雑談をした後、「今日の会合で、伊能忠敬の名前の読みが問題になったが、タダタカとチュウケイのどちらが正しいですか」と、質問する。筆者は、「タダタカが正しいです。しかし、その理由を説明するには少し時間がかかるがいいでしょうか」「結構です」ということになり、次のように話した。

伊能忠敬は、宝暦十二年（一七六二）十二月八日に、佐原村（現香取市佐原本橋元）の伊能三郎右衛門家の一人娘「達」の婿養子に入ったのですが、そのとき仮親であつた千葉県多古町南中の平山藤右衛門季忠が、三治郎（忠敬の幼名）の地位を高めるために、自分の師であつた江戸昌平黉林大学頭鳳谷に願ひ出て、三治郎を形式的に入門させ、名付け親になって貰つたのです（「施門金鏡類録」「伊能家家牒」）。

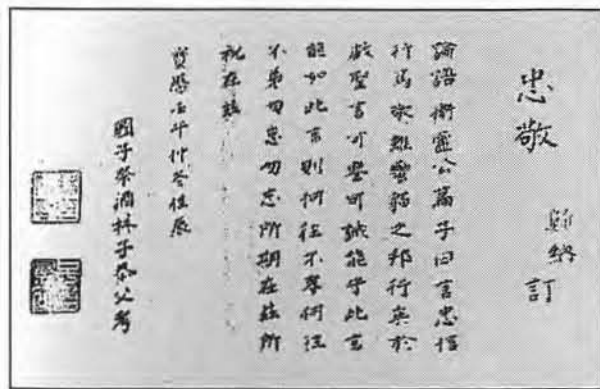
鳳谷は、『論語』第十五の衛霊公から「忠」と「敬」の二字をとり、「タダタカ」と命名し、次のような「名乗書」を忠敬に与えたのです。

資料一 名乗書

・上包

（伊能忠敬記念館所蔵）

・正本



・副  
本

忠敬

靖納  
訂

論語衛靈公篇子曰言忠信  
行篤敬雖蠻貊之邦行焉我  
戰聖言可鑒可誠能守此言  
哉知此言則何往不孝何往  
不弟勿急勿忘所期在茲所  
在茲

寶曆壬午仲冬佳辰

國子監瀨林子恭父考

・覺  
書

林大学の頭  
忠敬と名を  
命名書入

○名  
乗書

名乗 從五位下守林大学頭

伊能三郎右衛門殿

門人平山季忠四子忠敬入余門因与

可称升堂志 負笈慕儒風

努力聖賢業 豈忘螢雪功

祭主 林子恭父

□ □

・正  
本

忠敬

靖納

訂

論語衛靈公篇子曰言忠信  
行篤敬雖蠻貊之邦行矣於  
戲聖言可鑒可誠能守此言  
能如此言則何往不孝何往  
不弟勿怠勿忘所期在茲所  
祝在茲

寶曆壬午仲冬佳辰

國子祭酒 林子恭父考

□ □

・名乗書書き下し文

論語の衛靈公篇に、子曰く、言忠信にして、行篤敬なれば、蠻貊の邦と雖も行われんと。

(以上が衛靈公記述内容)

ああ聖言鑒みるべく誠むべし。能く此の言を守り、能く此の言の如くせば、

則ち何くに往くとして孝ならざらん。

何くに往くとして弟ならざらん。怠る勿れ、

忘るる勿れ。期する所茲に在り。

祝う所茲に在り。

・覚書

林大学の頭  
タダタカ  
忠敬と名を  
御つけ下されし  
命名書入

「名乗書」には「門人平山季忠の四子忠敬、余の門に入る。因つて与う」とあつて、苗字が記されていない。したがつて忠敬を季忠の子どもとみて命名したといえる。なお副本の忠敬の「敬」の字に「タカ」と振仮名がしてある。

また、「名乗書」の表には、「名乗 従五位下守林大学頭」とあつて、折り返した処に「伊能三郎右衛門殿」と書かれている。したがつて、忠敬を既に伊能三郎右衛門家の主人と見ての宛名と考えられる。

このように林大学頭に『論語』の一節から「忠」と「敬」の二字をとり、命名して貰つたのが「タダタカ」である。

次に地元に「チュウケイ」の呼び名が浸透した理由は、訓読みの「タダタカ」より、音読みの「チュウケイ」の方が読みやすく親しみがあるので、愛称として定着したのでしよう。

私が昭和四十年代に勤務していた佐原小学校（現香取市立佐原小学校）では、忠敬が、第一次蝦夷地測量に出立した寛政十二年（一八〇〇）閏四月十九日（太陽暦六月十一日）を記念して、毎年六月十一日に「忠敬祭」という行事が開催された。

○ 忠敬祭の学年別指導内容

- 第一、二、三学年は、学年主任の忠敬についての講話
- 第四学年は、伊能忠敬記念館の忠敬の遺書遺品見学
- 第五学年は、市内諏訪公園に建立されている忠敬銅像周辺の清掃
- 第六学年は、市内牧野の観福寺の塋域にある忠敬の墓参り

佐原小学校の校歌には、

「香取の神に守られて 忠敬翁がしいた道」

と、歌われているが、この行事を職員も児童も「忠敬祭」と、いつているので、子供たちが成人になつても「チュウケイ」の愛称が定着してしまつたのであろう。

資料二 佐原小学校校歌

横井弘 作詞 山本文晴 作曲



一、ゆたかな利根の 歌声に

みのりのときを まねく土

そうだ いのちの ふるさとの

土を愛して 育つのだ

佐原 佐原 佐原小学校

二、香取の神に 守られて

忠敬翁が しいた道

そうだ 教えの 花かおる

道をはてなく 伸ばすのだ

佐原 佐原 佐原小学校

三、かがやく屋根を よせながら

あしたの夢を ひめる町

そうだ 栄える 日本の

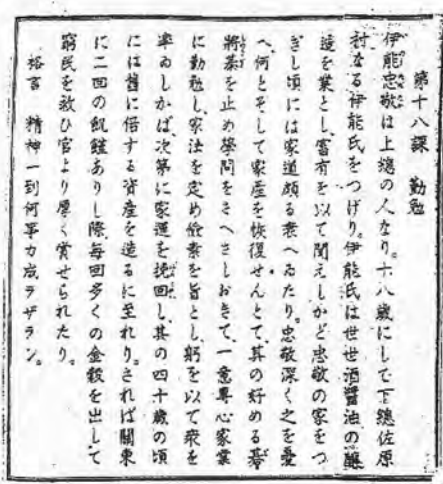
町を仲よく つくるのだ

佐原 佐原 佐原小学校

伊能忠敬旧宅や伊能忠敬記念館の見学者、特に年配の方に「私等は、小学校の修身（現在の道徳に類似した領域）や読本（現在の国語に類似した教科）で伊能忠敬と習ったが、地元の人は、『チュウケイサン』といっているが、どちらが正しい呼び方ですか」と、よく聞かれる。そのときは、前記したような内容を話すと、納得して喜ばれる。

したがって「目くじらを立てて論争する必要はないが、できれば本当の呼び名を知って貰ったうえで、愛称を使ってほしいですね」といって話を終わりにした。

資料三 国定教科書「尋常小学校修身書」



(さくま たつお・伊能忠敬研究家)

## 江戸府内図が一橋大学に 井上 靖子

### 一橋大学付属図書館蔵「伊能図」見学記

我が家で月一回集まっている更紗染グループの一員に布施美佐子さんが居る。折々先祖の話に触れて居るうちに、私の父伊能康之助が一橋大（前一橋高商）出身であることも親しさを増した。彼女は一橋大付属図書館に務めて居たのだ。

そんな折、彼女は図書館に伊能図があることに気づいた。ある日係の人に见たいと話した所、とても大きく開く場所もないと断られた。しかし彼女は思いを捨て切れず、一応義妹伊能陽子に電話したら是非見たいと云われ、積極的に動き上司共々下見をした。ところが本物ではなく印刷物と判明、彼女は大いに落胆したが、渡辺一郎氏が印刷物とはいえ是非閲覧を希望したいという事で見学の運びになった。

急遽夏休み中の八月二五日、渡辺一郎氏、鈴木純子氏、伊能洋・陽子夫妻、布施美佐子氏、井上靖子の六名で国立の一橋大付属図書館へ伺った。同館の利用者サービス主査金子氏の案内で会議室へ。机をいくつか寄せて、貴重な大きな巻物を館員が左右の呼吸を合わせ、しずしずと開いてゆくのを固唾を呑んで見守る。タイトルは伊能忠敬江戸実測図とあり虫食い、破損もあったが全紙を拡げてみると見事で、きちんと色が鮮明だ。特に町中の桃色が好い色合いだ。渡辺氏によれば、昭和二年東京市により二十枚組で配布されたが、散逸しやすく保存状態の悪いものが多いとのこと。世田谷伊能家にあるものも中央部が欠落している。二十枚を一枚に繋ぎ合わせて軸装したものは初めて見るが、一望出来て面白い。いづれ何処かに出展の折があれば、この迫



広がる伊能図・江戸府内図

力に皆が感動するだろう、と締めくくられた。

ついでにと、二階のステンドグラスの採光が素晴らしい大閲覧室も拝見した。表に出ると、見事な二本のヒマラヤ杉が天を指し、昭和初期の伊東忠太氏設計によるレンガ造りの兼松講堂のたたずまいは見事で、それに見合った周囲の建物の間をゆったり爽やかな気分で辞したことであった。

（いのうえ やすこ・六代目伊能康之助長女）

芳名録より

―佐原伊能家を訪れた人々―

伊能 陽子

経天緯地

昭和八年七月二十七日

海軍大将谷 寿夫

昭和八年七月二十七日

海軍少将山田 隆一

第一六号から三七号まで連載し、三十人あまりの方の墨跡をご紹介したが、しばらくお休みをしてしまった。「目録」作成や地図展などに追われていたこともあるが、大きな壁は判読できない、どなたか判らないということ。気を取り直して再開するに当たって、改めて解説や情報をお寄せ頂きたいと、お願いする次第です。

昨年九月、旧呉鎮守府司令長官官舎築百周年記念式典に招かれた。第十一代長官伊地知季珍は洋の母方の祖父にあたり、その遺品を整理して呉の入船山記念館に寄贈、また伊能忠敬測量風景絵図「浦島測量之図」と「御手洗測量之図」二枚もこちらに所蔵されているという、ご縁が重なったのである。

その式典で、代々の長官子孫を代表してご挨拶なさったのが第一七代谷口海軍大将の長女の方であった。今回は芳名録にそのお名前を見つけて、ためらわず取り上げさせて頂いた。

経 天 緯 地

谷口尚真（たにぐち なおみ）

呉海軍鎮守府指令長官

（在任一九二六～一九二八・一九二九～一九三〇）

天地を経緯する意で、天下を治め整えることをいう。

「経天緯地之才 拔山超海之力」 奥信 擬連珠

（新字鑑）



## 芳名録こぼれ話

羽間平三郎さんについては、第三二号に詳しくお伝えしたが、芳名録がご縁でご子孫にお目にかかれたのは研究会大阪旅行の際、もう三年前になる。

今年は間重富生誕二五〇年。その記念展のお知らせを頂いて大阪歴史博物館に伺った。私たちを迎えてくださった浜本さん（羽間平三郎さん長女）、相蘇先生（旅行の節は大変お世話になりました）そして超多忙の中かけつけて下さった羽間平安さんと一緒に、担当学芸員井上さんに解説して頂きながら、大阪町人、測天家、量地家の間重富に接することができた。

何よりも面白かったのは、羽間文庫引き渡しの話。お蔵の中、全部お持ち下さいといったら、表札まで消えていた。あれだけは返してと相蘇先生に申し入れた羽間さんの軽妙なお話に、時の過ぎるのを忘れてしまった。

重富サンと忠敬サン。どんな風に話が弾んだのか、お互いのお国言葉は出たのだろうか。高橋至時先生をはじめ素晴らしい出会いのおかげで、大きな仕事できた忠敬は、幸せだったとしみじみ思う。

二百年後に、子孫たちが心を弾ませて先祖を語り合うことまでは、思いも及ばなかったに違いない。

文化一三年八月二十五日

忠敬宛 間清一郎（重新・重富嫡男）の書簡

―父重富死去 御香儀感謝 跡目相続の件近く御沙汰あるはず―

この書簡は伊能忠敬記念館に収められている。



写真 左から相蘇さん 伊能洋さん 羽間平安さん 陽子さん 浜本さん 大阪歴史博物館にて

（伊能陽子）

大阪歴史博物館・特集展示記録から

大阪歴史博物館  
Osaka Museum of History

はざま しげ とみ

# 生誕250年 間重富

一層を書きかえた浪花の町人天文学者—

平成18年8月30日(水)～10月16日(月) 火曜日休館

大阪歴史博物館 8階 特集展示室



新訂万国全図  
文化7年(1810)

大阪歴史博物館蔵羽間文庫資料

日本最初の官板世界全図 重富も制作に深く関わった

江戸時代の大坂は、アマチュアながらプロをも凌ぐ町人学者を多数輩出しました。幕府の改暦を担った町人天文学者間重富(1756年～1816年)もその一人です。重富は質屋の主人でしたが当時最先端の天文学を極め、ついには町人身分ながら、武士に交じって幕府の改暦事業に従事しました。その後も、幕府の命を受けて、国家的な天文・測量事業に大きな位置を占め、次代を担う研究者・技術者の育成にも努めました。本年は、間重富が生まれて二五〇年に当たります。

大坂町人重富

間重富は宝暦六年、大坂長堀富田屋橋北詰の質商十一屋に誕生した。六男であったが、兄弟悉く夭逝したため16歳で父を喪って以降家督を襲い、十一屋五郎兵衛となった。大業はその字で、長涯と号し、十五楼とも名乗った。十一屋の経営を示す資料は皆無に近いが、重富の後は子の重新が質屋仲間の年寄を勤めているように、当時大坂を代表する富裕な質商であった。

測天家重富

重富は21、22歳より家業のかたわら天文書を読み、やがてその道に志し、32歳のとき天文学者麻田剛立の門に入り研鑽に励んだ。このころから重富は、家業・家事の一切を番頭以下に託し、研究に専念する。麻田門下で頭角を現した重富は、寛政7年暦の改定の必要を感じていた幕府に同門の高橋至時とともに招かれ、当時最先端の日月楕円軌道論を取り入れた方法により、翌年暦の改定を成し遂げた。それ以降も、重富は御用町人として幕府のための天体観測を担う。

量地家重富

重富は天体測量だけでなく陸地測量にも長じていた。享和2年には、幕府から長崎における日食測量と、その途次における陸地測量を命じられ、これを遂行している。また重富は幕府によって制作された日本最初の官板世界全図「新訂万国全図」の制作にも、深く関わっていた。測量機器の考案・製作にも造詣の深かった重富は、上方在住という地の利もあって、幕命を受けて畿内の古寺社に残る古い尺の調査も行っている。

人間貴晩晴

二つの受賞

会員の中富さん、村井さんの慶事を心からお祝い申し上げます。

中富道利さん(福岡県遠賀町)

内閣叙勲 瑞宝双光章(ずいほうそうこうしょう) 4月29日

永年に亘り法務事務官として矯正業務功勞の分野での貢献により受賞

村井純孝さん(北九州市)

国土地理院長表彰 国土交通省功勞者 6月3日

北九州市に建設した「伊能忠敬測量200年記念碑」設置にあたりその達成を図り、毎年献花式を行い忠敬の業績を讃える。また母校小中校に公共基準点等寄贈など社会教育活動にも尽力。

児童・生徒に対する教育の周辺 村井 純孝

平成15年「測量と文化」新年号から

平成14年11月23日、北九州市の一角にあるホテルの一室を借りて、国会、県会、市会の各議員1名ずつ、それに市民の中で日頃教育活動が続いている元学校長の経歴のある女性1名、及び現教育委員会の課長2名を招待し、測量協会から私以外に2名を選出してもらい、専門の司会者をつけて教育座談会を開催したことがあった。テーマとして「小中学校児童生徒を対象とした教育座談会」ということであった。

この座談会を開催するにあたり前もって、出席を予定している或る議員の事務所を訪れ、所長にこの旨を申し込んだ。招請状を見ておら

れた所長は、「測量協会が教育座談会をやるのですか？ちよつと方面違いですなあ」との御挨拶であった。「方面違いですが？」と言えば一寸角が立つかと思ったので、「ええ、まあ少々考えるところがありまして……」。先生がお帰りになられましたら私がこんなことでお願いに上つたと伝えておいて下さい」と言つて事務所を辞去したが、帰る道すがら思った。「あの所長の言つたことは或は世間一般がそう思っているかもしれない。しかし教育とは何だろう。誰が何時何処でするのか？学校の先生だけの仕事なのか。だから間違つてゐる」あれこれ考えているうちに会社に帰り着いていた。

座談会の当日、私はこのことから話を始めようかと思つたが、脱線してしまつては困ると思つたので、予め司会者に頼んでおいたことから始めてもらった。

それは、座談会の本題に入る前に出席者の皆様に「只今日本は平和と思うか、また日本は文化国家と思うか」という二題について簡単に発言してもらつたが、これはこれ等の問題を議論しようとするものではなく、児童生徒の教育問題を討論する上のバックグラウンドとしておいた方がよいと思つたからであつた。

「長幼序ありといひますから寺坂さんからどうぞ」と国会議員のM氏からの発言で始まつたが、流石に元校長を務められた方だけあつて、少年犯罪の低年齢化や女子生徒における性犯罪の問題等核心にふれる問題を述べられ、後段には現在の教育界の在り様は曾つて戦後のGHQの政策の影響があるとも喝破されていた。

この教育座談会は午前9時から始め、11時55分まで熱心な討議が続いたが、閉会の前に一言辞を述べよということであつたので、次のようなことを言つた。

実はこの前年北九州測量協会が主体となつて、紫川ほとりに伊能忠



敬測量200年記念として、忠敬が九州測量の起点とした常盤橋のたもとに小さな石造りの碑を建設したが、この中に付近の小中学校5校の生徒の只今の感想や希望を書いてもらって、これを10年のタイムカプセルとしてこの碑の中に収め、平成23年6月3日測量の日に、この場所で開催して各人に渡すことにしておいた。これは極めて小さな物件に違いないが、子供達に何かの目的や目標を持たせると同時に希望を持たせることは極めて大切なことであると思っている。

もう一つ、2000年10月、土地家屋調査士会がその創立50周年記念行事として東京で全国的規模のシンポジウムを開催したことがあった。この時のテーマは「ひと・とち・みらい」というものであったが、この中にも児童生徒に測量に関心を持たせ、地図に興味を持たせることが重要だと報告されていた旨を結びの言葉としたが新しい教育基本法原案の上程されることがわかっていたので、教育関係の方々の感想や意見を聞いておきたかったが、時間が足りなくて出来なかったのは残念であった。

話は前後するが、私はこの座談会の途中、児童生徒の教育もさることながら、父兄の教育からやらねばと言ったが、地域社会の協力なくしては到底満足な学校教育は出来ないと思っているからである。

いま学校における児童生徒の数を1クラス30人とか25人とかにしなければという話が聞かれる。先生の一人当たり担当能力が減少することである。いま私の手元に私の小学校6年生の時の名簿があるが、1クラス78人であった。これだけの児童を1人の先生が担当していて、これという不祥事もなかった。6年生だけではない、1年生から各学年すべて平和で活気に満ちていた。暴力も登校拒否も学級崩壊もなかった。それは入学する以前から家庭に於ける教育と躾がしっかり行われていたからであろう。生徒は先生を絶対偉い人と尊敬し信頼してい

た。父兄と先生との間も信頼で結ばれていた。子供は学校に居れば安心だと家族の者も社会の人もそう信じていた。昔の人は言っている。「三歳子の魂百まで」と。また「霜を踏んで堅氷到る」とも。幼稚園に入る以前家庭に在る時から長幼の序を教え培い、自分より年上の人を敬い、年下の者を慈しみ可愛がる心を育てて来た。これが、入学してから素直な児童となり、生徒となって成長し、学校を巣立っていく常道で一本道の通路であった。弱い者を愛し育てていくところに正義感が生れ、成長したときに愛国心となって顕現するもののようなのである。

この座談会を行った翌年、何十年ぶりかわからないまま生れ故郷の中学校を訪れた。校長先生と暫く話をしていううちに、GPSや2000年座標の話になったが、先生はそれ等の話を生徒にしてくれと注文を出された。私は「話をするのは簡単ですが、ここで話しているようなことだけでは生徒さんには面白くありません。何か目印でも置いて話をするに致しましょう。暫くお待ち下さい」と言って別れたが、またたく間に一年有半は過ぎてしまった。

平成16年5月7日、ようやく世界座標による中学校の位置を測定し、ささやかなモニメント1基を学校の玄関先に置くことが出来た。式に臨んで生徒代表者の言葉の中に、「今までは緯度や経度は社会科目で勉強するだけで遠いところのもののように感じていましたが、この碑のおかげで身近に感ずるようになりました。これからはこれを意識して生活するようになるでしょう」ということがあったが、この言葉は私としても本当に嬉しいことであった。

実はこの贈呈式の始まる前、カメラを持ったNHKの放送記者が来て、コメントを求められたが、その最後に「このモニメントを寄贈

されて今後生徒さん達にどんなことを期待されますか」という質問があったがこれといつて前以てそのようなことに對する返事など考えていなかったもので、思いつくままを述べた。

それは約40年前、日本の測量隊がサウジアラビア、ヨルダン、一部イラクの国境確定測量を実施したことがあった。その時の成果は閉合差、経緯度共0.04秒という実に立派なもので、この確定の調印式にあつた当事者三国が口を揃えて「日本はアジアの先進国だ、東洋の文明国だ」と絶賛したと聞いていた。その測量報告の最後に「日本には資源がない。だから輸出する物もない。ただ工業技術力だけはある。これを世界の後進国に輸出し供与して平和外交に努むるべきである」という言葉があつたことを思い出して、「今からの若い人は国内にとどまらず世界に發展して行つてほしいと思いますね」と言つた。このことを傍で聞いていた読売新聞の記者が翌日の新聞に「広く世界を感じて」と見出しを掲げてこの贈呈式の模様を報道していたようであつた。

私は今世間という米寿という年齢を迎えたが、その三分の一が戦前、三分の二が戦後という割合になつた。この二つの期間に於いて子供の教育上違つたことを一つあげれば、戦前に於ける親達は自分の子供も他人の子供も分け隔てなく躰をしてたことである。そこには私心も無く私慾も無かつた。善惡を正しくわきまえて適時適切に躰をしてた。それは美しく貴重な行為であり教育であつたと思う。今社会を憂



え国を愛する親達が先ず最初に反省すべきことではないかと思う。

(むらい すみたか・北九州GPS測量協会名誉会長)

## 犯罪の減少を願う

中富 道利

遠賀町報から

警察官や自衛官など、著しく危険性の高い業務で社会に貢献した人に贈られる危険業務従事者叙勲のうち、矯正業務功労の分野で、中富道利さんに瑞宝双光章が贈られました。中富さんは昭和35年、24歳の時に刑務官になり、初勤務は現在の北九州医療刑務所でした。その後、十数か所の刑務所に勤務し、罪を犯した人たちを更正させ、社会復帰させるために尽力しました。そして、平成8年に大分刑務所で36年間の刑務所勤務に幕を閉じました。現在は、虫生津区の公民館長として地域での活動を支えてもらっています。

### 【受賞の声】

受賞の一報を聞いた時は大変驚きました。とてもありがたいです。

これも妻や家族の助けがあつてこそだと思えます。退職して10年経ちますがやはり、増加する一方の犯罪件数、また犯罪者の低年齢化を思うといたたまれない気持ちになります。これからも、今までの経験を生かせるようなときは、少しでも地域に貢献できればと思っています。



人間貴晩晴

「草苔堂蔵書」公開へ

武田文庫開設

— そうたいどう —

会員の武田威さん（東京小平市）から七月に貴重書三〇冊、この十月に四十冊が研究会に寄贈されました。

武田さんのお話です。

「電器屋（東芝）を退職後、伊能忠敬の研究を始めました。自分で調べていくうちに忠敬の周りの人たちや事象に目が向いてしまい、天文、観測、暦、測量、地図など関心の幅が広がりました。今般の本は蔵書とはいえ原本の写本が多い。市販されていない貴重書は小平市図書館、東京都立図書館、前田幸子さんがお勤めの元都立大学図書館などからコピーしたものです」。

研究心はそれらコピー文書を簡易製本にして研究を続けてきた。書の重要項目周辺には書き込みが目立つ。誰か関心のある人がいれば差し上げたいがそれは大変。どうぞ世間で活用して下さいとご決心された次第です。以下の目録をご覧下さい。貴重書の集まりです。

最近の世相は、勝ち組負け組みだとか下流社会だとか、万事、価値観は金の世の中で自己中心が増えてきています。武田さんには、世間にご自身の宝を解放しようとする大きく心豊かな寛容さを感じました。すでに一部書棚や一般図書は近隣の公共施設に寄贈済み。「フランス革命」関係資料はどうでしょうか。昨今の悩みと伺いました。

「徳不孤必夕隣」— 徳ハ孤ナラズ、必ズ隣有リ— 論語

このたびの書籍類は事務所の「安藤由紀子記念書棚」で「草苔堂蔵書武田文庫」として収蔵し、皆様に貸出します。どうぞご利用下さい。

目録の番号で事務局にお申出下さい。送料だけご負担願います。

『蔵書印は

草色入レ 簾青ナリ

苔色上レ 階緑ナリ

の句からとりました。

中学生の頃、父がスラスラと書いて「いい句だろう」と見せてくれました。恰度庭に打水をしたあとだったので記憶に残っていました。其後出典について調べてみましたが判りません。父の創作かも思っています。スガスガしい句だと思います。簾の奥から琴の音でももれてきたら又素敵じゃないですか！

蔵書進呈は忠敬を主にするつもりでしたが、その周辺の人物、事件等に興味が湧くとそれらに目がむいて、我ながら無計画 乱雑 散漫なものに呆れています。リストを見られて皆様もそう思われるにちがいません。

わずかな期待は、うめ草の内容に興味を持たれ新しい発展があったらということ。どの程度皆様の関心が寄せられるか心配、楽しみが入りまじった気持です』

リストには掲載しておりませんが、佐原の案内書やこれまでの忠敬関係の新聞記事など多数の資料も頂戴しました。今の事務所には会報の残部以外の資料はごくごく少量です。これらはこれらの資料調査や広報活動に大いに役立ちます。併せて厚くお礼申し上げます。

（福田弘行）

## 資料編

## 草苔堂武田文庫目録

- 1 高橋景保の研究1 上原久著 1/3 剛立、至時 (写本抄録) 榊講談社 1977
- 2 高橋景保の研究2 上原久著 2/3 五星法、重富、忠敬
- 3 高橋景保の研究3 上原久著 3/3 景佑、地理研究
- 4 高橋景保の研究4 上原久著 別冊 目次、年譜、索引
- 5 天文暦学緒家書簡集1 上原久・小野文雄・広瀬秀雄編 麻田、高橋書簡 (写本) 榊講談社 1981
- 6 天文暦学緒家書簡集2 上原久・小野文雄・広瀬秀雄編 間、洪川、山路、足立、緒家関連書簡
- 7 中国の天文歴法1 藪内清著 天文計算一暦の計算、座標系その計算、太陽と月の運動
- 8 中国の天文歴法2 藪内清著 天文計算一日月食の計算、あとがき、索引  
(写本抄録) 早稲田大学図書館蔵 榊平凡社 1990
- 9 天文暦学史上における間重富とその一家1 渡辺敏夫著 間家の傳
- 10 天文暦学史上における間重富とその一家2 渡辺敏夫著 間重新の傳
- 11 天文暦学史上における間重富とその一家3 渡辺敏夫著 間家の天文観測  
(写本) 都立日比谷図書館蔵 山口書店 1943
- 12 近世日本天文学史一観測技術史一 上ー1 麻田剛立の天文学、ラランデ天文書と間重富
- 13 近世日本天文学史一観測技術史二 上ー2 浅草暦局の活躍と高橋景保、伊能忠敬と日本全図
- 14 近世日本天文学史一観測技術史三 下ー1 儀象史、惑星観測
- 15 近世日本天文学史一観測技術史四 下ー2 天文観測時計、経緯度測定、子午線決定、日食月食
- 16 近世日本天文学史一観測技術史五 人名書名索引 都立多摩図書館蔵 小平市立図書館蔵  
日本学士院日本科学史刊行会編 (写本抄録) 井上書店・臨川書店 1979
- 17 明治前日本天文学史1 渡辺敏夫著 目次、年表、索引
- 18 明治前日本天文学史2 渡辺敏夫著 蘭学勃興の前夜、地動説天文学の紹介、天文学と西洋天文学
- 19 明治前日本天文学史3 渡辺敏夫著 近世の暦法
- 20 明治前日本天文学史4 渡辺敏夫著 天文観測史
- 21 明治前日本天文学史5 渡辺敏夫著 日食、月食 (写本抄録) 榊恒星社厚生閣 1987
- 22 広瀬秀雄著 年・月・日の天文学 自然の文化誌 (写本抄録) 中央公論社 1973
- 23 地図を作った人びと1 地球を測量図書館長、円を四角に、メートル・子午線・新しい世界地図
- 24 地図を作った人びと2 一度の長さの問題、フランス地図を作った一族、ハリソンの航海用時計  
ジョン・ノーブル・ウィルフォード著 鈴木主悦訳 (写本抄録) 河出書房新社 発行時期不明
- 25 「図法抄」地図学用語辞典(中図) (写本抄録) 版元・時期不明
- 26 天文学のすすめ1 古在由秀著 講談社現代新書写本 A5 94 頁
- 27 天文学のすすめ2 古在由秀著 (抄本) 時期不明
- 28 和算家の生涯と業績1 道脇義正編著 (写本抄録) 多賀出版 1985 B5
- 29 和算家の生涯と業績2 小野栄重・測天量地八線表
- 30 和算家の生涯と業績3 天文暦学 測量術 年譜
- 31 和算家の生涯と業績4 中曽根宗加・東北地方の天文学、暦学
- 32 東洋の科学と技術 中山茂 吉田正 橋本敬造論文 (写本抄録) 1982
- 33 天体の位置計算月・太陽の位置略算法 (写本抄録)
- 34 現代天文学講座日食計算 (写本抄録) 恒星社 1956
- 35 惑星科学入門 松井孝典著 (写本抄録) 講談社 1996
- 36 地形投影 測地 測量 (写本抄録) TBSBLE



- 37 天をはかり、地をはかる「測天量地」時計・からくり・エレキテルなど奇器 (写本抄録)
- 38 天文図説 小暮武申の研究業績 小野栄重とその門流 (写本抄録)
- 39 伊能忠敬遺書並遺品目録 佐久間達夫編著
- 40 伊能忠敬の天体観測と緯度経度の決定法 佐久間達夫著
- 41 伊能忠敬 富士山の方位測定 佐久間達夫著
- 42 伊能忠敬測量隊越後基礎資料(土木史研究会資料) 垣見壮一著 1998 A4 38頁
- 43 「大日本沿海実測図」の中図について(学習院女子部論叢第8号) 齋藤仁著 1998
- 44 伊能忠敬と大地測量の技術者たち 藤田覚著 (写本抄録) 日本評論社 1986
- 45 近世日本科学史と麻田剛立 渡辺敏夫著 (写本抄録) 雄山閣 1983
- 46 江戸サイエンス図鑑 伊能忠敬、測量、万歩計、情報伝達、地方の科学者たち (写本抄録)
- 47 間宮林蔵とゴローニン関係 赤羽栄一著 洞富雄著 (写本抄録)
- 48 北極星方位角表 平成10年 海上保安協会 1998

# 単行本

- 49 天文の基礎教室 土田嘉直著 (株)地人書館 1996
- 50 地図の話 武藤勝彦著 築地書館(株) 1983
- 51 経度への挑戦 一秒にかけた四百年 デーヴァ・ソベル著 藤井留美訳 (株)翔泳社 1997
- 52 新制最近世界地図 三省堂編集部 1938 A5 143頁
- 53 人文地図帳 石田龍次郎編 毎日新聞社 1951 B5 変形 120頁
- 54 地球のなぞをさぐる 大塚道男著 (株)藤森書店 1978 A5 222頁
- 55 地図のファンタジア 尾崎幸男著 文藝春秋 1978 B5 261頁
- 56 世界地名の語源 牧英夫編 (株)自由国民社 1980 B6 283頁
- 57 天文用語ハンドブック P・ムーア著 講談社 1980 B5 233頁
- 58 世界文化史年表 [年表と解説 94頁] 芸心社 1983 A4 変形
- 59 重力・地震・地磁気のはなし 萩原・宇津・力武著 共立出版(株) 1984 A5 205頁
- 60 現代天文学小事典 高倉達雄監修 講談社 1995 B5 変形 760頁
- 61 天文年鑑 1997年版 誠文堂新光社 1996 B5 280頁
- 62 地図測量史跡 山岡光治著 古今書院 1996 B5 157頁
- 63 天と地を測った男 岡崎ひでたか著 くもん出版 2003 B5 247頁

# 参考資料ファイル

- 64 地磁気観測所編「地磁気観測所要報」論文ファイル (抄) 昭和31年57年59年  
伊能忠敬時代の日本付近における地磁気偏角について 今道周一  
日本付近の偏角の経年変化について 今道周一  
伊達政宗の磁気コンパスと日本付近の偏角の積年変化 加藤愛雄
- 65 山内家資料 忠敬高知測量での山内家記録 (写本抄録)
- 66 間宮林蔵論集 佐久間達夫編「師弟の絆が北海道の地図完成」  
大谷恒彦著「シーボルト事件の背景と間宮林蔵」ほか
- 67 長久保赤水資料「赤水日本地図編集」
- 68 地磁気資料1 地球磁気観測報告 水路部偏角図 地磁気観測所 地磁気測量
- 69 地磁気資料2 保柳睦美著「伊能図再考・英文」 地磁気読本 地磁気観測所要報  
武田通治著「古代の測量と三角関数、指南車と磁石磁針」
- 70 天文観測資料 「斉田博・天文の計算教室」「日食・月食宝典」「ラランデ暦書管見・抄」



## 「文化の開拓者 伊能忠敬翁」(三)

宮内 敏

### 二、ゴロヴニン事件の背景と経緯

寛政四年(一七九二)九月二十四日、海軍士官アダム・ラックスマンの一行は、ロシア皇帝の正式な遣日使節として帆船エカテリーナ号でオホーツク港を出港、漂流民・大黒屋光太夫(注①)を伴って十月二十日に根室に入港した。ラックスマンは漂流民の返還を示し、来日目的を告げ通商を求めた。(第一次使節)

松前藩と江戸幕府から根室へ交渉の役人が来たが、交渉は松前で行われた。幕府松平定信は交渉を拒否したが「信牌」(長崎入港許可書)を与えた。ラックスマンは今後、長崎へ入港することを約束して、漂流民を引き渡して、寛政五年(一七九三)八月函館から帰国した。

文化元年(一八〇四)ロシア皇帝の重臣レザノフは第二次の使節として、仙台の漂流民四人を伴って軍艦ナジデダ号で長崎に来航した。その際レザノフは十一年前にラックスマンが松前で与えられた信牌を持ち、皇帝の国書を携えていた。幕府に開港と交渉を申し入れたが、幕府は長崎で半年にも亘ってレザノフ一行を町外れに軟禁状態にしたあげく通商拒否を言い渡した。レザノフは持病も悪化し漂流民を引き渡しただけで帰途につくが、憤激した部下たちは千島の択捉や樺太に上陸して番所を襲撃したり、日本船の積荷を略奪したりした。これにより、日本の対ロシア感情は急速に悪化した。

危機感を抱いた幕府は、北方の守りを固めるため樺太や千島の探検

を進めた。松田傳十郎や間宮林蔵の樺太探検はこのような事情の下に行われた。

文化八年(二八一)千島列島南部の測量のため択捉島にやって来た海軍士官ゴロヴニンら八人が捕らえられ、函館に護送された後、松前で二年三ヶ月にわたって幽閉される。(ゴロヴニン事件)

部下のディアナ号副艦長リコルドは、ゴロヴニン救出のため、逆に親世丸の高田屋嘉兵衛を拉致しが、高田屋嘉兵衛とリコルドの努力が実り、双方の捕虜が釈放される。ディアナ号が函館に入港し、ゴロヴニンを乗せ帰国した。

ゴロヴニンは帰国後に『日本幽囚記』を出版した。

#### 『日本幽囚記』に見るゴロヴニン事件

ゴロヴニン事件が鎖国状態にあった日本に与えた光の部分は「通詞との交わり」と『日本幽囚記』の西欧に与えた影響」と題して、宇都宮大学教授松木栄三氏の論文「ゴロヴニンの『日本幽囚記』と仏露辞典・歴史の周辺(3)」がある。

(<http://homepage2.nifty.com/shirooka/sankou.htm>)

以下、松木栄三氏の論文より抜粋し校正したものである。

#### 一、通詞との交わり

二年三ヶ月にも及ぶ幽閉生活を記した『日本幽囚記』の中で「特に優秀だったのが松前奉行の命令でロシア語学習のため頻繁に彼のもとにやってきた村上貞助、それに江戸幕府から派遣されてやはりロシア語学習をめざしてきた蘭学者でオランダ通詞の馬場佐十郎や幕府の司天台暦局の数学者で暦法家だった足立左内である」「村上貞助はたちま

ちロシア語会話を学び取ったし、馬場佐十郎はもともと大黒屋光太夫（注①）からロシア語を学び、そのうえ熱心だったから確実にロシア語をマスターしたらしい。「この通詞は二七歳の青年で記憶力に優れていた。既にヨーロッパの一国語の文法を知っていたので、彼はロシア語でも急速な上達を示した。私は記憶だけを頼りに彼のためにロシア語の文法書を書いてやった」「馬場は独自の露和辞典を作成し、ゴロヴニンとの話で知らないロシア語が出てくると、そのロシア語に対応するフランス語をゴロヴニンに質問し、オランダ人から入手したであろう蘭仏辞典で自分が知っているオランダ語でロシア語の語彙を確かめ、自分の露和辞典の語数を増やしていったのである」「要するに、ロシア語→フランス語→オランダ語→日本語というプロセスでロシア語の意味を確かめ辞書作成を行ったのである」「馬場が文化十一年に出した『魯語』という露和辞典は、ゴロヴニンの助けを得て完成したものである。」「ゴロヴニンらの帰国が決まったあとも、足立左内（ゴロヴニンは彼のことをアカデミークⅡ大学者と呼んだ）や貞助や馬場は毎日のようにゴロヴニンを訪ねて知識を吸収しようとした」「ゴロヴニンはこう書いている。（昼食持参で朝から晩まで座り込んでいた）彼らはデイアナ号の来航までに、それぞれ自分の学問の分野で、できるだけ多くの知識を我われから習得しようとして努力した」「なかでもオランダ通詞「馬場のこと」はタチーシチェフのフランス語辞典から数ページを書き写し、その辞典のフランス語のロシア語説明を日本語に訳そうと思いついた。こうしておけば永久にわからずじまいに終わる多くの言葉の意味を知ることができるからだと言った」「ゴロヴニンは日本人たちの熱心で執拗なロシア語の勉強につき合われて閉口した」「エピソードや、「馬場がロシア語の種痘に関する小冊子を翻訳し完成させた話なども記している」「幕府側はゴロヴニンらの釈放のみに相当の対価を

支払ってでも譲り受けるよう命令している」「おそらく馬場たちの熱意に感じいったのである。」「ゴロヴニンはほかの書籍とともにタチーシチェフの仏露辞典を馬場や足立に贈り、結果として幕府天文台の蔵書になった。」「帰国まじかになった頃に「いつも我われに付き添って好意を示してくれた人々に、われわれの書籍や所持品をみんな贈呈したい」と馬場たちに述べ、実際の別れのときになって「親しんだ日本人たちと別れるにあたって、厚意に応じてみんなにいろいろな贈物ものを分け与えた」とし、書籍、地図、地誌、絵画などを贈った事実を書いている。

忠敬の在籍した天文方は高橋景保の時代に蛮書和解御用局が設けられ、天文、暦、数学、蘭学、通詞等が集められていた。それは我が国の最先端のアカデミックな集団であったに違いない。『日本幽囚記』からは当時の通詞たちが、貪欲なまでに西欧の知識を吸収しようとした様子が読み取れる。明治に繋がる近代化は既に彼らから始まっていたのである。

注① 大黒屋光太夫 第一次ロシア使節ラツクスマンが連れてきた漂流民。後に、幕府の命で江戸に暮らし、江戸の文人や蘭学者と交流し、ロシア地図の翻訳を助けたり、幕府のオランダ通詞・学者だった馬場佐十郎や足立左内、さらには渡辺崋山などにもロシア語をおしえたりしている。

## 二、『日本幽囚記』の西欧に与えた影響

「ゴロヴニンは帰国後、日本での体験を『日本幽囚記』に記して出版し、やがて独・仏・蘭・英語にも翻訳されて西欧でも大変評判になった」「日本人を勤勉で教育のある優秀な民族として好意的に描き十九

世紀欧米人の日本認識をつくる重要な情報源の一つになった」「幕末に來日したペリーもブチャーチンもこの本を読んで、日本に関する予備知識を深めていた」という。

鎖国の時代に、このような形であつたが欧米とつながっており、日本を正當に世界に知らしめたことにおいて、光というべきことではな  
いだろうか。

松木榮三氏は「十九世紀に関する限り、江戸時代の日本を西欧から  
まったく隔絶された社会のように考えるのが間違いなのがよくわか  
る」と述べている。

### 三「青木勝次郎」出所についての推論

青木勝次郎は第六次、第七次伊能測量に参加し、地勢や沿道風景の  
描画をした。また、佐原伊能忠敬記念館所蔵の国指定重要文化財・伊  
能忠敬肖像画の作者であろうとされている人物であるが出所について  
は明らかでない。

(注) 画は青木勝次郎であろう。賛は久保木清淵である。

(大谷亮吉編著「伊能忠敬」)

この人物の出所に關係があるのではないかと思われる資料を、大阪  
府和泉郡田尻町「町史編纂だより」に発見した。

以下「町史編纂だより」に若干の推論を加えてみたい。

田尻町史によると

…十八世紀後半から十九世紀初めにかけて船岡山を巡り嘉祥村と岡本  
村とが激しく争っています。このとき係争地の立会絵図が作成されて  
おり、その製作者が大岡藤二でした。彼は絵図を描くのみならず、「双  
方取扱人」すなわち仲裁人の立場にもなっているのです。…忠敬が文

化二年（一八〇五）八月十八日に大阪入り、多くの人と交流していま  
すが、その中に「兩奉行所絵図師」の大岡藤二がいました。藤二は十  
八日に早速忠敬の宿を訪ね、二十日も藤二と青木常左衛門がやつて  
きています。二十四日は逆に忠敬が訪問したのは青木・麻田立達（剛  
立の養子）足立左内（麻田剛立の弟子）の三人で立達・左内が剛立一  
門の天文学者で暦学者ですから、青木もそうであつたかもしれせん。  
三十日には藤二・左内・間清市郎（間重富の子）らは、忠敬一行を見  
送ります。人のつながる仕事から考えて、藤二は西洋流の測量術を学  
び、正確かつスピーディに絵図作成のできる専門技術者であつたと思  
われます。藤二の名は北攝の山論絵図でも見え、狩野派系統の大岡一  
門の画人である可能性や測量技術の高さが既に指摘されています…と  
書かれている。（田尻町町史編纂委員会だより抜粋）

このことについて本書では次の理由から「青木勝次郎（勝雄）と青  
木常左衛門は同一人若しくは極めて常左衛門に近い同族である」と推  
論した。

大岡藤二は測量術を学び正確かつスピーディに絵図が描ける専門  
技術者であつたというから藤二のような人物は忠敬にとつてまたとな  
い得がたい人材であつたに違いない。藤二の紹介になる青木なら、信  
頼に値する技術者であつたに違はなく、要請したとしても不思議はな  
い。（直接要請しないまでも会話の中で何らかの感触を得たと思われ  
る）

青木と対面したのは第五次測量の時であり、青木勝次郎が伊能測量  
に参加するようになるのは、その後の六次、七次測量であつて時系列  
的に妥当である。

三十日には忠敬のほうから青木に会いに行っていること。（忠敬側

の必要性が感じられる)

青木は麻田一門と関係があり弟子でないまでも天文・暦・測量などに知識・技能のある絵師であつたと思われる。(絵図の描ける天文学者であつたかもしれない)

麻田剛立の弟子、間重富と高橋至時は寛政の改暦御用のため共に江戸にあった。改暦後、間は大阪に戻るものの至時の急死により、高橋景保(至時の長男)後見のため再び出府している。忠敬の五次測量は、その期間中に当る。忠敬は大阪の事情について間重富から十分に聞き及んでいたはずである。忠敬と対面した足立左内は後に幕府天文方に仕出している。馬場佐十郎(天文方、通詞)と共に幕府から、松前に派遣され、ゴロウニンにロシア語を学んでいる。これらのことから、かなり高い確度で推論できる。

この推論について伊能忠敬研究会員で東亜天文学会会員の荻原哲夫氏(「伊能忠敬と麻田派の天文家」というテーマで近世日本天文学史を研究しておられる)から次のようなご指摘をいただいた。

青木常左衛門は、忠敬翁の先生・高橋至時の母の実家の人・伯父(または従兄弟)であり、高橋景保・高橋善助(渋川景佑)にとつても親類である。『高橋景保の研究』245・354・355頁)

『浅野家所蔵「天文方渋川家文書」の調査(Ⅱ)』

<http://ads.nao.ac.jp/cgi-bin/jp/display/rep/vol2765/0001>

の6頁あたり、天保十三年六月頃にも景佑と一緒に登場しますので、青木勝次郎と青木常左衛門が同一人ではありえませんが、青木家の縁者である可能性は検討の余地があるかもしれません。

#### 四 才女栄の大崎家について

教えを乞うべく伊能忠敬研究家の小島一仁先生をご自宅に訪ねた折、先生「最近判つて来た事で」と話されて冊子(伊能忠敬研究二〇〇三年第三号)を持参された。それは忠敬が暦学修業のため江戸へ出てからしばらくして、深川黒江町の隠宅で生活を共にした若い女性で、内縁の妻とされる才女栄のことについて先生が執筆されたものであった。

冊子には最近の女性史研究(注)から、才女栄が大崎家であることがわかってきたこと。その大崎家は潮来牛堀の清水地区で大山守や庄屋を務めた旧家であること等が書かれていた。そして「母堂は銚子の松本家から来た人でその母は佐原の伊能家から松本家へ嫁入りした人である」との一節が目にとまった。

以下はその後の調査結果である。大崎勝子氏のすぐ下の妹である青柳敏子氏より直接お聞きした。

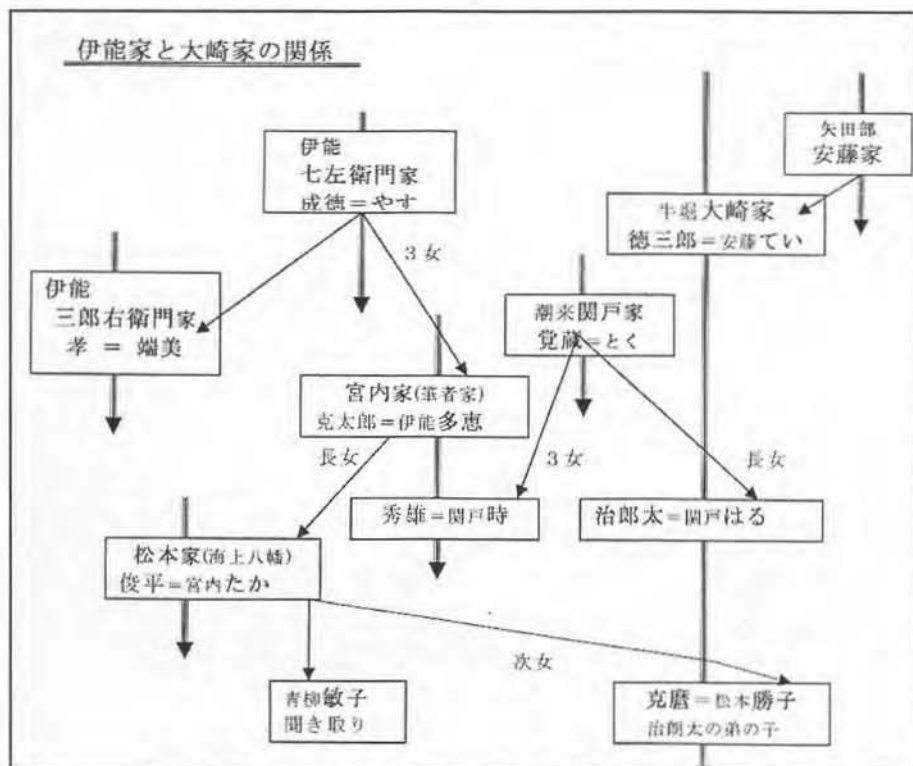
注 桂文庫 主宰 柴桂子「江戸おんな考」第六号

片倉比佐子氏の論文で「大崎次郎兵衛の娘で」とある。

図は伊能家と大崎家の繋がりを示したが、矢田部安藤家を例にする大崎家、七左衛門家、茂左衛門家、滑川家、宮本家、筆者家とも縁戚関係にある。他の家も互いに縁戚関係にあり複雑である。

母堂とは大崎(松本)勝子氏のことであり、その母とは松本(宮内)タカであり、その母が宮内(伊能)多恵である。したがって母堂の祖母が伊能七左衛門家ということになる。また、母堂の義姉が茂左衛門家に嫁している。松本家からは直接伊能家との姻戚関係は此れより以前にも無いとのことである。

牛堀町清水(現潮来市)大崎家の碑文  
 碑は潮来市清水にあり、現在広大な屋敷は鬱蒼とした杉林・竹林に



囲まれている。水辺であつたろう所は田んぼになり、霞ヶ浦を望むことができない。しかし、昔この小高い丘にあつた庭園は霞が浦の帆船や夕日等素晴らしい眺望を想像できる地形にある。大崎家の代々の墓所はこの碑の近くの屋敷内にあり、霞ヶ浦の風景を望むように建てられている。

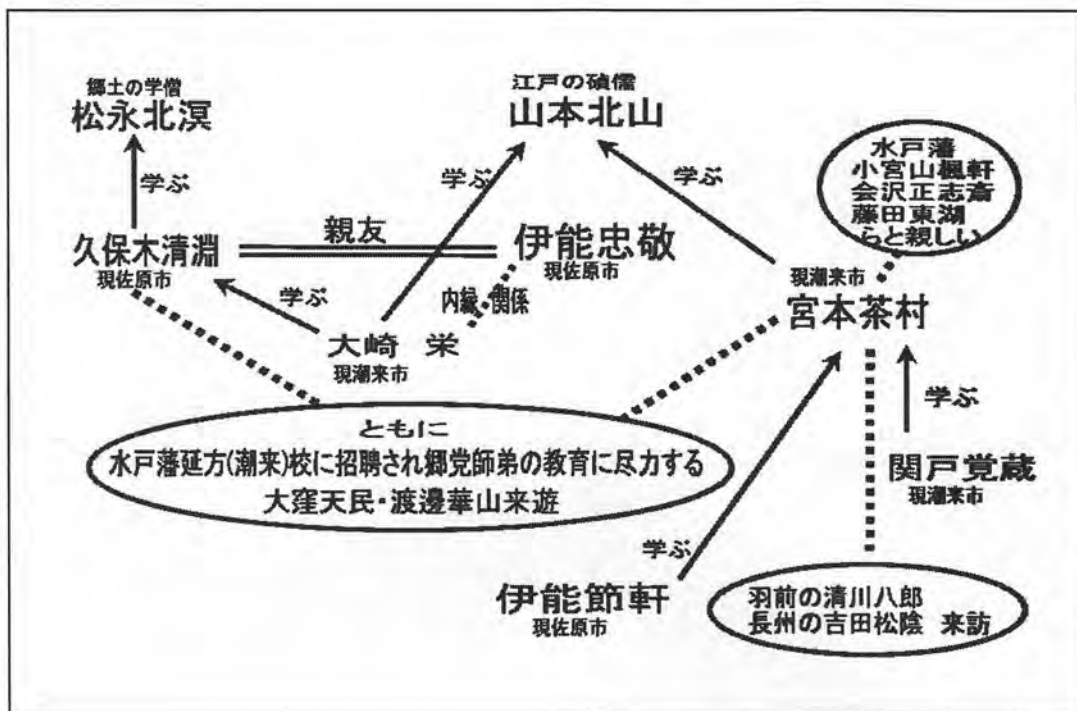
碑文には「……然れども祇だ庭中の少景あれど遠方の多景を延くは鮮し、常州大崎生風采雅致にして其の居所を松涛齋と名づく。簾を卷けば眺望則ち名山大川悉睥睨の中に落つ。……」とあり霞ヶ浦や筑波の山々を眺望できる素晴らしい庭園があつたことが刻まれている。



潮来秋月 南溟  
 潮来村前明月聞  
 月光夜々興潮来  
 素輝何處最堪賞  
 霞浦秋情江水隈

(資料提供 安藤敏武氏)





# 大崎栄と学びの関係

伊能忠敬と久保木清淵は十七歳の年齢差があるが互いに友として親交を深めた。(漢学においては忠敬の師であった)

宮本茶村(注①)は寛政五年(一七九三)生まれなので忠敬とは四十八才の年齢差である。

大崎栄は寛政十年(一七九八)に忠敬の内縁になっている。この時の年齢は不明だが二十〜二十五歳と仮定すると、忠敬とは二十八〜三十三歳の年齢差であり、久保木清淵との年齢差は十一〜十六歳となる。栄が清淵から学んだ場所はどこであったであろうか。忠敬とのつながりは清淵を介してか、興味のもたれるところである。

一方、宮本茶村は九歳より五言絶句の詩を作り非凡な才能で知られていた。文化四年(一八〇七)〜



昭和初期の潮来風情 さっぱ舟  
写真提供 潮来市飯笹義信氏

五年(一八〇七)〜  
兄篁村と共に江戸に出で山本北山(江戸の大儒学者)に入門している。(茶村の年齢十六、七歳で入門)文化八年(一八一二)「古塚」の詩は兄篁村の「両国竹枝」の詩と供に菊池五山の「五山堂詩話」に採録され名声を博した。補遺巻一には、エイの遺稿も収められて

いる。(香取民衆史9 小島一仁氏)

後、文化九年(二八二二)師山本北山の死により茶村は帰郷、親の命により家督を継ぐ、兄は儒学を以って厩橋仙台に遊学。「折衷学を以って当時に聞ゆ」とある。(潮来町教育委員会資料及び仙台人名大辞書より)

大崎栄も山本北山に入門しているが(注②)、前述の仮定からすると、その頃の栄の年齢は二十九〜三十五歳であり、同時期に茶村と同じ学舎にいた可能性が充分にある。

小島一仁先生によれば「エイは山本北山が死去した為、弟子の朝川善庵のもとに身をよせたのでは・・」と述べている(注③)。だとすれば、山本北山が死去するまでの数年間、宮本茶村と一緒に学んだことは確実である。



宮本茶村肖像 筆者家蔵



宮本茶村(水雲)筆 筆者家蔵

年代、家、出身地、それに漢詩という繋がりも見えてくる。どちらが先に入門したのか不明だが、互いに知りあいであったと考えられる。どちらかの入門に何らかの関係があったかも知れない。

注① 尚一郎、号は茶村、晩年水雲山本北山門下、儒学者、考証学者、庄屋、久保木清淵と水戸藩郷校に招聘され、学問教育に専念。水戸藩藩政改革に当って海防教学の意見書上書。梁川星巖、大窪天民、藤田東湖などと親しく、渡辺崋山、清川八郎、吉田松陰などの来訪を受ける。

注② 伊能忠敬研究二〇〇三年第三三号「才女エイは大崎栄のこと」小島一仁氏によると「…三〇歳を過ぎてから漢学者山本北山の門人となり…」とある。

注③ 香取民衆史9「伊能忠敬の家族たち(四)ミチの死後に」小島一仁氏によると、エイの自叙伝に「…余初め総に在りしとき窪木清淵先生に学を受け、幾許(いくだ)たくさんならずして都へ帰る。北山先生に謁する事を得、歳三十四、家と永訣(永遠に別れること)す。寡居(一人身で暮らすこと)多年、羸々(けいけい)孤独、頼るところのないさま)として恃むところなく、紡績の余、書を読み、詩を作る…」山本北山は一八一五年(文化五年)に死去してしまったため、おそらく、その後、エイは、



朝川善庵筆(筆者家蔵)



松陰先生曾遊之地の碑  
銚子市川口神社参道  
1852年(嘉永5年)1月来銚  
銚子港と題する漢詩を詠んだ。  
茶村の弟子宮内(吉川)君浦の  
大きな碑もある

遊「銚子口」 過「潮来」 宿「宮本庄一郎家」  
是夜有「雨」 正月六日夜

萩の兄あて書簡(吉田松蔭書簡集より)

宮本茶村(六十歳)は嘉永五年(一八五二)吉田松蔭(二十二歳)の来訪を受けている。茶村は徳川斉昭雪免運動に参加し、水戸藩赤沼の獄舎に三年幽囚されるが、この間の生き方が若き松蔭に何らかの影響を与えたとはできないだろうか。

北山の弟子であった朝川善庵のもとに身をよせたのではないだろうか。…」と述べている。

久保木清淵と宮本茶村の年齢差は三十一歳、共に延方校に招聘され郷党子弟の教育にあたっている。両名は大窪天民や渡辺畢山らの来遊を受けているが、大窪天民(詩伝)(一七六七年生)もまた山本北山の門人である。渡辺畢山は潮来で宮本茶村家に泊まっているが、銚子を訪れる途中津宮に立ち寄り久保木清淵を訪ねている(佐原市史)。

## 伊能忠敬記念館だより

香取市誕生記念特別展 伊能図里帰り展Ⅱ

10月3日～11月26日

☎0478・54・1118

鷹見泉石コレクションから



古河歴史博物館  
泉石関係資料絵地図選集

## 香取市のホームページから

『伊能忠敬旧宅跡の発掘調査にともない、しばらく(10月中旬から二ヶ月くらい)の間、土蔵・中庭など施設の一部が見学出来ません。店舗・母屋など旧宅はこれまで通り見られます』…発掘?何が隠されているのか。考古学や歴史的関心事の調査ではないそうです。

勤王志士櫻任蔵、天狗党の代表竹内百太郎、実業家伊能節軒(茂左衛門家十代)等も茶村の門人である。(潮来町教育委員会資料)

郷校出身の若者達から尊皇攘夷派組織(天狗党)が生まれた。新撰組局長芹沢鴨も郷校で学んでいる。(つづく)

(みやうちさとし・伊能家縁戚、濱宮内家17代当主)

## 鳥取に残された古星図―天文古書籍研究

上田 勝俊

はじめに

ハレー彗星・ヘールボップ彗星・獅子座流星群や六万年ぶりの火星接近などのスターウォッチング。スターウォーズ・スタートレックなど宇宙を巡る星間ドラマの映画など現在では天文学に親しむ機会が多くなります。私は数年前に家の物置で発見した天文学に関する古書籍を調査、研究して大まかに解明できたお話をお知らせ致します。

### ★古天文学入門

私が以前属していた懇親会で平成八年七月の定例サロンでは「星に願いを・星座のお話と占いのタベ」と言うテーマの催しがあった。この席で鳥取県八頭郡佐治村に近年開館したアストロパーク佐治天文台研究員の宮本敦氏と出会う機会が持てた。宮本氏はその時招かれた講師。スライドを交えた講演はとても楽しく素敵であった。食事の時、宮本氏と同席になって私は家の文庫に収蔵している古書籍「天文略」と星図のことを話し、後日それを天文台に持参することにした。

二日後アストロパーク天文台を訪ねる。次長さん同席で「天文略」のコピー及び星図のカラーコピー、同書に添付されていた中華風の一紙文書のコピーを渡して様々に検討し、文面の解釈で何時誰がこの写本を作成したのか情報を頂くこととした。その後我が家の別棟に係書籍のあることを思い出した。後日、再度アストロパークを訪問、改正図の写本を宮本氏に見てもらいその資料を差し上げた。五彩庵文庫

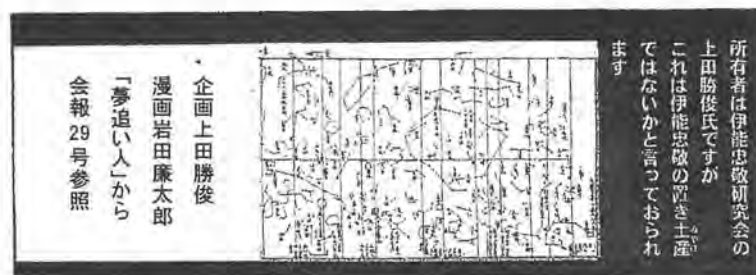
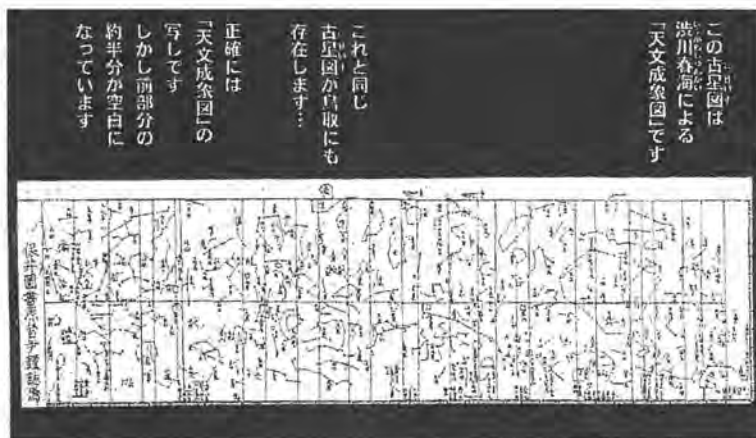
収蔵のこの天文学資料は、あのエレキテルで有名な江戸時代の蘭学者平賀源内の弟子に関わる物で、この星図の元となる原図や歴史的な資料が千葉市立博物館にあることを宮本氏から教えて貰ったから、手始めに同館発行の「星座の文化史」他三冊子を購入して手探りの研究を始めた。

研究のテーマは当文庫に収蔵している前述の資料であるが、全て写本であり奥付が無いため誰がこれを制作しわが家に残していたものか、またご先祖の誰がこれが必要としたかは明らかではない。しかしながら、私の祖父、中村賀豊が様々に歴史書に親しみ相当博識であったようで、最終的には祖父の所有する物だったと考えられた（後に河原町の上田家所蔵品と判明）。では、これらの天文学関係古書籍のルーツは、と言うと宮本敦氏から紹介いただいた「星座の文化史」に記載されていることが一つのヒントだと考えついた。「星座の文化史」は千葉市立郷土博物館が平成七年度に開催した特別展の展示目録。この50頁から51頁に「天象総星之図」が写真によって紹介され、この解説文には次のよう書かれている。

奥書に『北水先生がつくった所の天象総星之図は、縦の長さが八尺八寸ばかり、横が二丈六尺七寸ばかりで、大濶幅にして机の上で開くことが難しい。今、縮小してつくるころ十六分の一也』とある。北水先生とは平賀源内の弟子の朝野北水（一七五八年―一八二九年である）で諸国を歴遊し、天文の講話を行い、「天文説話」他多くの通俗天文書を著し、「天象改星図」は広く流布した。また絵を葛飾北斎に学び、葛飾北水と称した。「―後略―」とあり、我が文庫が収蔵するこれら写本は朝野北水もしくは門人によって作成された物であると推測されたが後に朝野北水自身が発刊した版本であることが判った。

★平成八年九月二日の研究

また、写本「星象改正図」に折り込まれていた一紙文書には保井春海と言う人物による所考図と言う物もあることが書かれており、日付は元禄十二年歳次己卯春三月日と記載されている。元禄時代に居たと思われるこの保井春海とはどのような人物であるかは現在未詳ではあるが、おおかた幕府の天文方に属した高名な天文識者であったと思われる。実はこの文章を打ち終えてから千葉市立郷土博物館発行のカタ



元禄十二歳次己卯春三月日

凡赤點之星多明黃黑二點之星多微也古來有名而今有不見之星  
天淵天鏡蓋幕府之類是也古無名而今有明見之星以黃點記之  
類是也想天經世則天行為變殺有時而星氣有盛衰乎五星運行今  
考之為升降進退退行之時形大光明則是離地之近也順行之時形  
小光微則是離地之遠也蠻人所云人目所睹近者雖小亦大遠者雖  
大亦小是也蠻人又曰太白大日月離地五倍于月此說予不信之  
天平八年十月太白入月星有光見  
貞享三年四月庚辰晨太白入月星有光由是觀之則月上而星下可  
知也他星入月不見則高於月亦可知也異方人謂九重天者牛是半  
非也○天學家云張翼  
日本分野也按張翼北太微官其眾星在我  
國之上以方位考之當已官已陽寧盛而物成始之時也垣內有太子  
五帝座幸臣從官內屏諸者三公五諸侯九卿其北常陳郎將之衛亦  
備也垣外有明堂靈臺長垣少微虎賁此天子布政之宮而文武百官  
悉備故我  
國自開闢帝位連綿不絕君臣道明禮文日盛也軒轅星當四地之分  
野首北星張尾掛柳井形大而宛無似之者方位在牛宮午陽盛之極  
有既昃之勢卻離其稍南諸星上有軒轅三台之尊而有聖者出世之  
時終為匈奴所地是無垣者必地之證也天文地理相應之妙如此也  
矣○今以青點記星六十一座三百單八星此皆古無名而今大見之  
星也新考之屬類以記之星名是亦見後世文物盛之應而已矣  
右保井春海所考予圖之天歷千城則星移座尤為出沒故言天者  
古今其說不一此是春海以渾儀觀之詳正度數記今所見之星象  
云爾

ログ「星の美術展」及び「星の文化史」をなげなく見ていたら保井春海が作ったとされる「天文成象」の文中に「元禄十二年……」の記載があるのを発見。次のごとく解説されている。  
天文成象：元禄十二年（1699）刊。貞享の改暦の後、洪川春海



は自ら改造した揮天儀（こんてんぎ）などの観測機器を使い観測に従事し、新たに六一の星座をつくった。これらの測定値を「天文瓊統」に記載し、春海の子の昔尹（ときた）とともに本図を作り刊行した。これまで星図は中国の星座がそのまま用いられていたが、ここではじめて日本人のつくった星座が登場した。中国星座の天船の北に新しく天帆をおき、孫の近くに曾孫、玄孫を置くなど、新しい星座名は、これまでの中国星座に融合するよう工夫されている。

徳川時代の文化文政時代に話を戻すと、我が文庫所蔵のこれら古文書文献は明らかに幕府天文方の弟子である何人かが、我が家を訪れこの写本を残していったと考えられる。なぜなら、二つ折りの古星図が未完のまままで終わっているところから、先ず考えられることは、これらの古文書提供者が、もしも提供したとしたら、情報を得た人物（「先祖か？」）はきつちりと写本し重要な資料として書き写した本人の名前を書き入れるのが一般的な常識だからである。あくまでも推測の域を出ないがとりあえずこれらの古文書は情報提供者の本人が所持していたものだと考えられるのである。ではその人物とはもちろん未詳であるが全国を遊歴して天文学を広めたとされる平賀源内の弟子である朝野北水もしくはその弟子であったと考えられる訳である。もう一つの観点から推測すれば「天文成象」の一部にある「元禄十二年……」の文章が書かれた一紙文書が何を語るかと言えば、幕府天文方の渋川春海が書き幕府に提出した「天文成象」の写しがとれるのは限られた範囲の幕臣であったろうし愛弟子しかそれは無理だったと言えるからである。ここにきて先祖がいかにこれらの貴重な天文知識を取り入れようとされたかが、ようやく薄明のごとく分析出来るのである。もちろんこの考えはあくまで推測だから今後の研究に待たなければならぬことを明記するものである。後に展示会「天文展」を開催するな

かで北水本人が来訪した足跡の事実を知る結果となった。

#### ★古星図の開眼

それは二枚の一紙文書と二冊の写本を見いだしたことに始まる。そして平成10年春に考古学上の大発見となった「キトラ古墳」の特別番組とが私の好奇心を揺すぶり続けていた。以前「藤の木古墳」が発掘された時期に関係のある新聞記事を悉く切り抜きスクラップ帳に張り付けて親しい知人に見せたことがあるが、1998年春に発見された「キトラ古墳」の報道にはとても関心が湧いた。特にNHKでは「クローズアップ現代」や「NHKスペシャル」として制作、放映されたこれらの番組はとても素晴らしい、録画したテープは今でも私の宝物だ。カメラワークにおける最先端技術と古天文学の融合するさまは、なるほど今の時代だから可能ならしめる技なのだと思うほど十分に興味をひくものであった。この番組でコンピュータによる画像解析の結果と古星図を比較検討されていた同志社大学の宮島一彦教授が手元で見居られた「天象列次分野之図」に強く心を引かれ、何かしらその図面が大変欲しくなり、とりあえず千葉市立博物館の多賀さんに相談したところ、さっそくアマチュア天文家の西山先生を紹介して頂いた。

早速西山先生にお電話をいれてあの図が欲しい事を伝えると「本物は高価なものだしなかなか入手が難しいですね。ただあれの縮小版コピーであれば私も持っていますからA3版のものであれば他の分と共ににお送りできます。なぜあの星図に興味を持たれたのですか」との問いに私は「実は我が家に古くから伝わる古星図があり、未完成のものですが……それと写本が二冊伝わっており「天文略」のほうに折り疊んであったんです」「それは珍しいことです。ぜひ一度拝見したいもの

ですね。場合によっては私がそちらに向向いても良いし、貴方が上京されればその時に私の友を集めて拝見させてもらえば良いし、ともかく近々皆と集まる予定ですからその席で発表することにしませう」とのことだった。

私としては伊能研究会で発表する旨を話すと近日中にNHKTV「堂々日本史」で伊能忠敬を放映するからとても関心があり、その番組を楽しみにしておられると言ったやりとりがあり、私は西山先生に所蔵している古星図関連資料のコピーを早速送ると、西山先生からは分野之図と共に他の天文図のコピーを送って頂いてそれを手にしたときはとても嬉しい限りであった。

# ★古文書籍との出会い

何事につけても、その道をより深く知ろうとしていると向こうから関連資料が誘いかけてくるものだ。名古屋出張の帰途大阪梅田三番街「かつば横町」の古書店に立ち寄ってみたところ、先ず目に入った書籍「倭漢三才図絵」をしばらく見ているうちに「天文」の二文字が表紙に書かれている物を見つけだした。すなわちこれが三才図絵の天文辞書だったのだ。第一巻「天文」から第六巻「歴目吉凶」まで全部揃っていた。なけなしの金をはたいてこれを購入、鳥取にては先ず見いだせない貴重な和本の財産となった。又、後日電話でその店に他に天文関係古文書が無いか問い合わせをしたところ、やはり在った。それは「初学・天文指南」と言うやはり希少本で比較的に安価であったので宅配で送ってもらいこれも購入。なぜそこまでこだわるのかと言うとやはり血がさわぐと言うかなぜかひどく貴重であるからである。その後何回となく西山先生との交信があった。そして、先生のお力を頂き展示会開催へと結び継ぐことが出来たのである。

# ★なぜ古星図は未完成に終わっているのか？

様々な文献や目録掲載写真からの原寸大への複写などを通じて何かしらぼんやりと解って来た感じがした。以降の記載はあくまでも私自身の推測である。

- 1 この古星図は渋川（保井）春海による「天文成象」の写しであると言ったこと。
- 2 元禄十二年が書かれている一枚の文書は右横に続きがあったと思われる。なぜなら千切れていないから。
- 3 もしもご先祖様が必要に迫って購入したとして、江戸や京都から送られた物で有れば未完成の状態であるわけがなく、よって星図上段は以前あったものと考えられた。つまり他の國から送られた品物ではない。

以上のことから、この星図は、現場（河原町袋河原の本陣を営んでいた上田家）で描かれていたからこそ未完に終わっていると思われる。では、その時期を特定するとしたら、天文方が我が先祖の家を訪れた時期に違いないと推測できるのである。ではなぜ未完なのか。一つに星図を描く絵師が何らかの事情で（緊急な）筆を置かざるをえなかった。この場合絵師身内の死亡など異変があったと考えられる。もしくは、ご先祖様が私的に写しをお願いしていたが、何らか公務に急用が生じて出かけなければならぬ事態が発生したからだと考えられるのである。又、古星図に描かれている星の中に赤い朱の色が使用されているところから、これは星の輝度・等級（一等星・二等星など）を示していると思われることで、元の版図には無く後年の作図であると考えられるのである。

このような推測からもしや、伊能測量隊が残して行つた印ではなからうかと考えるにいたつたので朝日新聞掲載の漫画「夢追い人」にそ

の思いを具体的な形にして漫画で掲載にした次第である。まだまだ分  
析しなくてはならないことが沢山あるのだが今後、時間を作って文庫



収蔵の古文書を見てゆこうと考えている次第である。  
次に掲げる図が図録に掲載されていた天文成象と当所蔵の古星  
図断片を比較した内容だ。この様にそれぞれが元の天文成象図に当て  
はめることが出来てやはり写図ではあるが、本物であるという証明に  
なった次第だ。また、土御門家許の朱印がある文書も朝野北水が使用  
した暦の古い図であることも分かり、昔のご先祖さまが伊能忠敬測量  
隊をお接待した歴史的な事実が分かり、いかに天文学を熱心に学ぼう  
としたかが伺い知れることとなった。

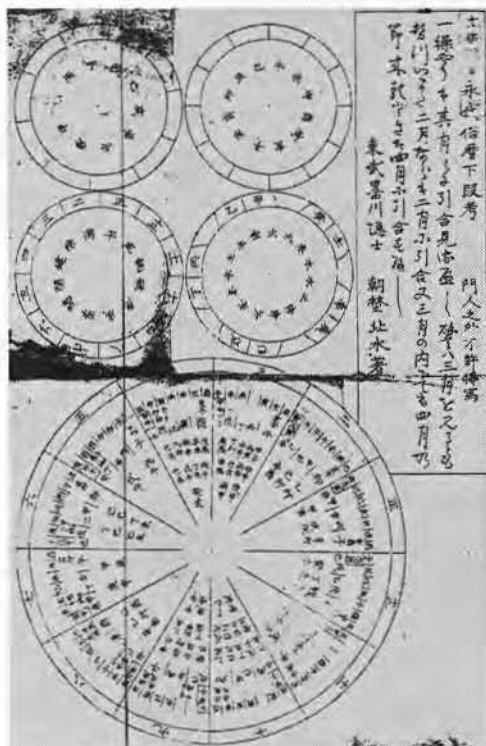
(うえだ かつとし・五彩庵文庫主宰)





国立東京天文台蔵 古星図「天文成象」渋川春海著

「下図はこの範囲」



五彩庵文庫所蔵の古星図断片と曆の占い図写本



## 忠敬と亜欧堂田善

あおうどうでんぜん

松宮 輝明

### 伊能忠敬と俳句の町須賀川

江戸時代一七九五年（寛政七年）より全国の地図測量を始めた伊能忠敬は福島県須賀川の地を三回訪れ緯度の観測をしています。その折伊能忠敬は須賀川の本陣三沢源左衛門宅（南部藩御用）に泊まりました。須賀川の絵師亜欧堂田善は江戸白河藩邸の松平定信の命により江戸で銅版画の修行をしていました。白河藩主（十一万石）より登用されて江戸城で権勢を振るう首席老中（現在の内閣総理大臣）松平定信は日本地図作りを幕府天文方の高橋至時に命じております。松平定信のお抱え絵師須賀川の亜欧堂田善は銅版画で『新訂世界全図』を制作しました。

忠敬は須賀川が白河藩の領地であることは十分に知っておりまして。奥州街道の宿場町で賑わう須賀川本町の本陣三沢源左衛門宅に泊った時に本陣の主源左衛門より町の様子を聞いた事でしょう。本陣三沢源左衛門宅の向かいが駅長・検断の相楽等躬宅です。

俳人でもある等躬宅には元禄時代俳聖松尾芭蕉が八日間逗留し句会を開き、『奥の細道』の紀行文の中で『風流の初めや奥の田植えうた』『世の人の見つけぬ花や軒の栗』と詠みました。俳句の心得のある忠敬と源左衛門との間で芭蕉の『奥の細道』の事などが話題になった事でしょう。地理学者、天文学者である忠敬は種々の地図測量機器を考案、発明した科学者でもあります。忠敬は松平定信の命により本町安藤辰三郎家（現・ホテルサンルート跡）で盛んに作られていた『須賀川ガラス』に興味を持ち吹きガラスの製造工程を見にいったのではないのでしょうか。定信は幕府官吏で蝦夷地を探検した近藤重蔵に須賀川

ガラスを贈っております。須賀川ガラスは薩摩切子より古く江戸寛政年間のものです。

忠敬の須賀川での行動は他藩の史料や書簡などから大変興味が持たれます。残念ながら「伊能忠敬日記」には須賀川本陣三沢源左衛門宿に泊まるの一行のみが記載され、町の様子については触れておりません。

明治六年皇居の炎上により、太政官内に保管されていた幕府提出の伊能全図と資料が全て焼失してしまいました。また、大正十二年の関東大震災により東京帝国大学に保管されていた伊能図（伊能家控図）と副本は全て焼失しました。忠敬は克明に記録していた几帳面な人物です。

忠敬の記録の中に須賀川を訪れた時の記述があつたのかも知れません。忠敬と田善の出会いの後日になります。



須賀川ガラス  
（市原良彦氏蔵）

### 伊能忠敬と銅版画家亜欧堂田善

伊能忠敬の師は幕府天文方の高橋至時です。田善の師は洋風画家、蘭学者の司馬江漢と日本画家の谷文晁がおります。この四人の人物を結びつけたのが首席老中松平定信です。

定信は八代將軍徳川吉宗の孫で「寛政の改革」を断行しました。そ



の政策の中で日本が外敵の脅威にさらされている事を痛感し、しっかりと日本地図が必要でした。定信は秀才の誉れ高い若き幕府天文方の高橋至時に日本地図を作る様に命じました。そこに伊能忠敬が五〇歳で入門してきました。

一方、定信は須賀川の亜欧堂田善を江戸に呼び出し松平定信のお抱え絵師谷文晃に師事させて後、平賀源内の弟子である司馬江漢に銅版画を学ばせました。

松平定信は江戸時代を代表する学者・文化人であったと賞された人物です。その業績は集古十集（全国の一〇〇〇点に及ぶ梵鐘、仏像、兵器などを谷文晃に模写させる）、白河風土記や詩歌、一七〇冊に及ぶ書物を著しました。また、「白河の関跡」の特定や日本最初の町民の為の公園「南湖庭園」の造成、白河焼（白楽焼）、白河ダルマの奨励などいとまがありません。定信に日本地図の制作を命ぜられた若き高橋至時は四一歳の時、心半ばで肺患で亡くなります。その志は松平定信が首席老中に登用された時に生まれた至時の長男高橋景保に引き継がれました。

景保は父の死後十九歳でただちに幕府天文方になり、天文学者間（はさま）重富（しげとみ）の後見役としました。そして忠敬は景保の手付きとなります。

間宮林蔵は忠敬宅に住込み測量術を学び樺太探検で樺太が島であることを確認し北方地図をつくります。後に忠敬の測量機器を譲り受けます。定信の命により一八一七年（文化十四年）高橋景保は「新訂万国全図」を完成させます。忠敬が亡くなる一年前の事でした。この「新訂万国全図」は高橋景保が一八一〇年（文化七年）イギリスのアロスマスの世界地図を原図として天文学者間重富の調査や言語学者の天才とうたわれた馬場佐十郎の翻訳により世界地理図書を参考にしたものです。新訂万国地図（106セ×186セ）は「手書きの地図と亜欧堂

田善の銅版画」のものがあります。銅版画の世界地図完成は田善七〇歳の時でした。



日展審査員 鈴木治平作 第37回日展作品  
「サーカスの休日」鍍金

#### 銅版の皮膜はせしめうるし

今回の調査研究で日展作家の東京芸術大学名誉教授・日展評議員で日展審査員の鈴木治平先生、（千葉県佐倉市）日展の漆芸作家の岩淵浩之氏（会津若松市）、日展作家で彫金家の平山記通氏（千葉県）の協力を仰ぎました。その結果銅版の皮膜は「せしめうるし（生漆の一種）」を薄く塗り乾かします。銅版を腐蝕させる液にはオランダ腐蝕液（塩酸1、塩素酸カリウム0.2、水8.8の割合で混合した酸性液）を用いました。平山氏はこの腐蝕液を東京芸大の石川芳雄教授の講座で試したそうです。寛政時代の科学史より考察しても腐蝕液はオランダからの舶来品だったのでしよう。シーボルトの後に長崎に來日したポンペの医薬品の中に塩素酸カリウムの薬品名があります。「せしめうるし」を銅版に塗る技法は日本独特のものです。

世界地図作りの基本は日本が中心になる様に、これまでの東西半球

図を入れ替えて有ります。副図には京都中心の図を描くなど世界を強く意識した、最初の世界地図であります。地名地形等は幕末、明治の世界地図の基本になりました。日本地図の部分は伊能図を使い未だ測量がされていなかった北海道北部や樺太は間宮林蔵の測量地図を用いました。完成した時には松平定信は老中首席を退いていましたが自分が命じた世界地図ができあがりさぞ喜んだことと推察されます。

世界地図の完成に高橋景保は「白川永田善吉（田善）はその技に優れているのでこの図を彫らせたところ果たして評判通りであつた」と序文に著しました。また、司馬江漢は田善を賞して「田善は日本に生まれし和蘭陀人なり、伊能忠敬は田善の能力を認めている」と司馬江漢が話した内容を伊能忠敬から間宮林蔵に伝えられました。

「この『新訂世界全図』は現在公的史料館では須賀川市博物館、名古屋徳川美術館を含め5点現存します。地図完成時外敵防衛のため太平洋沿岸の各藩に渡されたそうです」（須賀川市博物館館長、横山大哲先生談）

今年の夏休みの企画で田善展が須賀川市博物館で開かれました。今年4月には東京都府中市美術館で「亜欧堂田善の時代展」がひらかれました。このたび、東京芸術大学名誉教授の鈴木治平先生が来須され須賀川市立博物館に案内することになりました。鈴木治平先生は以前より「ぜひ、田善の銅版画の原板を一度拝見したい」との要望をお聞きしておりました。鈴木治平先生は東京芸術大学の教授として文化庁の仕事も多数手掛け、金工作家として日展評議委員の要職にあり彫金作家の第一人者です。四〇年前には水戸の偕楽園好文亭（史跡名勝）の隠釘や引手など復元作業に携わりました。好文亭は昭和二〇年大東亜戦争でアメリカ軍の爆撃により焼かれました。昭和三十三年水戸市民

の強い要望により復元されることになりました。好文亭復元は東京芸術大学の西洋美術研究所、日本画家前田青郁主任教授に依頼されました。襖絵は須賀川出身の東京芸術大学・須田善二（珙中）助教が茨城の四季をモチーフに制作し、金工は東京芸大工芸科山脇洋二主任教授が担当しました。鈴木治平先生は東京芸大の助手として山脇主任教授の元で好文亭の金工復元の作業に従事し完成させました。平山郁夫東京芸術大学学長とは戦争復員で遅れ二年年長ですが、芸大同期で友人です。鈴木先生は、千葉県成田山新勝寺の金工など多くの文化財を手掛けて参りました。江戸時代、亜欧堂田善が銅版画を鋳刻に使用した腐蝕液は「強水」と呼ばれ、液の化学成分は謎で解明されませんでした。

そこで鈴木治平教授の御指導を仰ぎました。強水（ステレキワートル）の成分はオランダ腐蝕液であるとの事でした。強水を硝酸とする説がありますが実験の結果銅版の彫りが平らで鋭い鋳（だ）が生まれませんでした。早速、東京芸大の資料を元に、福島科学博物館「ムシテック」の木村勝彦指導主事がオランダ腐蝕液を調合し銅版画の再現 功しました。



オランダ腐蝕液で銅版画を試作した  
木村勝彦指導主事と筆者（左）

# 亜欧堂田善の銅版画制作用具

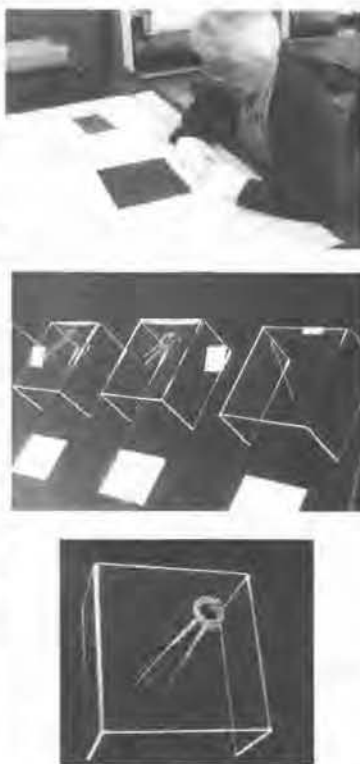
田善の銅版画は「腐蝕凹版技法」といい銅版に薄い被膜を作り線画きし、腐蝕液を塗り、凹版を作りインクを塗り紙をあてがいプレス機にかけて、溝につまっていたインクが紙に写ります。

松平定信公は田善の「腐蝕凹版技法」について「銅版鏤刻<sup>ろく</sup>蜜製<sup>みつ</sup>にあれど、わが国においてなすものなし。司馬江漢といふもの、はじめに製すれども細密ならず。ことにいとう秘して、我のみ成すという事を負うなり。さらに備中松山の藩中にこの頃成すものあり。殊に細密蜜製にたがわぬぞ。予もむかし試みしが、蜜書などにあるを訳させて試みるによろしからず。人をもて、かの土へたずね問たるに、銅版に炭の粉をもて磨き、その板を火のうえにのせ、せしめうるしといふを、ことにうすく銅色に見えるほどに塗るなり。さて其板を三日ほど乾かし下絵をかきて、細きタガネまたは針などにて、其漆をほりふがち、火のあたるところへ出し、薬を筆にて三、四度もつけ、紙に酢を引きて其紙をもて銅の表面にあて、一夜屋の下などえ置、あつき湯もてそのうるしを去て、墨もて摺なり」と退閑雑誌に記しております。  
\*かの土とは松原右仲で備中松山板倉氏の藩儒者。大槻玄沢の芝蘭堂のオランダ正月のメンバーです。

墨は鹿角象牙などを焼きその粉に「名の油」を混ぜ筆で銅版に塗りました。このたび、東京芸術大学名誉教授の鈴木治平先生は博物館の展示品の中で「田善が使用した用具」に着目しました。銅版制作用具の一つにデバイダ（大きさを計る用具・コンパスの一種）があります。

金属製の制作用具は真鍮か鉄の単品のものです。展示品の中にあつたデバイダは真鍮と鉄を接続したものでした。鈴木治平先生は「性質の異なる金属を繋ぐ技術は銅と鉄を高温で繋ぐ『吹き分』と呼ばれ大変難しい技法があります。真鍮と鉄を吹き分ける技術は江戸時代にはあり

ませんでした。高温に加熱した金属を繋ぐ技術は大変難しく研究に値する技術です」との話でした。現在は二種類の金属の接続には特殊な接着剤を用い電気溶接や酸素アセチレン炎などを用います。江戸時代フイゴで炭火に空気を送り溶接をした技術は驚異の技です。田善の用いた制作用具のデバイダは真鍮と鉄の棒を溶接し棒を削って形にしました。このたびの鈴木治平先生の来館は田善研究の解明に大きく踏み込み素晴らしい発見の一步だと思いました。



銅版を見る鈴木治平東京芸術大学名誉教授 真鍮と鉄を溶接したデバイダ

## 田善の新訂万国全図と忠敬

亜欧堂田善の銅版画の中に『新訂万国全図』があります。この地図の制作年代は一八一〇年（文化七年）と記載されておりますが、地図研究者の中では異論がありました。田善は文化七年に銅版画の制作を始め、文化十三年に世界地図を完成させたとの見解です。伊能忠敬記念館と伊能研究会年譜では一八一七年（文化十四年）に高橋景保が『新訂万国全図』を作成したとする見解です。「地図の文化史」の著者、東



垂歐堂田善と医範提綱内象銅版図  
人体解剖図（福島県重要文化財）

洋地理学史の海野一隆大阪大学名誉教授は地図制作の経緯について「世界地図の制作は幕府命令であったために文化七年に手書地図として一応完成させ、それを上呈した。この地図は内閣文庫が所蔵している。その後東アジア方面を改訂し田善に銅版画をゆだね刷りあげた。序文年紀の年代文化七年は手書図のままである」と述べております。文化七年に完成したとの説では伊能忠敬が九州測量の時期で豊前、豊後、日向、大隅、薩摩、肥後の海岸を測量し、大分で越年しましたので、正確な九州の地形は世界地図には書き込むことには無理があります。間宮林蔵は文化六年に樺太が島であることを確認しました。文化八年に間宮林蔵は忠敬宅に住込み測量術を学びます。その後、忠敬の測量機器を譲り受け、樺太探検を再度行い北方地図を作りました。これらの経緯を考察すると、一八一七年（文化十四年）幕府天文方の高橋景保は「新訂万国全図」を完成させたことになります。完成は伊能忠敬が亡くなる一年前の事でした。

「万国世界全図」の完成時期について府中市美術館の学芸員金子信久氏は「世界全図は一八一六年（文化十三年）頃に製作されたと思います。この時期田善は須賀川に帰郷していたので、印刷は江戸で行なわれたとの見方が一般的な見解です。文化十三年頃田善は、一体どこで何をしていただのでしょうか」世界地図を前に話されました。

#### 新訂万国全図の完成

銅版画『新訂万国全図』の完成年代について諸説がありますが、幕府天文方の高橋景保は「白川永田善吉（田善）はその技に優れているのでこの図を彫らせたところ果たして評判通りであった」と序文に著しました。また、間宮林蔵は一八一二年（文化九年）蝦夷地測量のため再び北海道に赴きました。文化九年間宮林蔵の書簡があります。『伊能忠敬子贈別の文一篇あり』として次のように田善にふれております。

「銅版を鑄（せん・ほるの意）せる永田善吉（垂歐堂田善）は、『奥州須賀河（川）』の人なり。初め白河侯（松平定信公）の命をうけて銅鑄（銅版画）の事を司馬江漢に学。しかれども性遅重にして、肄業（いぎよう・技を習うこと）の意）運用にうととして、江漢これをしりぞけしとなり。その後善吉その習ふところに刻意して、逆にその妙を得、銅鑄の技は江漢が上にいでし。江漢もその人をあふり、しぞとけし事自悔して、善吉の技を称誉し、善吉はまことに日本に生まれし和蘭陀人なりと、しばしば伊能子にいわれしとなり」と記しております。司馬江漢が話した内容を伊能忠敬から間宮林蔵に一筆し、その内容を間宮林蔵が水戸藩国家老の中山備中守信敏に話しました。江漢と田善の師弟関係について、中山備中守信敏が『東轅地方紀行』に記しております。

このたび伊能忠敬研究会報第42号によると伊能忠敬本家より忠敬の遺品九〇〇余点が整理され、貴重な歴史史料が近日中に発表されます。



すとの報告でした。一八一七年（文化十四年）七月十六日（旧暦）伊能忠敬江戸日記の中に「今日より御用勤む。浅草御役所（幕府天文方）へまかり越し、江川様よりご依頼越し候う地球銅板全図相調、代金五百匹、地球図江川様本所御屋敷迄差出」との記載です。天文方へ出かけ、江川太郎左衛門様に頼まれた銅板の地球図を五百匹で整え、本所の江川屋敷へ届けております。天文方が地球図の頒布元とは考えられないが入手のルートであったと思われる。江川太郎左衛門英毅（伊豆代官）から伊能忠敬宛ての手紙によると「地球全図御世話にて入手至極鮮明にて、大悦、太陽運行測量について、御回答感謝」とあります。世界全図を伊能忠敬より贈呈され江川太郎左衛門が感激して送った手紙です。開明派の幕臣の江川太郎左衛門は昌平黌の教授で郡山の安積国造り神社の神主の子安積良斎、蘭学者で医師の高野長英等との交遊が知られております。

今後、新しい事実を示す史料の発見が期待されます。この「新訂万国全図」の完成の翌年文化十五年四月十三日（旧暦）伊能忠敬は七三歳で亡くなりました。忠敬は上野源空寺に、師高橋至時（東岡高橋君の墓）の墓と並んで埋葬されました。これは忠敬（東河伊能先生の墓）の遺言によるものです。忠敬がいかに師至時を思慕していたかが解ります。そして至時と忠敬は「日本地図の父母」と称されました。上野源空寺を訪れると、左隣に松平定信のお抱え絵師で、地図の絵師でもある谷文晁の墓の台座に文鳥のレリーフが刻まれ静かに眠っております。

この時期田善は須賀川に帰り遠藤香村（画家、福島県郡山市福良の福良焼の絵師）に油絵を教えていました。

一八二八年（文政十一年）シーボルト事件が起こります。蘭学者で医師であるシーボルトの帰国船より日本地図、樺太地図、葵紋の羽織、



新訂万国全図



同部分(個人蔵)

武具などご禁制品が多数押収されました。この事件はシーボルトの帰国船が台風で坐礁し稲佐海岸に乗り上げた時に数々のご禁制品が発見されたのです。この伊能図、樺太地図持ち出しに連座し高橋景保始め多くの弟子が逮捕されました。景保は獄死し塩漬け保存のあと刑確定時に斬首され無残な最期をとげました。一八二九年（文政十二年）シーボルトは国外追放になりました。

二〇〇一年（平成十三年）、渡辺一郎ご夫妻が米議会図書館で伊能大図を多数発見しました。歴史は非情なのでしょうか、それともシーボルトにより伊能図が持ち出されて良かったのかどうか考えさせられます。





亜欧堂田善の銅版画「大日本金龍山之図(浅草の観音様)」

(須賀川市博物館蔵・福島県重要文化財)

一八二二年(文政五年)田善は須賀川で亡くなり長祿寺に「一翁如旦居士」の法名がおくられ埋葬されました。伊能忠敬、亜欧堂田善の偉業は不滅のものになりました。

筆者が教壇に立っていた日大東北高校の生徒は伊能忠敬、亜欧堂田善の業績を知り「忠敬が須賀川・郡山に三回も訪れ測量している事を初めて知り驚きました。そして偉大な地理学者を身近に感じました。50歳を過ぎて測量始めたのは信念があり目標がはっきりあったのだと思います。今自分は進路選択で悩んでいます。このたび先生の話を聞いて、自分の目標や信念を持つことが大切だと思いました」「田善が洋版画の腐蝕凹版技法を確立したことを初めて知りました。そして新訂世界全図を完成させ国防の上で貢献したことはすばらしい事です。忠敬、田善とも老境に入ってからの仕事で、情熱と粘り強さは誰にでも負けない凄い事だと思います。尊敬します」等の感想が寄せられ感動した様子です。先人の業績は若い学生の心を熱く振るい立たせ、継続して努力する事の大切さを学びました。

完

(まつみや てるあき・新入会員)

あさかの学園大学講師(化学専攻) 陶芸家(日展作家)



記念館へ佐原周辺絵図を寄贈

市川市の山口昭司さんから事務所に地図が送られてきました。標題はありませんが地名、地形から昔の下総の絵図でした。



「私は昭和五年生れ、小学校二年の一学期まで佐原に住んでおりました。昔、私の父（明治二十二年生れ、昭和五十一年没）が佐原の小野川畔の正文堂という本屋さんで、伊能忠敬さんの地図を金五圓で手に入れたとのこと。将来は博物館か忠敬記念館に寄付するようにいわれておりましたがすっかり忘却してしまいました。私が持つていても仕方がないもの、何かのお役に立てればとお送りした次第です」

大きさは、畳三、四枚ほどで色彩豊か。街道と思われる赤線と湖沼、河川がはっきり写る。地名は小判形の囲みに村、字名が入る。

寺社仏閣は鳥居や社に寺社名が添えてある。

「香取郡 高拾三万〇〇拾三石」「母子村より上総国〇芝村<sup>江</sup>老里〇川中央境」など郡の石高と国境までの距離など。取り敢えず山口さんには私見で一報。伊能図ではなさそう。江戸期の道中地図ではないか。詳細は佐原の佐久間さんや記念館で鑑定してもらいますと。山口さんの二報です。

「去る23日のお彼岸に佐原へ参り、亡父の墓前に、忠敬さんの地図ではなく「道中図」であつたことを報告して参りました。

顧みますと小学生だった頃、通学路で旧伊能忠敬郎の小野川の対岸では必ず邸に向つて最敬礼をした記憶がございます。今では学校でそんな仕付けはしてないでしょうね。懐かしく思い出しました」

地図は佐久間さんに見てもらい「これは下総国の絵図だが誰のものかはわからない。以前にも同じ内容の地図があった」と。ご要望どおり伊能記念館に寄贈致しました。他に昭和43年10月27日 東京新聞「新日本史の人間像 伊能忠敬」文  
洞富雄、平成3  
年2月6日 日  
本経済新聞のペ  
イレ図発見の初  
報記事なども贈  
呈されました。



正文堂書店

地図を商った本屋さんは健在でした。明治13年の建築で千葉県有形文化財になつています。登り龍、下り龍を配した看板があり「正文堂」の文字は巖谷修の書。大黒柱は樺(ケヤキ)材、二階の窓は土塗の開き戸、さらに横引きの土戸に板戸と三重に防火設備を伏した土蔵造りです。

(F)

12月1日発売

**伊能大因総覧**

日本全国を網羅した基本図の宝庫！  
皇国全勝期に出現した本邦初の偉大成！

【全巻】 全五冊  
【単巻】 一冊

定価 399,000円（税別）

[illegible]

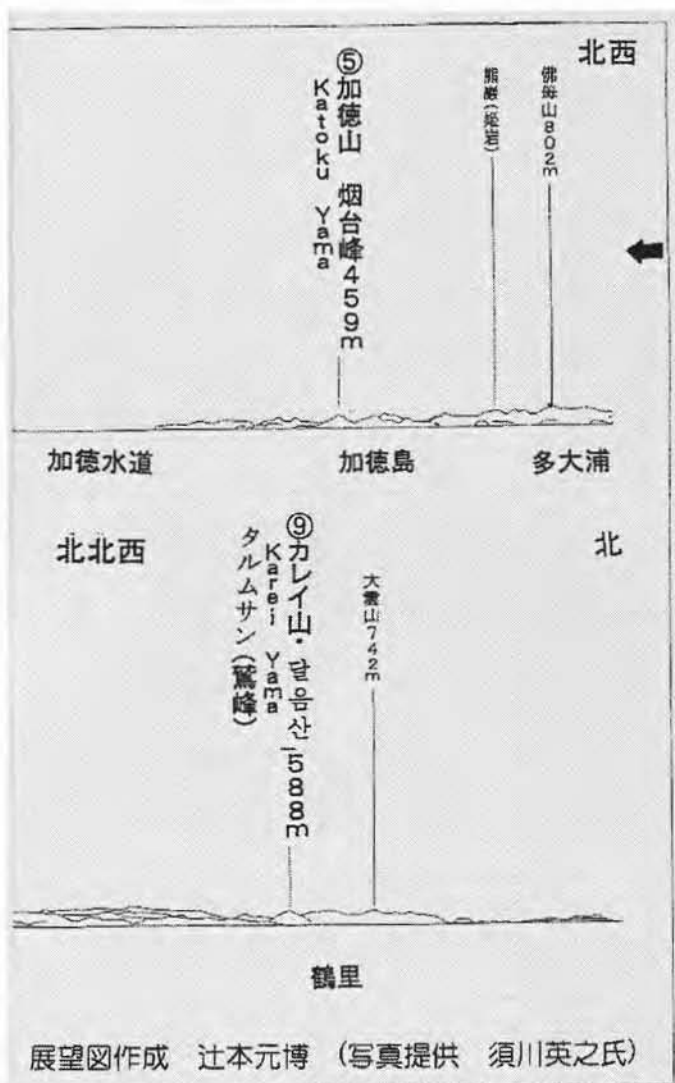
3051-0223-2408

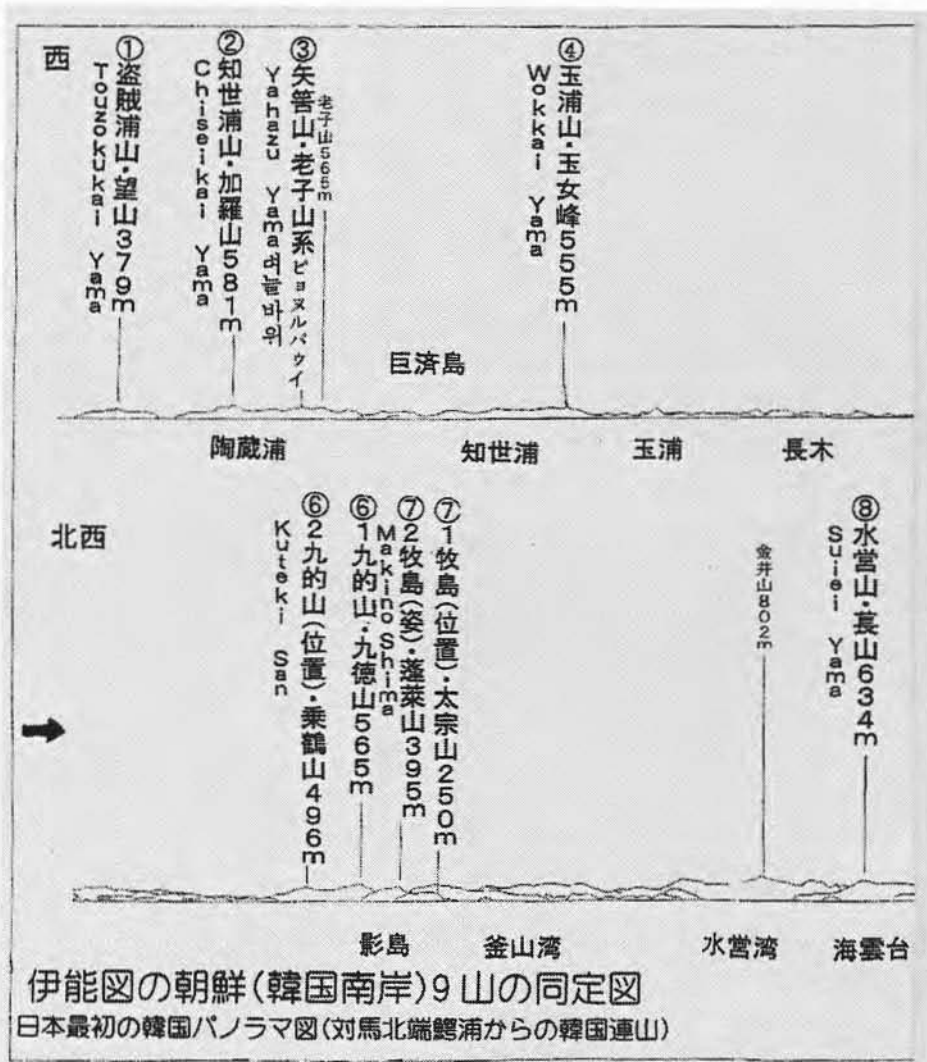
# 伊能図の朝鮮（韓国南岸）九山の同定図 辻本 元博

本図は本誌45号の拙論に掲載致しましたが文字が小さく判読困難でしたので拡大して再度掲載させていただきます。44号の拙論「伊能図にみる朝鮮の山々・その一」に掲載B図及び45号の「その二」の本文を参照ください。筆者が写真を元に描いた日本（対馬北端鰐浦）から大陸文明到来のシルクロード、アジア大陸（韓国）を眺めた最初のパノラマ解説図です。山並みの向こうは遙か長安やローマへの陸路

で、歴史や隣国韓国との地理的關係を実感する資料になります。対馬北西岸の棹崎からは更に西へ西南西の方向に毎勿島、鴻島等の島々が見えます。

連載中の「伊能図に見る朝鮮の山々」の記事は作業進行中の『山島方位記』からの19世紀初頭の磁針偏角解析の調査が中間での一段落つき次第、続編を再開させていただきます。伊能忠敬は『山島方位記』に更なる朝鮮地名と方位角を細かく記録しております。今暫くお待ちください。





## 大図の誤記と二度目のご奉公 辻本 元博

私の故郷兵庫県明石市の伊能大図には立派な誤記の例があります。前から「おっと、待った」と思っていたのです。

「アメリカにあつた伊能大図」97頁下の図明石（137号）キャプションに人丸社を人丸社と書き間違えたとあります。（W）氏の指摘です。確かに書き間違いで柿本人丸を祭った柿本神社のことで人丸が正しい。でもこの図にはもうひとつはつきりとした書き間違いがあります。図の左端の海岸線の測線に「屏風岩」との字がありますが、これを測量日記と照合してみます。

測量日記の第五次測量の71頁の上段最終行から下段の1行目です。「右測量の村々の内、松江村より東嶋村の間を屏風ヶ浦という」とあります。「屏風ヶ浦」が正しいのです。現地を見ても海上に聳える屏風岩などは全くありません。「屏風ヶ浦」は横浜市磯子区や銚子市等にもある地名ですがここの景色は瀬戸内海ではやや異色かもしれません。

### 明石の屏風ヶ浦

ハヤシマ

この辺りは大図の林村（現在の林崎）付近から西へ直接海岸沿いのやや少し赤茶けた長い崖地が累々と続きます。本当に実に長い屏風です。崖と言っても岩の崖ではなく、土の崖です。土が海に洗われ崩落しているのです。現在では海中の離岸堤から始まり消波堤や防波堤、陸上の各種護岸工事はかなり徹底的に為されておりますが、播磨灘は瀬戸内海にしては風が強く、昔は余程大きな台風ときや、春の大風、冬の強い西風するときなどに崖の土が一部で海水で崩落することがありました。

沖に出ると潮流が速く、陸は崖が続くので、西江井地区の砂浜（江井ヶ島海水浴場）と隣接する東島地区にある江井ヶ島港等は古来、風除けや港湾拠点として好適地でした。（尚、江井ヶ島とは島ではなく本州沿岸の東江井、西江井、東島、西島の地区名よりなる総称です）

現在では屏風ヶ浦の崖下の海岸には遊歩道があり、眼前に淡路島を眺める瀬戸内海の絶景です。景色は明るくまさに日本の地中海そのものでロマンチックです。昔、直良博士により明石原人が発見されたという地点には現在も説明板があります。海上でもナウマン象等の化石が網にかかることがあります。考古学でも実にロマンを誘う遊歩道です。

尚、大和の国を離れ西へくるときは、海上遥かの大和や和泉や摂津の山並みもこの辺から見納めとなり、眼前に横たわる淡路島とともに西に小豆島、家島群島、好天気るときは遥か阿讃山地、中国山地の前衛の山々を望み、万葉集や平家物語の瀬戸内海の景色が始まります。

土の崖が続くこの付近では江戸時代から素焼きに好適な粘土があり、瓦製造、蛸壺製造、陶管製造（古くは、魚住のすり鉢製造が有名で、ここのすり鉢は関東の遺跡からも出土する）、良い水に恵まれ酒造業、農業、漁業も盛んで、明石鯛、明石蛸、明石の穴子、明石のべら是有名です。

清酒、明石瓦、蛸壺等の製品を出荷するに東嶋村の良港に恵まれ、船で大阪や遠く四国、九州辺り迄も運び、逆に加古川上流の酒造好適米、九州の石炭、四国の材木、小豆島の醤油や近辺からの瓦窯燃料用の松枝等々が運ばれ村々に馬車の列が続いておりました。

山陽鉄道が旧山陽道で開通後も機帆船による海の物流は産地直送



コースで盛んに続いていたのです。後には酒は甘いぶどう酒も製造して白玉ホワイトワインは台湾でも著名であったと聞きます。今は海上では新たに海苔の養殖が盛んです。

#### 西浦部組大庄屋役はご先祖さま

この日文化二年西暦千八百五年の旧暦十月十一日、明石藩西嶋村止宿の真言宗極楽寺で、伊能忠敬先生ご一行をお迎えした西浦部組大庄屋役、卜部清兵衛は私の曾祖母の実家です。測量日記71頁下段2、3行目。

現在私は恐れ多くも伊能忠敬先生測量当時の宿題である磁針偏角を「山島方位記」からの解析で、全く至らぬながらもお手伝いをさせていただいております、これが二度目のご奉公になる様すっかり頑張ります。

西浦部組とは明石藩（源平の一の谷により西、加古郡境迄）の内、明石の市街の西の明石川より西一帯の播磨灘に面する広い平野を指します。「山島方位記」には西嶋村からの測量データも記載されていることが又なんともうれしい次第です。

故郷である西江井村と東島村の間は崖下に海水浴場があります。海岸散歩の景色は本当に抜群です。

#### 明石のお城と松林

もう一つ、この図で実に興味深いのは明石城です。JR山陽線から見ても現在の明石城には、明石海峡と大阪湾と瀬戸内海を見通す壮大な城壁と南東と南西の立派な櫓はあるものの天守閣が見当たりません。天守閣は無かったのでしょうか。大図を見ると確かに明石城には櫓は有っても天守閣が無く、代わりに真ん中に大きな御殿の屋根が描かれ

ております。

もう一つ興味深いことは明石周辺の海岸にはいたるところにたくさん松の木が描かれているということです。現在ではこの様な松林が残るのは東の須磨浦公園、舞子公園そして西では魚住の住吉神社程度で他は藤江の神社、東嶋の神社に少し残る程度です。往時の非常に濃い松の緑の様子が偲ばれます。明石川の西で王子村付近へ北上する山陽道の街道の様子が現在の国道2号線とは大きく異なることも興味深いところです。

参考文献 佐久間達夫 伊能忠敬測量日記 大空社

（つじもと もとひろ・堺市）



アメリカ大図「明石」部分から

屏風岩  
東江井村

林村

明石城

人九社

## 伊能測量隊の宿泊した家がわかった！

加藤 巷児

伊能忠敬測量隊は、第一次測量から第九次測量の間、現在の埼玉県下に五十一日間宿泊している。一九九九年一月二十九日から二〇〇一年一月一日の間に実施された「平成の伊能忠敬―日本を歩く―伊能ウオーク」と、二〇〇一年三月に当時の代表理事渡辺一郎氏がワシントンの米国議会図書館で、伊能大図の写し二〇七枚を発見されたのを契機に、伊能忠敬に対する関心が全国的に高まった。各地から今まで埋もれていた伊能忠敬に関する情報が、もたらせられる契機になった。しかし、これらの情報は、測量滞在日数の相違も影響あるうが、西高東低の傾向は免れないのは事実であろう。

そこで、埼玉県に在住する一員として（まだ十三年だが）なんとかその足跡の一部でもと思い、私が研究会の雑用のお手伝いをしていた二〇〇〇年一月から九月の間から、佐久間先生の校閲された「伊能忠敬測量日記」から、測量隊の現埼玉県内の歩いた経路や日記の整理をはじめた。

以後、同窓会埼玉支部の会報に紹介記事を出したり、埼玉県立博物館（現歴史と民俗博物館）、地元の狭山市立博物館、となりの入間市博物館と身の回りの調査からはじめたが、なかなか手がかりがつかめな

いでした。私は、二〇〇五年二月までの現役時代に、通勤で毎日、車で入間市

の扇町屋（おうちや）を通っていたのが、これが扇町屋との縁のようなもの。

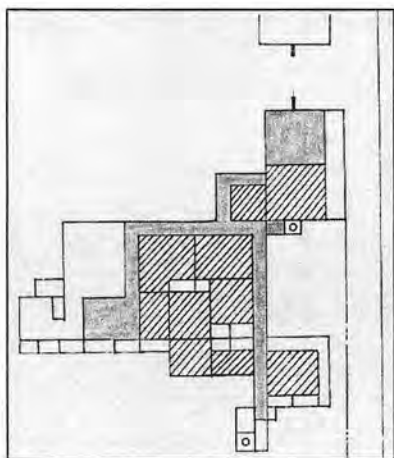
伊能測量隊が、第九次測量の際、文化十三年三月二十六日（一八一六年四月二三日）に武蔵国入間郡扇町屋組頭太七に止宿したとある。当日は現東京の拝島を出て、箱根ヶ崎を経て現埼玉県に入ってきている。日記で、当日通った県下の地名をみると、二本木村、小谷田村、扇町屋がみられる。

慶応二年六月十三日（一八六六年七月二四日）未明、名栗村（現在は飯能市に合併）から起こった世直し一揆は、またたく間に武州十五郡、上州二郡に広がり、十数万人が参加したものになった。

この一揆がこれほどまでに大きくなったのは目まぐるしい経済変動による貨幣価値の暴落する状況のなかで、諸物価の高騰、政情不安による米穀商人の買い占め、売り惜しみが頻発して、米価が高騰、幕府による生糸の販売の規制による販売価格の押え込みなどによる不満が爆発したのが原因とされている。

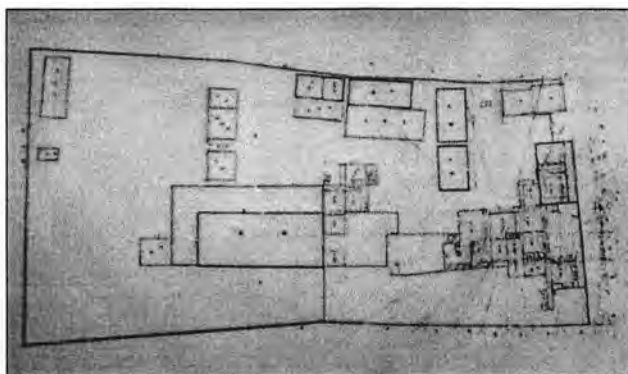
先日、入間市博物館を訪れた際、その一揆に襲われた家の主が、木製書類箱の蓋裏に、その状況を書き残したものが展示されている。これは、何回か目にしていたものだが、これを書いた人の署名までは気がつかなかった。箱に記載されている文章とその口語訳されたプリントが入手できるようになっており、なに気なく最後の署名をみると、扇町屋宿、年寄長谷部太七とあった。

太七の名前に記憶があったので、帰宅して測量日記を調べたところ、測量隊の宿泊したのは前記のように入間郡扇町屋組頭太七とある。



母屋部分見取図

斜線部は畳敷 白部は板の間



長谷部家・下倉屋太七住宅図

1816年(文化13)3月26日伊能測量隊が宿泊している

右側中ほど上の部分が九畳と広い板の間

箱書の日付けは、慶応三年（一八六七）とあるので、測量隊の宿泊した時期から約五十年後になる。おそらく、太七は世襲名だと思った。箱書の署名の太七の左には信恭の名が記されている。

そこで早速、入間市博物館に問い合わせの手紙を出した。一週間位して電話があり、太七の存在が確認でき、長谷部太七の住宅のあった場所も特定でき、資料も見せていただけということ、日時を約し伺った。お会いしたのは、入間市博物館学芸員・事業グループリーダーの工藤宏氏。

お話しによると、長谷部家は、近隣五十六ヶ村をたばねる組合村の大惣代を勤めた家柄で、村きつての豪農商人（新田開発にも功あり）で、藍玉・酒造・米穀・金貸し業を手広く行い、富を蓄積したという。それで武州一揆の際、生酒の入った六尺桶十一本の箍を切られたり、



長谷部家(下倉屋)箱書 長谷部家蔵  
長谷部太七が武州一揆の体験談を書類箱の裏に書き記し、将来のいましめとしたもの(入間市博物館図録)

長谷部家箱書【書き下し文】

慶応二年<sup>丙寅</sup>六月十四日晩七つ時頃、秩父名栗近郷のもの共徒党いたし、同郡飯能村へ押し来たり人家打ち毀し乱妨相働き、同日四つ時頃牛沢村へ押し来たり増田勘兵衛・勘右衛門両家打ち毀すべきの処、兩人より酒食持ち運び河原にて取り留め昼食致させ、色々掛合の上諸人へ米安売致すべき旨書付差し出し候につき、徒党のもの共承知いたし両家打ち毀され候難を通れ候えども、其後安売等は一切致さず、然るに同四つ半時頃右勘兵衛案内にて黒須村を打通り、凡人数式千人余当所へ押し来り、白・赤・鬱金・萌黄其外色々の小切を竹の先へ括り付け、嵐に吹き流し候幡印鉢のものを押し立て、銘々晒木綿の鉢巻襷を掛け、斧・鉋・鋸・棒其外得るものを携え矢庭に浅田茂右衛門宅を打ち毀し、それより当宅ならびに山村善太郎・麻屋徳兵衛・名主伴治都合五軒の家作財宝諸道具等散乱のうえ打ち毀し、剩え当宅の儀は酒造蔵へ押し入り、持ち合わせ居り候生酒六尺桶拾壹本、何れも桶の輪を打ち切り生酒残らず相流し、土蔵居宅共屋根瓦引めくり投げ毀され大乱妨に逢い候、尤も九つ時過ぎ一同退去いたし所沢村へ押し行き候、其節当家五代の祖先吉右衛門家督、正徳五年末五月中取り拵え置かれ候御用書物入並に証文手形入箱三つの内式つ打ち毀され、耆つは破損無く相残り候につき、今般古形をもつて宿内箱屋万次郎へ式つ相誂え都合三つ先規の通り取り揃え置き候、誠に近世未曾有の騒災にこれ有り候えども、不思議に家内老人も怪我無く相遁れ候につき、末代家督人心得のため有増次第記録し畢ぬ。

扇町屋宿

年寄

時に慶応三年<sup>丁卯</sup>十一月廿五日

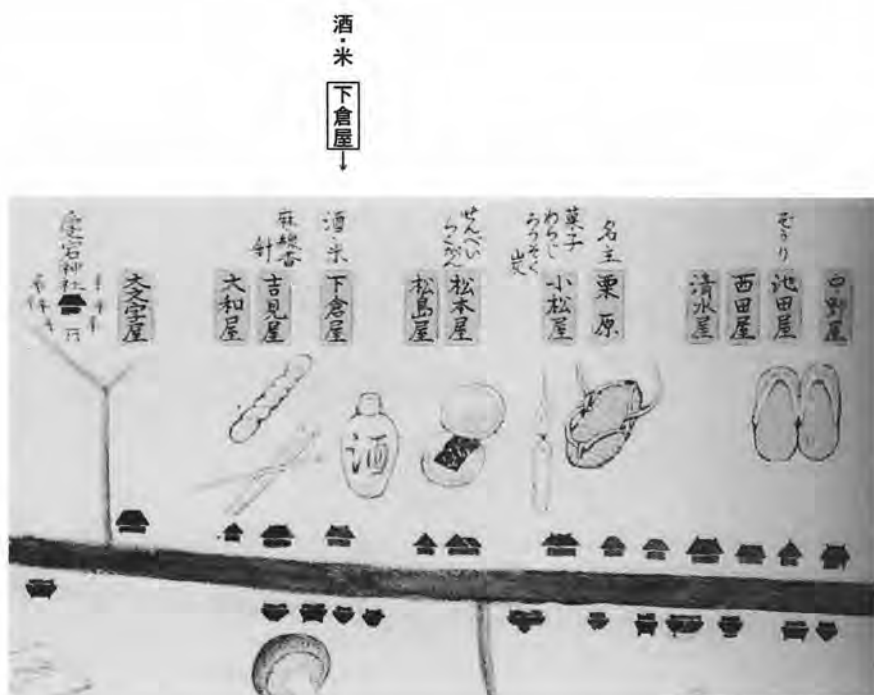
長谷部太七

信恭

仏壇を傷つけられたり甚大な被害を受けた。

長谷部家は屋号を下倉屋といい、安政の開港以降は横浜に支店を出したりしたが、維新時佐幕派だったことも影響して零落したという。

扇町屋の町並図（入間市博物館蔵）



その長谷部家の邸宅は、現在の入間市豊岡三丁目にあり、時たま、解体するときに工藤氏が立ち会い、偶然にも、明治三六年三月に当主の「六十一歳自製図、以曲尺毫寸為毫間」と記載された、下倉屋太七住宅図が屋根裏で発見された。それは、幅一〇三cm×長さ二一九cmのもので、別室の研究室で見せていただいた。工藤氏の説明によれば、何代かにわたって、増改築が繰り返えされているとのことだが、この図にかかっている井戸は現存しているとのこと。

伊能測量隊は永井充房他六名、従者四名、長持の一隊だった。

工藤氏と「どの部屋に泊まったのかな」など話しましたが、「道路側にある九畳と同じ位の広さのある板の間の続いている部屋あたりか」などの冗談もでした。

研究会誌四三号に「埼玉県下に忠敬さんの足跡を探す」という拙文を載せていただきましたが、測量隊の扇町屋村での宿泊した家と場所が特定出来たのではないかと思い、ご報告に及んだ次第です。

(二〇〇六・八・二三記)

#### 参考資料

佐久間達夫校閲「伊能忠敬測量日記」 大空社

「入間市史(通史編)」 入間市

入間市博物館学芸員 工藤宏氏 入間市報「いるま」

「江戸時代の扇町屋村地史」16

(かとう こうじ・元事務局応援)

#### 話題散歩

#### 平安時代の勘解由さん!

勘解由とは

広辞苑によれば、勘解由とは勘解由使の略。勘解由使は平安初期以降、国司などの交替の時、後任者から前任者に交付する文書(解由)を審査した職。令外の官の一。また解由とは「解くる由の意」で奈良・平安時代、国司などの任期が果てて交替する時、後任者から前任者に渡す、事務を滞りなく引き継いだ旨の文書。解由状。とありました。

「枕の草子」についての天文考」での勘解由

以前当会の会員だった故斎藤国治先生の本がみつかりました。

『古天文学の散歩道 天文史料検証余話』 恒星社 1992年

「枕草子は清少納言が書きとめた随筆集で、文学・歴史上はもとより、生活文化史の研究にも価値の高い文献である。その中には、彼女の天文知識や当時行われていた時刻制度についての記述があちこちに挿入されている。なかに当時の天文台である陰陽寮を参観した時の記事があり、平安時代の陰陽寮の外見を述べていて珍しい記事である」

つぎに太政官・朝所と中務省・陰陽寮などの配置図の中に「勘解由」という表示が記録されています。勘解由職の仕事場でしょうか。

江戸の勘解由さん 江戸期の天文学では「幕府天文方は渋谷家・西川家・吉田家のほか高橋家・猪飼家・奥村家など。江戸以外では仙台北板保佑、大坂の麻田剛立とその弟子高橋至時、間重富らの俊英が出た。至時の弟子には下総国佐原出の伊能忠敬がいる(当時の天文観測機器は子午線儀、圭表儀、象限儀、黄赤全儀、垂揺球儀、渾天儀)」「浅草司天台の測量台では簡天儀と象限儀が南北線上に設置されている」などと紹介されています。いずれの図も精密で寛政曆書・儀象図からとなっていました。

(福田弘行)



## 歌舞伎「松浦の太鼓」

杉浦 守邦

筆者は本年五月伊能忠敬研究会が企画した「忠敬先生思い出の地探訪―平戸長崎紀行」に参加して、とくに関心を持った平戸松浦史料博物館の印象記を「平戸藩と山鹿素行」と題して、本誌第45号に一文を載せてもらった。

この文のなかで、平戸藩第二九代の藩主松浦鎮信が山鹿素行の学識を高く評価して、自ら門人としての礼を取っただけでなく、その重病に陥った時は直接病床に侍って看病にあたり、さらに当時將軍侍医を勤め天下一の良医として名高かった井関玄説に往診を求めたが、来診しないので、大名自らが駕籠を走らしてその宅に迎えに行き連れてきて投棄させた。しかし効はなかったというエピソードを伝え、それほど山鹿素行を尊敬し親愛の情を持った人物であったことを報じた。

この松浦鎮信を主人公とする歌舞伎があるので、ここに付け加えてみたい。赤穂義士外伝の一つで「松浦の太鼓」という。太鼓はもちろん山鹿流の陣太鼓である。

この歌舞伎では、松浦鎮信は山鹿素行のもとで大石内蔵助と同門であったということになっている。そして赤穂浪士の一人大高源吾の妹お縫が鎮信の腰元になっていたという設定である。鎮信が突然お縫に暇を出す。それは大石がいつまでたっても吉良上野介を討たないので腹を立てた結果である。お縫が立ち去ろうとするとき太鼓の音が聞こえて来る。鎮信が指折り数えて見ると山鹿流の撥さばきである。この

太鼓の音で大石等が討ち入りしたことを知り、「仇討ちじゃ、仇討ちじゃ」とはしゃぐところで幕となる。この歌舞伎にはさらに俳人宝井其角も登場して、大高源吾の「明日またるその宝舟」の句から討ち入りの決行を察知する場面もあるが、一番観衆に受けたのは鎮信の役を演じる役者が、殿様らしい鷹揚さと愛嬌のある風格を示しながら、太鼓を聞いたとき思わず舞台端に膝で乗り出してくる演技であった。初代中村吉右衛門が演じたが、近年は中村勘三郎のあたり芸となっている。

しかし実際のことをいうと、大石は討ち入りの時太鼓など鳴らしていない。持ってもいなかった。また鎮信とは同門ではなかった。討ち入りを果たした内蔵助良雄の祖父良欽は山鹿素行と親交があったが、良雄自身は素行の門に学んでいない。素行の日記に彼の名は出てこない。大石内蔵助が討ち入りにあたって山鹿流の陣太鼓を打鳴らしたというのは俗説であって、事実ではない。なぜこういう俗説が生まれたか。赤穂藩と山鹿素行との密接な関係が広く知られていたこと、大石等が討ち入りするとき合図として太鼓を鳴らしたに違いない、その太鼓の打ち方は当然山鹿流であったであろうと推測されたこと等があげられよう。

又なぜ鎮信と討ち入りを結びつける歌舞伎台本が作られたか。松浦鎮信が江戸市民に人気のある大名であったこと、山鹿素行と密接な関係を持つ大名であることが知られていたこと、当然大石とも旧知の間柄で、大石が仇討ちをするのを期待していたに違いないと思われる。たこと等があげられよう。

(すきうら もりくに・医学博士、山形大学名誉教授)

## 秋韻夢筆2

安曇野と私

柏木 隆雄

早春賦のふるさと安曇野に新たな愛唱歌が生まれましたが、私はその最終審査を担当させて頂きました。全国から寄せられた「心の詩」は約五百篇。受賞された詩のどれにも共通していたことは、恵まれた自然と向かい合って、自分の言葉で、安曇野を愛する気持ちを素直に表現していることです。

古今、歌いつがれている名歌には、それぞれに背景となる景色や郷土愛が詠われています。恵まれた大自然の中の共同体、安曇野市の誕生を記念した「心の詩」の公募はすばらしい企画でした。二十一回を数える早春賦音楽祭の歴史と、これまで多くの人々に感動を与えてきたその実績があるからこそ、実現したイベントだと思いました。献身的に精力的にこの企画を推進した早春賦愛唱歌代表の西山紀子さんと、ボランティア活動に従事された方々に、改めて敬意と感謝の気持ちをささげます。

私が安曇野と故郷のようなつながりを持つようになったのも、安曇野に心を寄せる一つの詩を発表したことが起因でした。一九八四年（昭和五十九）の秋、東京・新宿の朝日生命ホールで詩と音楽の会主催の「新しい日本の歌」コンサートで、「安曇野早春」（中田一次作曲）が女声合唱により演奏されました。中田一次先生は、早春賦の作曲者中田章先生のご長男です。この歌のことが「信州の旅」に掲載されたことから、安曇野にご縁ができました。早春賦詩碑建立に大変ご尽力された西川久壽男先生ご夫妻から穂高町の早春賦祭りにご招待を頂き、

そして、詩碑の前で、早春賦合唱の指揮をされていた西山紀子さんとも知り合ったのでした。その後、中田一次先生と私が、早春賦音楽祭の何でも相談の役を引き受けることになりました。二人とも日本童謡協会の理事をしておりましたので、童謡協会も音楽祭に全面協力することになりました。

前会長の中田喜直先生、現会長の湯山昭先生も音楽祭の舞台に立たれました。歌手では真理ヨシコさん、川田正子さんなどにも歌って頂きました。この春に急逝された川田さんは、早春賦音楽祭で「とんがり帽子」を歌ったことと、翌日の有明高原寮への慰問は、「忘れることができない思い出」と、ある雑誌に書いておられました。

毎年、安曇野通いをしていううちに、吉丸家ご子孫の吉丸昌昭氏との親交を深め、また今回の、あづみの公園でのコンテスト入賞作品の発表演奏会では、「信濃の国」の作曲者の北村季晴先生のご子孫の作曲家、平岡莊太郎氏を、ご参会の皆さまにご紹介することができました。日本童謡協会賞の「きもちいいね」を平岡氏が作曲されましたが、「信濃の国」とのご縁を思うと感慨深いものがあります。これからも私の安曇野通いが続きそうです。

◇

柏木さんは日本童謡協会理事、詩人で、千葉県市川市在住。安曇野市の早春賦愛唱歌などが公募した『安曇野に寄せる心の詩』吉丸一昌賞作詞コンテストで審査員を務めました。

長野県安曇野市「市民タイムズ」7月27日

（かしわぎ たかお・伊能家番頭柏木家子孫、理事）

## 根本正顕彰会で訪問した伊能記念館 川上清

水戸市のすぐ北に隣接して那珂市があります。ここに15年前、根本正は生を受け、明治から大正の政治家として活躍しました。苦学して東京に出、アメリカに渡りました。10年間で小学校から大学卒業まで進み、米国の強力な支援者の下で学業を修めました。帰路欧州旅行をプレゼントされたことが政治家へ進むきっかけとなり、3度目の選挙に当選してから26年を衆議院議員で過ごしました。

その活躍振りは瞠目のものがあり、義務教育費の無料化を実現し、未成年者喫煙禁止法、同飲酒禁止法を提案し成立させました。東海村の砂防林造成、水郡線の敷設、つくばの高層気象台建設などにも精力を振り向けました。ことに青少年の健全育成には生涯を費やしました。平成13年10月に顕彰会は生誕150年の記念式を行い、顕彰碑を建てて偉業を後世に伝えました。

顕彰会は毎年の行事として、正ゆかりの土地を訪ねる旅をしてきましたが、本年は茨城県南の旧東村（合併で稲敷市に変更）の利根川にかかる横利根閘門を訪ねることになり、ならば利根川を挟んで反対側の伊能忠敬記念館も訪問すべきと提案し採用されました。年代では兩人に105年の差がありますが、ともに地域を代表する偉人としての共通点を持ち合わせました。

旅行本番は9月22日と決まれば、伊能忠敬研究会の私は黙っていることはできず、バス内での事前説明役を申し出て任されました。52人の一行のバスは2台、他の訪問地利根川閘門の説明とダブらないよ

うに連絡をとり、2台のバスをはしごしました。今では9年も前になりましたが、あの伊能ウオーキングで各地に研究会会員として旗を持ち運び、少しずつ子供たちとの交流で説明したことなどがここで生きました。頒布資料はあのかのときの渡辺一郎名誉代表の作による会員募集資料を複製しました。手元にある記録集を中心に学び直し当日に備えましたが、昔の実績がモノを言って忠敬像を自信を持って伝えることができました。

伊能図と衛星図とのすり合わせ図の精巧さと誤差、伊能図の美しさ、当時の象限儀などの器具、量程車、御用旗、茨城高萩の長久保赤水作の地図などを見落とさないよう案内して、無駄を省くこともできました。旧宅や堀、周辺の時代考証がかった町並みに初めて訪れた一行には満足の旅となったようでした。地元で根本正を顕彰する那珂市からの参加者には伊能忠敬の素晴らしい業績の理解は早いものがあつたと受け止め、訪問先にして良かったと思いました。今さらに忠敬先生の偉さと人となりを再認識した次第です。帰りの車中での声も話題がそこに集中しました。実り多かつた日帰り研修旅行となりました。

（かわかみ きよし・根本正顕彰会、茨城県ウオーキング協会役員）



根本正顕彰会

## 秋韻夢筆4

## 上吉田村での晴天測定の星 荻原 哲夫

『江戸の伊能忠敬―伊能忠敬銅像建立報告書―』235・236頁第八次(九州二回目) 測定の宿泊地一覧によれば、文化八年十二月六日(西暦1812年1月19日)に測量隊本隊は上吉田村(現・山梨県富士吉田市)の田辺越後宅に宿泊し天測を行っている。ネット検索からの情報とこの田辺宅の「越後」という珍しい名前から富士講の御師の家ではないかと想像される。

富士吉田駅前の国道の交差点付近と仮定して経緯度を求めると、北緯35度28.6分、東経138度48.1分、海拔約800mの地点で、南西に富士山を見上げるところである。

任意の時刻、任意の場所の星空を再現できるソフトウェアであるステラナビゲータV7、及びStella Theater Proにより、当日夕刻の星空を再現した。後者のソフトは中国名星座のみの表示が出来るので忠敬さんがなじみの星名で表示できて都合が良い。

夕刻に観測を行ったものとして試行してみた結果、次の星々を選定した。

ただし、高度の低い星は大気差が大きいので注意である。

冬の寒い時期なので、観測を短時間で終了させるためには初めの5星のうち3星程度の1時間(半時)以内に収めたいであろう。

地平線のシルエットに南西にそびえる富士山を加えることなどの

課題ができた。このようにして各地で伊能測量隊の観測した星について調査することも意義があろう。

星名	西洋名	等級	赤経 h m	赤緯 ° , °	高度 °	測定時刻	
						時 分	次の測定まで 分
1 勾陳1	α UMi	2.0	0 51.5	+88 22	37.2	16 50	64
2 右枢	α Dra	3.6	13 59.4	+65 20	10.8	17 54	29
3 庶子	5 UMi	4.4	14 28.0	+76 32	22.0	18 23	23
4 帝	β UMi	2.2	14 51.5	+74 59	20.4	18 46	29
5 太子	γ UMi	3.1	15 21.3	+72 34	18.0	19 15	0
6 左枢	L Dra	3.5	15 20.9	+59 41	<u>5.3</u>	19 15	37
7 上宰	θ Dra	4.0	15 58.5	+59 08	<u>4.7</u>	19 52	24
8 少宰	η Dra	2.7	16 21.6	+62 00	<u>7.5</u>	20 16	46
9 上弼	ζ Dra	4.2	17 08.4	+66 00	11.5	21 02	

(おぎわら てつお・東亜天文学会)

# 越後国岩船郡内沿海測量について (四)

1 「測量日記」と「与惣左衛門覚書」より1

風間 広吉

## 二、伊能忠敬「測量日記五」(享和二壬戌歲沿海日記)

伊能忠敬記念館蔵

「測量日記」は忠敬が五十五才から七十一才までの十六年間、日本全国を測量した折の日記で全二十八冊。第一冊から二十六冊までが忠敬の自筆で、残り二冊は文化十二年から同十三年の熱海より江戸までの測量日記で忠敬は同行せず、門人が出張したときの日記である。当岩船郡内での測量は第五巻に記載されている。

同十六日(新曆一〇月一二日以下同じ筆者注)

朝小雨、六ツ半前温海出立、昨日残番坪ふはしむ、釜屋坂家十五軒、温海村之口釜屋、温海と釜屋之間小川あり、上には橋を渡、海際にはなし、海辺奇石おほし、大岩川村庄内領家四十三軒、小川あり、村中に橋有、橋渡テ大岩川村同領家五十一軒、両村大岩川村と云、小岩川村同領家七十三軒、早田村同領家七十五軒、山下ニ住ス、此辺海中ニ岩嶋あり、鼠ヶ関村庄内の番所あり、興屋共家八十三軒、川を越て同村之

内興屋ニ而休、宿佐藤長右エ門、温海ふ二里半と云、此所雨頻ニ降、夫ふ原海村、鼠ヶ関枝郷家四十八軒、是迄出羽国田川郡ニ而庄内領なり是ふ越後国岩船ニなる、中浜村米沢領御料所家廿七軒、岩崎村同断、二十四軒、中浜ふ是迄海中海岩奇岩おほし、温海ふ二十五丁、大岩川三十丁、小岩川二十一丁、早田一里、中浜ふ一里三十一丁、岩崎府屋町基石、合四里三十五丁大川村又府屋町と云、御料所米沢預、家数九十八軒なり、温海ふ四里半、鼠ヶ関より二里と云此村海へ二三丁、山間ニ而田地横四五丁長十丁斗、八ツ頃着、止宿又左エ門家作よし

同十七日(一〇月一三日)朝ふ晴天、逗留朝飯後、米沢郡方下役塩野町詰(代官所)米沢預御料所掛栗原清右衛門見廻ニ来ル、是ふ海辺通行難所之相談ニ及、此後日々御料所之内休泊、并荷物等之指図をなす、此辺海中ニ小嶋あり、栗嶋と云、長三里、横乗越一里のよし、則栗嶋村ニ而前後二ケ村、家数寺二ケ寺、杜家一軒、合百十軒斗り、御料所米沢預之内なりと云、此夜晴天測、此先村々役人見回ニ来る

十六日は富樫又太郎家に泊、生憎の雨で天測できず、お泊りとなる。国境のために慎重を期されたものか。一泊のうえ晴天となり二十星を測り首尾を果した。乗越しは峰を越えての意。





府屋・止宿又左衛門(富樫又春家)二泊



寒川旧道にかかる木橋。海府の道は狭かった。今はバイパスが通る。

忠敬は寝屋より舟で芦谷に渡る。同夜は寒川泊。市助(木屋齋藤ムツイ家)方で十一星の天測を行っている。牡丹岩不詳。

同十八日(一〇月一四日)朝六ツ半前大川村則府屋町出立、此海辺ハ白砂、左は高山、十六七丁行、夫ふ坂を上り下りて碁石村、同前、家三十軒、此間板屋沢村地面あり、庄屋加藤儀助と云もの送迎す。根屋(寝屋)村村上領、家三七軒、小手澗あり、五十石ふ百石ノ船を入ル、此村ふ大難所にて、数度山坂を上下す、海岸奇岩おほし、中ニホコ立、牡丹岩等あり、予ハ乗船して芦谷ニ至ル、鵜泊村、村上領、家二十九軒、芦谷村御料所米沢預家十三軒、寒川村同断、家八十二軒、大川ふ三里、予ハ午前二着、測量者ハ八ツ後二着、予昨日ふ持病痰、此夜曇、雲間測、止宿市助家作よし

天嶮ながら名勝笹川流れである。奇岩奇石、岩上の青松に嘆声をあげた忠敬であったが、郡蔵と二人の舟行。陸を見れば難所つづきと見える。海ぞいの測量に思いをやる忠敬であったにちがいない。藤助宅では不測量とあるが北極高度測量記には四星が出ている。藤助宅は現在不詳である。

同十九日(一〇月一五日)朝六ツ半頃寒川村出立、海辺白砂七八丁ニ而海岸岩山を上るニ甚嶮岨なり、下れば脇川村同断、家三十五軒、蓬萊岩あり、脇川の際今川村同断、家四十七軒、予と郡蔵ハ此所ふ乗船、此間板貝峠あり、板貝村同断、家十四軒、海岸岩石大難所、舟ニ而海岸海中を望ハ奇岩奇石おほく、山林下、岩上の奇松絶景無類なり、山越の難所も見ゆ、笹川村同断、家十三軒、此村へ船ふ上る、休、宿三左衛門、貞実の者也、海岸ハ白砂、左ハ山々重る、桑川村同断、家三十六軒、新保村同断、家四十四軒、寒川ふ三里、八ツ前二着、止宿藤助、此夜曇天不測量、夜五ツ半頃ふ雨、七ツ前に至る

同廿日(一〇月一六日)朝ふ曇天、六ツ半後、新保(浜新保)出立、海岸白砂、夫ふ鳥越と云岩海へ出る、卑<sup>ヒクミ</sup>を上下す、夫ふ又馬下の大峠を上下し、又岩石ノ上を通る、無類の大難所なり、馬下峠の下り口ニ而霰雨ニ遭、馬下村御料所米沢預、家数三十七軒、早川村右同断、家百十五

軒、此所休、宿市右衛門、夫々度々雨、吉浦村同断、家百十八軒、此所迄栗原清右衛門送来て別、柏尾村村上領、家七十軒、新保、九ツ後二着、止宿庄屋惣兵衛此夜大曇不測量、里人云、根屋（寝屋）より新保（浜新保）迄を下海府と云、馬下より岩ヶ崎迄を下海府（上海府）と云、旧榊原領なりと、村々の人品古風にして敦朴なり、此六月、測量御用の御触ありしニ、此山坂難所の道路を盆中の遊ニ普請し、成ハ新道を造りしよし、此御料所、御預の海府百姓の如き貞実なるハ米沢領ニハなしと栗原氏物語られし、右村々嶮岨にて、馬の通路もなければ人歩ニ而、此嶮岨も送んも難かしと、長持、馬付荷物ハ大川、駅路村上・瀬波へ岡を送らんと談せしニ、村々役人云けるハ、長持の中をさへ分ケ荷ニなし給はハ如何様ニ成しても持送り侍らんと、達而乞しまま、若し海上安穩ニ風波なくハ舟にて止宿まで村継ニ相送り、風波あらハ、長持の中を不残取出し、空長持になして持運候様申談しけるニ、海府通行三日之内風波なく、長持、馬荷物とも二人歩の労もなく三泊まで舟送になりける、是ハ村々貞実の徳ならんと感じけり 此日、村上内藤豊前守勘定方橋本喜惣太見舞来る

文中、卑（ヒクミ）とは低地という程の意。国道三四五号線が通じた現在からみれば、馬下の岩山は言語を絶する大難所であった。加える

に穀の襲来である。米沢預領塩野町代官所の栗原清右衛門は吉浦まで見送って帰任している。同日は柏尾の庄屋惣兵衛（現佐藤修吉家）宅に投宿。雨は止まなかった。

ところでここにて忠敬は、村人を大変褒めそやしている。

「村々の人品古風にして淳朴なり」と。前日の休憩宿、笹川の三左衛門をも貞実の仁であると記している。米沢預領の役人栗原清右衛門も、海府の百姓のような貞実なものは米沢領では見られまじと忠敬に証言している。懇ろな接待をさすものではない。山坂の難所の道路の補修やはては新道を作設したことに対する誠意に感じ入ったのである。大量の荷物運搬にも、険阻な岩場を危険を冒してまでも無事送り届けようとした誠意。三厩までの往路のトラブルや、つい数日前の酒田での出来ごととも記憶に新しかった。心暖まる思いの海府測量行であった。忠敬の測量日記に、トラブルの記事があっても、このような記述は稀なことという。

懸念した荷の継ぎ送しも、三日間とも風に恵まれ舟送りですんだ。「村々貞実の徳ならんと感じけり」と結んでいる。

同廿一日（一〇月一七日）前夜風雨なり、朝曇る、六ツ半頃柏尾出立、此朝橋本喜惣太見舞ニ来る、間嶋村村上領、六十二軒、野潟村御料所中村藤十郎代官所、家二十七軒、大月村同断家四十二軒、岩ヶ崎村村上領家十三軒、瀬波町村上領、小湊、家数百九十七軒家作よし、休憩近蔵、家作よし、柏尾より瀬波迄二里十三町五十七間、此所川湊なれと川浅し、漸三四尺なり、夫々瀬波より一里〇九丁、合三里廿二丁五十七間、

岩船町村上領、家数七百九十軒、内二寺十一軒  
 社家二軒、九ツ半頃二着、此所繁昌二見ゆ、止  
 宿年寄与惣左衛門、領主佩刀を免さる、家作よ  
 し、領主も入と云、此日度々雨、夜亦曇、雲間  
 二少測

同廿二日（一〇月一八日）朝六ツ、岩船町出立  
 海辺砂原、左田地十丁斗、其奥ハ山々重ル、塩  
 谷町岩船より一里、同領家百廿軒、右海、二丁斗  
 左田地三十丁、奥ノ山、二里斗、是迄岩船郡  
 なり、塩谷と桃崎の間二大川あり、則塩谷と桃  
 崎両村の舟入澗也、川南は蒲原郡二成、桃崎浜  
 村上領家百六十八軒、此辺海辺白砂艸（草）原  
 二而十町余二見ゆ先二田地あるへし、遠山おほし

廿一日（一〇月一七日）は前夜の風雨も朝に小康、曇天を出発。途中、瀬波町で休憩。宿は近蔵（のち伊与部姓を名乗る。町年寄、明治初年に北海道へ移住）。三面川は湊であるが川浅しとある。初蛙の遡る時期、その年の漁獲量は如何なものか。九ツ半に岩船着。活気のある街並だった。止宿は年寄与惣左衛門宅。既に苗字帯刀を許された家柄である。「領主も入」と云うのは、同家の他の記録にも、狩猟などの途次、折々お立寄になったとある。この日は朝以来の霖雨、夜になってまたもや雲の去未。与惣左衛門覚書によれば、「庭上に天文測量乃器半徑約一・一五（の中象限儀）を陳べ設け、南天に星斗の爛かならんことを待ち玉ふけるに、浮雲の来往して、御心を勞し玉ふたのである。しかし、僅かの雲の切れ間を「少し測られた」忠敬、この辺りは淡々と書かれている。与惣左衛門の覚書とは対象的である。おそらくは、

朝来の雨で諦めておられたのではあるまいか。

廿二日（一〇月一八日）六ツ時に出立、海辺砂浜が延々と続く。左は田地。現在のお幕場、砂山国有林の松林には触れていない。瀬波の水林国有林、徳光屋覚左衛門が孫子三代の労苦で造成した赤松林にも触れていないが、そのころ松林がなかったとは即断できない。其奥は山々重るとあるは、神納平野背後の山々を指すものではなく、発達した第一、第二、第三の砂丘と、そこに成立する赤松の森林を指しているものと思うが如何なものであろう。左田地十丁では、余りにも狭すぎると思うからである。一里の行程で塩谷町へ。そこに荒川を見る。塩谷、桃崎両村の河口湊。何隻かの北前船か漁船が舫っていたのか、両村の舟入澗なりとある。

「川南は蒲原郡に成」、で岩船郡内沿海測量はおわりである。



「与惣左衛門覚書」の内容

(二)で郡内の宿泊と夜間の天測をまとめてみよう。

九・一六(二〇・一二)	府屋又左衛門泊	
九・一七(二〇・一三)	同 泊	晴天、測る
九・一八(二〇・一四)	寒川市助泊	曇、雲間測る
九・一九(二〇・一五)	新保藤助泊	曇天、不測量
九・二〇(二〇・一六)	柏尾惣兵衛泊	大曇、不測量
九・二一(二〇・一七)	岩船与惣左衛門泊	曇、雲間二少測

なお緯度(北極之地度)算定(推歩)について忠敬は、第一次の実測図を幕府のほかに、若年寄堀田摂津守に呈したときの添書に

第一、北極之地度の義は、泊々にて何れも象限儀を相用ひ、恒星中の大星を択み、天氣くもり見えがたき節は五六星、晴天の夜は、二、三十星、いずれもその地の高度(視高度)を測量仕り、兼て測量候恒星赤道緯度表を相用い、その北極之地度を相求め申候、一星ごとに如此仕り、其中を取り候て其地北極出地度と相定申候と記している。

(藤田元春 伊能忠敬の測量日記)

なお、測量隊の測量全距離(再測を含む)は三八七・八四<sup>キ</sup>で、天測地点数は一二〇三ヶ所であるから、このうち三ヶ所(北極高度測量記では四ヶ所)が、岩船郡内の数となる。(保柳睦美 伊能忠敬の科学的業績)

そもそも、全国測量も忠敬にとつては緯度一度の長さを測定するという大きな目的があつた。第一次測量は歩測のせいか二七里、第二次

とこの三次測量では二八・二里(一一〇・七四<sup>キ</sup>)と計算されたが、師の高橋至時はなかなか信じようとしなかった。

又嘗て毎々沿海測量の話に及べば曰、予兩三年を歴て、漸一度の里数測量して二八里二分とす。然るに東岡先生(至時の号)是を信ぜずして、未だ確数に非ずとす。其測算を携え来て一見に備ふれ共信ぜず。翁心に快からず、先生何ぞ我を疑ひ給う哉。東岡先生云、予爾を疑ふに非ず予め思ふ所より、少しく大なるならん。翁云く先生予が言を疑ひ給はば、自今以後、遠国測量を止るべし。かく疑ひ給はば、是迄の測量も悉く疑ひ給ふらん、と忿然たり。仍て東岡先生も彼が忿怒を和らげ、又々東海道の方に趣かしむ。嘗て官、新板(版)の和蘭曆書(ラランデ曆書)を發下し給ふ。其内に一度の里数の事あり、先生自ら訳して、彼邦尺と日本尺と比例して、彼方測定の一度の里数を以て本邦の一度里数を推求するに、果して我邦は翁の測定の一degree里数と密合を得たり。爰に於て先生、翁と共に悦ぶ事限りなしと云ふ

伊能翁言行録(渋川景祐述、一八二一・写本)保柳睦美 伊能忠敬の科学的業績より)所収の一文である。その執念と自信の程が伺えるが、誤差〇・二%の成果も、第二次につづくこの地方も含む第三次測量の成果であつた。当地方の北緯三八度付近の値は一一〇・九八<sup>キ</sup>で

あるからその差は二四〇里である。当時は二五里説、三〇里説、三二里説と紛々としていたようで、四析の精度は当時の技術、器具からみて驚嘆すべきものといえよう。象限儀も、整準装置がいまと異り幼稚で据えつけにもかなりの時間を要したはずである。

## むすび

全国測量といえば伊能忠敬の名が出る。

精緻な大日本沿海実測図は、シーボルトによって写しが非合法的ながら国外に持ち出され、広く外国に紹介されたり、日本近海を実測しようとしたイギリス海軍測量船隊が、幕府から贈られた伊能図をみてその正確さに驚嘆して測量をとりやめさせたほどの地図であった。

しかし幕府ではみるべき利用はしなかったようであるが、明治中葉、陸軍参謀本部（陸地測量部）で五万分の一地形図を発行するまでは、伊能図を基本図として利用された事実といい、功績は不滅のものである。

しかし、この大仕事を表裡にわたって支えたもの、師の高橋至時や間重富、至時の子景保（シーボルト事件により獄死）も居よう。測量機器造った京や江戸の金工たち。手足となつて働いた門弟ら一同。しかし測量隊が通過した地方住民の協力も大きいものであったに違いない。

特にこの地方の海辺つき浦々の住民が、この世紀の事業に誠意をもつて当っていることが「測量日記」や「与惣左衛門覚書」によって判明した。

これは、町や村役人が、幕府や藩あるいは代官所の権威に平伏しての行為であったのか。

ここで伯寛与惣左衛門所懐の和歌に注目したい。忠敬の測量の何た

るかを理解していなかったならば詠み得ない歌と思うからである。

寿の星を南の空清く雲吹はらへ秋の小夜風  
爛かに影見る星ともろ共にこの郷の名も世々に曇らし

あるいは筆者ひとりの牽強附会にすぎようか。

## おわりに

この小論をなすに当たり、その発端となつた伴田幸一郎先生ならびに伊能忠敬記念館に深甚なる謝意を表するものである。

村上市市史編さん室大場喜代司先生からは再三にわたりご指導をいただいた。本校関係で、皆川校長、竹島事務長、菅原照夫、本間泰子、宝井重久、小林貫一郎、中村悦夫の各先生、田沢信氏と多くの方々にあわせて深く感謝の意を表わすものである。 終

## 参考文献

- |             |              |          |
|-------------|--------------|----------|
| 保柳睦美        | 「伊能忠敬の科学的業績」 | 古今書院     |
| 藤田元春        | 「伊能忠敬の測量日記」  | 日本放送出版協会 |
| 小島一仁        | 「伊能忠敬」       | 三省堂      |
| 「明倫」第一四号    |              | 国上建設学院   |
| 「読史総覧」      |              | 人物往来社    |
| 鈴木駿太郎       | 「星の辞典」       | 恒星社      |
| 外務省編        | 「近代陰陽暦対照表」   | 原書房      |
| 新天文学講座Ⅰ「星座」 |              | 恒星社厚生閣   |

（かざま ひろきち・元新潟県立桜ヶ丘高等学校教諭）



## 伊能測量隊の経度の測定(一)

佐久間 達夫

協力者 嘉数次人

### 一 経度に関係した記録

伊能忠敬は、全国測量の際、距離や方位の地測とともに緯度・経度の天測をし、それを地図作成に生かした。しかし、経度測定に関係した記録は少なく、地図上でも細部にわたった記述は見当たらない。従って筆者のように天測についての知識の乏しい者には、経度の測定についての説明は容易なことではない。そこで、経度に関係した記録を主に記してみたい。

香取市の伊能忠敬記念館には、経度に関係した記録として「諸国測量地図北極高度並東西度」「文化五年四国大和地測量・文化七年九州之一部測量・東西南北距離記」「一里六分図東西之経度並自北極下国直円経差」「雑録・享和二年戊戌二月十六日月食観測記録」などがある。

また、手沢本としては、「木星四小星交食法」がある。

「諸国測量地図北極高度並東西度」は、中部、近畿、中国、四国の二百八十二箇所各地点間の緯度差から地図上の南北、並びに東西の距離を計算したものである。

「文化五年四国大和地測量・文化七年九州之一部測量・東西南北距離記」は、淡路、阿波、土佐、伊予、讃岐、豊前、豊後、日向、大隅、薩摩、肥後、長門、播磨、摂津、河内、大和、伊賀、伊勢、遠江、

三河の諸国の三百三十五箇所について、前記と同じような内容が記されている。従って、二つの記録には、重複箇所もある。

「一里六分図東西之経度並自北極下国直円経差」は、伊能忠敬が、高橋至時の考案した新投影法による地図作成を試みようとして、東西経度、及び直円経差なるものを北緯二十九度から四四度に至る迄、一度毎の緯度について中央子午線(京都)より東西各八度にわたり、十分毎の経差について算出したものである。

「木星四小星交食法」は経度の測定に応用するために、間重富と高橋景保が、暦局員にラランド暦書を基にして、木星衛星の交食、並びに掩蔽時刻を推算させ、忠敬に提供したものである。文化二年の春分から同三年の十月までの期間について、江戸暦局で観望できる木星とその衛星(第一・二・三小星)との交食掩蔽時刻を江戸の地方真太陽時について記してある。

### 資料一 木星四小星交食法

伊能忠敬記念館蔵

※文化二年自春分至冬至 文化三年一月起算冬至

浅草暦局員推算

文化三年丙寅 起算冬至 五星測量中 木星之四小星交食日時表

### 二 経度の測定法

経度に関係した記録を大別すると、日食、月食、それに木星とその衛星の交食現象を江戸、大坂、測量地とで同時観測して、その現象の時刻差を求めたものと、各測量地点間の地図上の東西の長さから経度を算出したものとに分けられる。

前記の測量では、現代のように動作の継続できる時計がなかったの



で、遠隔の地どうしの時刻を比較することは、至難中の至難であった。そこで忠敬は、次のような方法で「真太陽時」を算出して、測量先の時刻を決定した。

まず日月食が起こる二、三日前に測量先に「象限儀」を設置して、太陽（恒星）の方中時刻や視高度を観測し、翌日再び同じ地点で同様の内容を観測して、観測地の「真太陽時」を求めた。太陽午中から翌日の太陽午中までの時間を「一視太陽日」といい、この一視太陽日に動作する「垂揺球儀」の振子の振動数をも測定した。次に原点である江戸浅草片町にあった司天台（北緯三五度四一分五二秒。忠敬は、北緯三五度四二分）と、大坂の間家の観測所、それに測量先で、月食の初断から復円までの食の進行状況を同時観測しあい、その現象の時刻差によって測量先の経度を算出した。

「垂揺球儀」は、天文用の振子時計で、麻田剛立が「靈台儀象志」の垂球の説明から間重富らと共に考案し、京都の戸田東三郎忠行に作らせたのが、最初といわれている。

垂揺球儀には、振子が一往復する（一球行）ごとにひと刻みずつ進む「指表盤」がある。第一の指表盤は十位、第二指表盤は百位、第三指表盤は千位を読み取り、これによって一万往復までを測ることができる。さらに指表盤の下方の左右に窓があり、その窓には、振子の全振動の一万の数（全周すれば十万回）と、十万位の数（全周すれば百万回）とを表示するようになっていて、振子の全振動数が百万回に達すると目盛りは零に復帰するようになっていて、振子は、一日に約五万九千回の往復をするから、文字盤の表示は、約一七日で循環することになる。

伊能忠敬記念館には、垂揺球儀が二個あり、一個は忠敬が戸田東三郎から買ったもので、もう一個は忠敬の孫、忠誨が大野弥三郎から買

ったものである。

垂揺球儀の表示数から地方時を求めるには、太陽（恒星）の方中時刻に相当する垂揺球儀の表示数と、太陽及び恒星の方中観測によってきめた「一太陽日」の間の垂揺球儀振動数とを基礎として「真太陽時」を算出する方法である。この場合、垂揺球儀は一昼夜を通して、常に均一に運行するものと仮定している。

#### 1 月食復円時の時刻の求め方

伊能忠敬記念館の「雑録」のなかに、享和二年二月二日から一八日までの太陽午中と諸恒星などの子午線経過の観測録が保管されている。これを基にして二月一六日の月食復円時の時刻を求めてみよう。

#### 資料二 月食観測の記録

伊能忠敬記念館蔵

##### ○ 享和二年戊午

・ 二月二日 夜 恒星 南中垂球

恒星名 南中時の垂揺球儀の表示数

井宿三 一〇二六四三

南河三 一〇五二二九

北河三 一〇五四〇九

略

・ 二月一日

星名 垂揺球儀の表示数 一日垂球数

太陽午中 一四五三九七

南河三 一六四七三五 五九五〇六

北河三 一六四九一二 五九五〇三

・ 二月一日

星名 垂揺球儀の表示数

一日垂球数  
午前午後地震で垂球止む  
九行

太陽午中 二〇五〇五二

五九五〇四半

南河三 二二四二二九

五九五〇五

・二月五日

星名 垂揺球儀の表示数

一日垂球数

太陽午中 二六四七〇〇

午前午後地震で垂球止む  
三行 星行を以て推歩  
得之

東上相 二九六二三九

五九五〇四

・二月六日

星名 垂揺球儀の表示数

一日垂球数

太陽午中 三二四三三三

南北線見損故以星行与  
当日太陽赤道補之

木星 三四九四九八

五九四九一

月食復円時 三四八五五七

・二月七日

星名 垂揺球儀の表示数

一日垂球数

太陽午中 三八四〇一〇

十四日地震垂球止み三行加  
え、十四日より十七日迄  
三日ならし

南河三 四〇二七四〇

五九五〇四・六六

北河三 四〇二九二二

五九五〇五

木星 四〇八九八八

五九四九〇

・二月八日

星名 垂揺球儀の表示数

一日垂球数

太陽午中 四〇二七四〇

五九五〇四・六六

北河三 四〇二九二二

五九五〇五

木星 四〇八九八八

五九四九〇

太陽午中 四四三六六五

初虧 一九時 八分二七秒 垂球 三四二一〇四行

食甚 二〇時二六分一八秒 〃 三四五三二九行

復円 二一時四四分 九秒 〃 三四八五五行

但し 太陽一日行 垂球 五九六五六行

食分 四分六六秒

右曆局推歩 觀星鏡 伊能勘解由測る

○享和二年二月一六日の月食復円時の時刻の求め方

・二月一六日

太陽午中 三二四三三三

南北線見損故 星行を以て当日太陽

赤道度これを補う

月食復円時 三四八五五七

・二月一七日

太陽午中 三八四〇一〇

一四日 地震 垂揺球止み  
三行加え、一四日より一七日まで三日ならし

・享和二年二月一六日の月食復円時の垂揺球儀の

読定数三四八五五七を真太陽時に換算する

・二月一六日の太陽午中の読定数 三二四三三三行

・二月一七日の太陽午中の読定数 三八四〇一〇行

・一太陽日の全振動数(球行数) 三八四〇一〇(ひく)

三二四三三三 五九六五七(行)

・二月一六日の月食復円時の垂揺球儀読定数 三四八五五七行

日法一万分とすると、

●

348557 - (384010 - 59657) × 10000

59657

≡ 4057(分) となす

従って、子正後の時刻に換算すると、半日分（五〇〇〇分）を加えて、五〇〇〇分＋四〇五七分＝九〇五七分となる。

● 日法八六四〇〇〇秒とすると、

348557 - (384010 - 59657)

59657

× 864000 = 35054 (秒)

＝ 9 時 44 分 14 秒となる。

従って、子正後の時刻は、一二時十九時四四分一四秒＝二一時四四分一四秒となる。

## 2 江戸時代の時法

江戸時代に一般に使用されていた時刻制は不定時刻で、明け六ツから暮れ六ツまでの昼を六等分、暮れ六ツから明け六ツまでの夜を六等分、合わせ一日を十二分割したものであった。

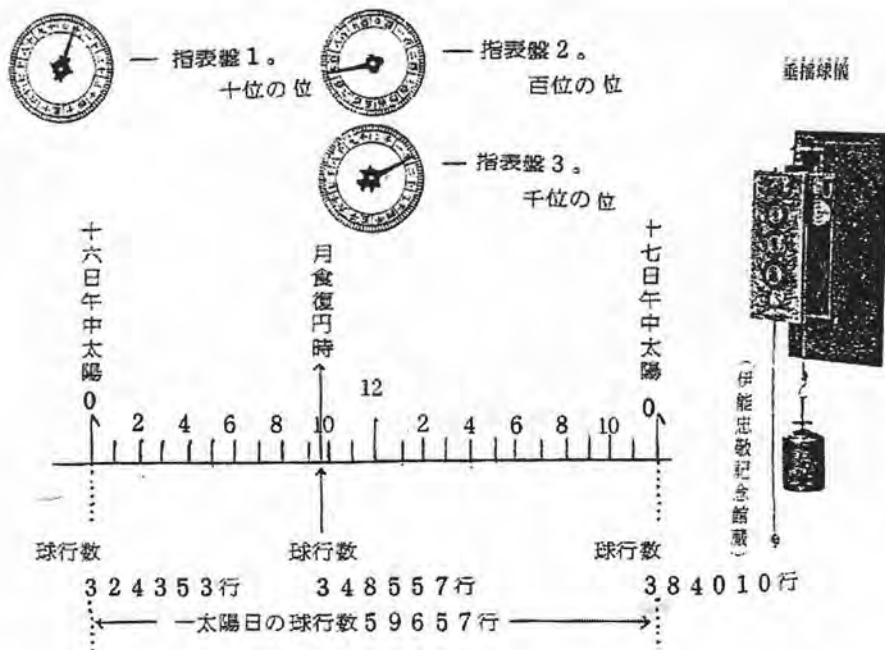
不定時法による時刻の呼び方は、今のような午前〇時から十二時ではなく、午前は九ツから始まり四ツに終わり、午後も九ツから始まり四ツで終わった。また、一ツの間に半時を設け、九ツの次の半時は九ツ半といった。

明け六ツ、暮れ六ツについて、『寛政歴書』では、太陽の中心が地平線の下七度二分四〇秒の角度にあるときとされた。これは大体日の出前、日没後三五分くらいの時刻に相当する。

しかし、日の出、日の入りの時刻は季節によって違うので、これによると昼間と夜間の時間は季節によって異なってくる。従って一単位時間の長さも違ってくる。

そこで暦の上では、一日を子、丑、寅、卯……といった十二支で十二等分した時法が用いられたが、庶民にはあまり使用されなかったよ

○ 垂揺球儀と月食復円時の時刻の求め方図。





うである。

暦の上の記載で不定時法が採用されたのは弘化元年から使われた天保暦からである。

次に江戸時代の天文暦学者が用いていた定時法による観測記録を、現在使用の時法に換算する方法を記してみよう。

天文観測では太陽の南中から次の南中までを一日とした  
視太陽日を

$$1 \text{ 日} \parallel 12 \text{ 辰刻} \parallel 100 \text{ 刻} \parallel 100000 \text{ 分}$$

$$\parallel 24 \text{ 時とするもので、}$$

$$1 \text{ 辰刻} \parallel 100 \div 12 \parallel 8 \frac{1}{3} \text{ 刻}$$

$$\parallel 10000 \div 12 \parallel 833 \frac{1}{3} \text{ 分}$$

$$1 \text{ 刻} \parallel 10000 \div 100 \parallel 100 \text{ 分の関係になる。}$$

これを現在使用している時・分をh・mで表わし、

江戸時代使用の1日 $\parallel 100000$ 分の分で表わすと、

$$1 \text{ h} \parallel 10000 \div 24 \parallel 416 \cdot 7 \text{ 分}$$

$$1 \text{ m} \parallel 6 \cdot 94 \text{ 分となる。}$$

### 3 月食の四限時刻より経度の求め方

「資料三・四」は、第九次伊豆七島測量の時、隊員が、文化十二年十一月十六日の月食時、その四限時刻（初虧、食既、生光、復円）を測定し、原点の江戸暦局と比較して、伊豆国下田の経度を算出したものである。

資料三『伊能忠敬測量日記』 佐久間達夫校訂

文化十二年十一月十一日 雨北風、下田町滞留。当月望月の支度

十二日 曇北風、同所滞留。

十三日 晴天北風、同所滞留。夜星測る。

十四日 晴曇北風、同所滞留。夜曇天、子正後より曉七ツ時頃まで雲間測る。

十五日 曇天、同所滞留。午中太陽測る。夜星測る。八ツ時過迄雲あり不成。

十六日 晴天、同所滞留。午中太陽測る。夜星測る。四時過より月

食初虧、即全山皆既、九ツ半時過復円、

それより星測る、八ツ時過に至て止む。委細別記。

### 資料四 文化十二年乙亥十一月望月蝕実測

伊能忠敬記念館蔵（平成十八年二月 伊能家より寄贈）

・文化十二年十一月望 伊豆国下田と江戸暦局観測

東都本局測 伊豆国下田測 差

初虧 子正後 八五二七分一〇 八四七九分七九 三七、三一

食既 子正後 八九六六分三八 八九三〇分五三 三五、八五

食既 子正後 亥初二刻一六 亥初一刻八〇五三

〇食甚 亥正一刻四八 亥正一刻一四

生光 子正後 九六三〇分八二 九五九六分六七 三四、一五

復円 子正後 六九分五八 三三分六八 三五、九〇

子正〇刻六九 子正〇刻三四

（三七、三十三五、八五十三四、一五十三五、九〇）÷四

|| 一四三・二一÷四  
|| 三五・八〇二五 (兩地実測比較 平均三十五分八一)

・兩地実測較平均三十五分八一

大小図表 三十五度の応四十九分〇八秒を用う

初比例

二次比例

一、一万分

一、一度

二、三百六十度

二、四十九分〇八秒、百分度にして、

三、三十五分八一

八一分八八八

四、一度二八分九二

三、一度二八分九二

四、一度〇五分五七

三次比例

一、一度

二、二十八里二分

三、一度〇五分五七

四、里差 二十九里七七

・比例

一率 日法一万分 二率 三百六十度

三率 三十五分八一 四率 X度

一率 対 二率 || 三率 対 四率

一〇〇〇〇対三六〇||三五・八一対 X

一〇〇〇〇X || 三六〇×三五・八一

一〇〇〇〇X || 一二八九一・六

X || 一・二八九一六  
※ 一度二八九二。

この月食観測の結果、江戸暦局と伊豆国下田の経度差は、一度二八九二という値がでた。(つづく)

(さくま たつお・伊能忠敬研究家)

# 編集余話

与惣左衛門に対する暖かな眼差し。時間を越えて風間先生の思いが強烈でした。本誌掲載のご承認に厚くお礼申し上げます。

武田さん山口さんの英断に感謝です。貴重資料の伝播にはこうした決断が必須でしょう。資料の所在事実と継承事実はどこかに残したいものです。後世に遺す最大遺物のひとつに違いありません。

「人間晩晴を貴ぶ」数々の知恵を本気で実行し、人としての徳が備わった方がいらつしやいました。これもうれしいことです。村井さん中富さんの偉業です。

秋の空気を感じると夜空が近くなるのは天文好きの方です。忠敬さん忠誨さんは木星の衛星の存在とそれらの食現象までご存知でした。今年夏は夏に冥王星の格下げが話題でした。正確な地図づくりには科学の英知が集まっています。神の目を持つ学問は気象学。洋学研究会、洋学史研究会にも関心が広がっています。

(F)

## 忠敬談話室だより

## 古文書ロマン江戸が息づく

日本経済新聞 6月8日の記事です。

たった二、三百年前の日本人が書いた文字が読めない。忠敬さんや江戸期の文書を前にじくじたる思いをしている。今、古文書解読に取り組み、江戸の人々と会話するシニアが増えているという。

こんな書き出しで東京の「古文書に親しむ」講座風景が紹介される。「昔のものが読めると楽しいですよ」と受講者が語っている。

旧家に残る文書 江戸時代はまだ二、三百年前。旧家には手紙や日記が残っている。そんな祖先が書いた文書を読みたいと、古文書解読を習い始める人もいる。

東京都世田谷区に住む伊能陽子さんもそんな一人だ。嫁いだ先が伊能忠敬の末裔。家に残る資料を義母が整理・保管していた。その後を継ぐため二十年前に、区の郷土資料館が開く古文書講座に通い始めた。現在は講座の卒業生がつくる自主講座で毎月二回、仲間と腕を磨いている。先頃は、専門家の手を借りて整理した資料を千葉県伊能忠敬記念館に寄付した。

伊能さんによれば、古文書解読の魅力はパズルのような知的ゲーム。「古文書は当て字や異体字が使われ、一筋縄では解読できない。辞書で調べてもわからない文字を、台所仕事

をしながらちらちら見ていると、筆の入り方や前後の文章から突然ひらめいたりするんです」。同好の仲間との触れあいも楽しく「第二の青春」と声を弾ませる。

仕事に追われる日々から開放され、自分たちの祖先が残した文書を通して過去の時間を共有する。

編集部は会員の中川幸子さんにうかがう。

「古文書の魅力は解読には謎を解く楽しさがあります。たとえば一枚の書状があり、年、月、日等が記されてある場合はその時代の政治・経済・地理・天候・風俗・行事・思想・学問・筆者の人間関係等も謎を解く鍵になります。また、これらの鍵があるならば、書状に記されていない場合の年、月、日等推定することも可能です。たった一枚の書状からでも過去の諸々の世界、事物が展開してくるのです」と教えていただいた。

## 古文書に親しむポイント

1 入門 多くの自治体の図書館や歴史博物館、古文書を収蔵している公的施設に入門、初級などの講座を開設している。

2 上達のコツ 最初から崩した文字を読むより、まずは資料集など活字になったものを多く読む。「可被仰付候」おおせつけらるべく「そうろう」などよくある言い回しになれてから古文書に取り組むと上達が早い。

3 より楽しむ 古文書は日記類、お触れ書など公文書に個人の手紙など多様である。特定の分野しか読んでいないと他の文書が読め

ないこともある。多様なものを読み、いろいろな分野の言葉にふれる。その中から自分の関心領域が広がってくる。

## 新潟県立文書館古文書講座

インターネットの講座です。たいへん親切丁寧に作られています。紹介しましょう。

古文書は、しばしば「ミミズがはったような文字」といわれるように、なかなか難しいものです。最初は読めない文字がたくさんあつて大変かもしれませんが、この講座で基礎を身につけ、数をこなせば、次第に読めるようになると思います。あきらめずがんばりましょう。

## 解読の基礎知識

・草書：省略・変形が多い。くずし方・筆順が異なる例

・書風は家流：幕府文書の書体がお手本・候（そうろう）文：語句の切れ目、終わりの

部分に補助動詞として使用  
・和漢混淆文：和文の中に漢文のように返って読む字が混じる

・異体字：現在の標準字と異なる

・変体仮名：一つの音に複数の仮名文字あり・特有用字用語：近世文書に特有のもの

この講座では文書館所蔵の村方文書を主にテキストに使用しています。基礎編では「標題」「年号」「人名」の勉強です。10例の古文書標題が出ています。次に解読と読みと解説

が続きます。

例題から

① 村鑑書上帳Ⅱむらかがみかきあげちょう  
⑤ 相渡申一札之事

Ⅱあいわたしもうすいっさつのこと  
⑩ 乍恐書付を以奉願上候

Ⅱおそれながらかきつけをもって  
ねがいあげたてまつりそうろう

人名では男女20名ずつ40人が勉強できま  
す。すでに59回の講座を数え、「原文書」「解  
読文Ⅱ漢字とかな」「解説」と丁寧に説明して  
あります。是非一度お確かめ下さい。

### 小倉で忠敬記念碑「献花の集い」

忠敬測量を顕彰する「献花の集い」が9月  
26日小倉北区の常盤橋のたもとで開かれた。  
集いは、忠敬が長崎街道の起点でもある同  
橋のそばに01年、記念碑が作られたのをきつ  
かけに伊能忠敬小倉顕彰会（穂吉正明会長）  
が毎年開いている。この日はゼンリン社員が  
扮する測量隊一行が、木造の常盤橋を渡って  
記念碑前に到着後、参加者が遺徳をしのんで  
碑に花を捧げた。

続いて郷土史家の稲津義行氏が「伊能忠敬  
小倉周辺の測量について」を講演。穂吉会長  
は「この基点碑と集いが、北九州市の活性化  
につながることを期待している」と話してい  
た。

（石川九州支部長）

役員として、村井純孝、穂吉正明、熊谷要平、  
石川清一の皆さんがご活躍されています。



末吉北九州市長の献花



御用旗と測量隊が到着



盛況に！旭川大図展

丹羽菊乃さんから

大図旭川展について、中標津の神代さんがさっそく新聞記事を送ってくださいました。

盛況ぶりをご覧下さい。

北海道新聞 9月7日 ■偉業を歩む



講演後、熱心に来館者に地図を解説する高木さん

## 間展と天王星 荻原 哲夫

実は、大阪歴史博の間重富展のある展示品が大変気になってしまい、デジカメで隠し撮りしてきました。

重富の子、間重新(しげよし)が鳥刺奴斯(ウラス・天王星)を文政9年6月1日から9月16日迄にわたって観測した記録なのです。天王星をプロットした星図がついています。

その図をどこかで見たようなのだなと思ったのです。家に帰って写真を見て気付きました。伊能家の星図です。

今度の伊能陽子さんと安藤由紀子さんの目録に『大方星図』として出ている星図の一部分が写されて使われているようなのです。重新が記録した資料の下地は渋川景佑が足立重太郎信順に作らせたものであろうと推察し

ました。景佑が重太郎に日本での初観測を依頼し、重太郎は文政7年(二八二四)4月15日に行っているらしいことが『近世日本天文学史』に出ています。

また由刺奴斯(エラス)表は重太郎の著作であることがわかっています。これが景佑の所蔵目録に入っていることは知られていました。伊能忠誨が作成して、佐原に引越していたとき、手元にあった方星図を使っていたことが出来たのだと考えれば、なるほどとうなずけます。その後、今大阪で展示中の資料を景佑の依頼でつくり大阪の重新に送られたことが判ります。その資料には「東都南中時刻」と書いてあり江戸用のものなのです。

その頃忠誨は佐原で麻疹にかかっており、その観測依頼は来なかつたように見えます。私がうれしかつたのは、忠誨の星図が早速にも利用されていたということが明らかになってきたことです。

「そうだと重太郎ならそうしたであろう」と納得がゆき、19日に足立左内・重太郎のお墓にお参りしてきました。このあとの私の調査が上手く行きますようにと。(東亜天文学会)

## 新しい息吹が能登から

### 新資料館と地図作り

金沢の河崎倫代さんが

「能登さいはて資料館」を開館

河崎さんのメッセージです。

能登半島の最先端、珠洲市狼煙町に小さな資料館が10月21日オープンしました。日本の最果てを踏破した伊能忠敬測量隊のこと、最果ての地に立ち日本の海を守ってきた灯台のこと、そして、狼煙町とその近辺で使用された民具が並んでいます。10年近く閉ざされていた古い建物ですが気軽に入って、ちょっとおしゃべりしていただく。

場所 珠洲市狼煙町 狼煙駐車場横

(バス停から徒歩2分)

開館日時 4月・11月の土・日曜日

9時30分～16時30分

(12月・3月は閉館)

電話 開館日 0768・86・2239

休館日 076・268・5725

平成の忠敬をめざして・小網均さんの挑戦

日経新聞 10月18日

「56歳で奮起、先は長いが人との出会い道しるべに」小網さんが紹介されていました。

昨夏、富山湾の東端黒部市から測量を始め能登半島を回り、現在、金沢市まで海岸線を六十四ヶ所の測量を終えたそうです。

自分の目と脚で忠敬さんほど精密な地図ではないがそれなりに通用する百万分の一の日



本地図をめざす。小網さんは、子供のころは天体観測を趣味に、大学は地理学を専攻、航空測量会社に就職し測量士として第一線で測量や地図作りに携わった。途上国の僻地測量では熱風に吹かれたり、険しい山道での事故や船の転覆、熱病との闘いなどご苦労があった。早期退職の勧告を受けた頃、伊能忠敏に触発され全国測量を志すに至る。

「測量を通し、多くの人と出会う。それは自分を見つめ直すことでもある。ある意味で、今の自分が本当にしたいのは、このように多くの人と出会い、語り合うことといえるかもしれない」と語っています。

悩みたる友びと論す六分儀

今後は福井県に入り、敦賀から琵琶湖、大津、そして京都へと、一年間かける。その後は鳥取から島根、山口へ。何年かかっていいから、全国を測量して回るつもりだそうです。どこかで是非一度お会いして語り合い、わが研究会のメンバーにお誘いしたいものです。

### 濱宅宮内家文書類の検証始まる

去る7月9日伊能(夫妻、伊藤、萩原、岡部、福田の研究会メンバーとセイコー時計博物館の一同が銚子の宮内家を訪れました。貴

重資料の解明に協力がテーマでしたがたくさんさんの資料に感嘆の声で拝見するばかり。時間不足で今後に宿題が残りました。



宮内さん宅での資料調査

### 見島地図発見 宮内敏さん 9・22

資料の整理ですが、扇子と書画についてはすべてデジタル化しました。(二〇〇点位)作者名についても半分くらい判明しました(菊池五山などそれなりの名も)

その作業中、小誌「伊能忠敏翁」で紹介した幻の「見島地図」が掛け軸になって見つかりました。地図そのものはA3サイズです。

保存状態が悪かったわりには地図は良好です。見島地図について研究会会報で紹介して頂いたばかりなのに間に合いませんでした。今年は無理ですが来年度は萩・見島に行つて調査してみようと考えています。小さな島です。色々な面で現状との比較検討ができそうです。(伊能測量のまねごとでもできて比較検討できたら最高です。夢)

国土地理院の見島地図とこの地図を重ねてみますとかなり違うところがあります。埋立、侵食、測量誤差など考えられますが、全体的には短時間によくできたと思わせる地図です。そのほか萩関係では周南撰となっている掛け軸や山県有朋と思われる書も見つかりました。(現在未確認)

その他、当家の先祖の墓石の拓本から窪木(久保木)清淵の名を見つけ墓石と確認しました。年に数回とはいえ何十年も見て来た墓石でしたが気付きませんでした。

### 続・見島地図 10・14

伊能さんに見ていただきましたが伊能図ではなく地元から提出された地図ではないかとのことでした。確かに書き方も違うし、時間の測量では描けないと考えていました。当家にあつた書付にも「この地図ハ伊能忠敏翁所作旧見島郡見島村・」とあり「書いた」とは記載されていません。所作の意味するところは分かりませんがそれなりの重要な資料と考えています。

当家に寛文五年(二六六五)の下総国三崎村など三ヶ村(すべて現銚子市)の土地争いに関する裁定の地図がありました。地図うら(こちらが表のようですが)に裁定内容の記載と勘定奉行・寺社奉行・北町奉行・南町奉行のサインがあります。

編集部 古文書類、村役関連資料、家業資料、

骨董品、伊達家拝領品ほかファイルを送って頂きました。改めて報告いたします。

## 日々の話題

□茅ヶ崎市美術館に永野鳥瞰図 8月公開

フロントホールで伊能大図「湘南」公開に合せ、鳥瞰図家永野達代さんが明治初期の湘南海岸を山側から海側に鮮やかに描きました。

□さどがしまからおんでこ太鼓 7・27

新潟の垣見壮一さんからです。

小生、佐渡佐和田町に佐渡火力発電所調査のため長期出張でしたが、現場と宿の往復で、伊能ルートを辿ることもならず残念でした。

佐和田町史 沢根町笹井次郎右衛門家

御宿帳 享和三年亥九月二日

「旦那方御宿泊 一文者宿泊仕候 但シ上下五人右ハ拙者方ニ相勤らず重ヤ（重屋、本家のこと）相頼御宿相勤申候や」

佐渡も街を外れると素朴な生活があり、ほのぼのとしたものを感じました。皆様と地酒を飲み交わす日のあることを楽しみにしています。

垣見さんから資料を受贈

佐渡入門：観光図 佐渡のみどころ

地図中心 405号：特集 The 佐渡 一島一市

□地図展2006 in 大阪



□来年3月 高知フロアー展



3月1日～4日

11月9日～13日 城見ホール  
伊能忠敬の日本地図ほか

□森治郎氏「大江戸探見」忠敬さんのご縁

大江戸探見 森治郎（元徳島県立大教授）

「5千万歩の男」伊能忠敬  
隠居してからの歩き方

森さんから天文資料受贈

名古屋科学館

「天文クラブ機関紙?（ハテナ）」

最新3号と11号までのCD-ROM

「アイジンガ・プラネタリウム」は世界最古の現役プラネタリウムです。オランダ、アムステルダムから電車で三時間。人口一万三千人の

小さな町プラネケルに博物館として現存しているそうです。忠敬さんの全国測量は二百年ほど前のことでしたが、その時代にアイジンガは人々に正しい天文・宇宙の知識を伝えるため、自宅の居間の天井に大きな太陽系の模型を作り、天文教育に長年尽力しました。現在も週一回、振り子類のおもりを巻き上げるだけで、当時知られていた土星までの惑星と月の位置、それに月齢や日食月食の予想まで正確に示し続けているそうです。

□コーネル大学図書館へ

『伊能忠敬未公開書簡集』寄贈

同大学の「ワシントン東アジアコレクション」の依頼により航空便で送りました。料金510円。

8月21日依頼状「ニューヨーク州のイサカは朝夕がだいぶ涼しくなってきました」イサカはイナカの間違いか？ 礼状は10月11日。「ニューヨーク州のイサカは、すでに秋の気温になり、朝夕が肌寒く感じる季節になってきました」まだイサカになっています。イサカってなんだろう。コーネル大学をご存知でしたらご一報下さい。

□岩城元さんがハルビンから桂林へ

「平成の遣唐使」「伊能ウォーク」を企画推進されたあと定年に。ふと思いついて、2001年秋から中国の大学でボランティアの日本語教師。まず、東北地方（旧満洲）黒竜江省のハルビン理工大学に5年いて今年秋からは南方の広西チワン族自治区・桂林へ。AI

Cで隔週、現代の中国を鮮やかにレポートされています。会報39号で紹介された「クコ酒」の行方は？新しい報告を待ちましょう。

#### □伊能忠敬 海津を歩く「大図海津展」

海津ってどこだ？岐阜市や新幹線羽島駅よりさらに南西方向。木曽川と揖斐川の間にありました。昨年、海津町、平田町、南濃町で新市に。愛知、三重県に接し岐阜の最南部です。星塾代表が10月14日講演をされました。

#### □松尾卓次さん「豊後街道を行く」発刊

海舟も龍馬も駆け抜けた！加藤清正が開いた参勤交代路、龍馬が走った維新の道。熊本城から豊後鶴崎まで九州横断・歴史の往還124、初の踏査ガイド。(帯から)



弦書房  
☎092・726・9885



熊本城から大津まで この道を伊能忠敬一行は測量して通った。文化七年のことである。「十二月十四日城下出立く大津町止宿前まで測」もちろんその距離数は正確であり、出来

た地図を見ても、このあたりの街道は定規で線を引いたように一直線となっている。

阿蘇市の石御茶屋跡は細川の御殿様がしばし休憩したところ。建物こそ建て替わったが、庭園と泉水はそのまま残っている。

…大分市の今市宿跡には、当時そのままの石畳道が六六〇メートル残されている。地域の人たちはそれを守り続けてきた。…海舟が見て、龍馬に語ったであろう風景があちこちに残る。…今でもその地点に同じように立つことができる。そして阿蘇の山々を眺めていると、江戸の旅人になったようで、気分も雄大となる。「ほんで、豊後街道は良か道ですばい」ぜひ、皆さんも足を運んで下さい。歩いてよし、自転車でもよし、自動車でもよし。

#### □江口夫妻の実りの秋 10・31 NHK TV



東京から千葉県山武市に移り農業に汗を流す江口さんが紹介されました。ご主人はカメラマンからの転進。作物に工夫を加え、奥様俊子さんは販路拡大に得意の絵ところが生

かされる。テレビ画面には「第二の人生は忠敬さんにあやかりたいものです」という思いがさわやかに映し出されていました。

#### お知らせ

##### □惜別

小林 清さん 4月 幅広く関心を寄せて頂きました。伊能測量再現は昨年でした。伊能静光さん 9月 佐原から温い声援に感謝。黄色の伊能研究会会旗や伊能忠敬記念館の看板の筆は大事に伝播します。

##### □新入会員 どうぞよろしくお願いします。

日本写真印刷株式会社 特別会員  
石谷 春香さん 川崎市中原区

##### □今年の秋鮭漁は些か低調なスタート！

献上西別鮭は豊かな自然から生れたこだわりの逸品。新製品が二つ登場しています。



別海漁業協同組合  
☎0120・24・8876

##### □訂正 前号57頁

「七里ヶ浜の哀歌」です。哀歌は誤り。

## 伊能忠敬研究会 御案内

- 一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
- 二、つぎのような活動をおこなっております。

### ①会報の発行

発表誌 原則として年四回 64頁

ー予定ー

第47号 締切12月末 発行2月

### ②例会・見学会の開催

第48号 締切3月末 発行5月

### ③忠敬関連イベントの主催または共催

第49号 締切6月末 発行8月

### ④その他付帯する事業

- 三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄には専門、趣味、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。
- 会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをお送りします。

④ (04年8月事務所は新宿区下宮比町から移転)

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

Tel・Fax

03-3466-6752

事務局メール fuku-inh@gj3.so-net.ne.jp

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

### 投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任。手書き、FD、CDなど形式自由です。一頁は二段組31×26行(400字詰用紙4枚分)、三段組20×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等(返却します)添付可。

話題、各種情報、近況などお便りをお待ちしています。

## 伊能忠敬研究会のホームページ 開国から文明開化へ

ホームページは秋葉武晃さんの担当です。話題が広がっています。

<http://inh-tadataka.org/>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事です。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.ttrim.or.jp/~koko>

### 編集後記

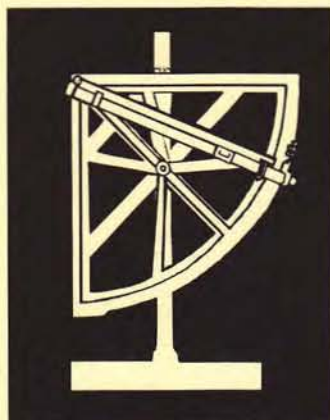
「身につまされる」心情は大切。「武士の一分」山田洋次映画監督の言葉です。相手の気持ちや想像した思いやりの心や、注意して相手を観察する能力など多様な意味が込められる。分かりあえる、伝えられる。九月下旬の午後「山田監督と語る大学生の集い」穏やかに語っていました◇江戸しぐさの越川さん。「都合のいいときは便乗するのに、助力を求められたときは知らん顔。こうしたふるまいは『ムクドリしぐさ』と言われました。こんなムクドリとは長い付き合いはできません。相手に接する動機が純粋であること。目先の利益にとらわれず、人間同士まず親しくなることを江戸っ子は大切にしました。忠敬さんの江戸期から現代まで大事な価値観ですね◇前号のわからん「出島の水銀」ですが片桐一男著書によれば皮膚病薬や駆梅剤として使用されたようです◇長崎山王神社の被爆クスノキの種から育った若木は西東京市いこいの森公園で高さ1mに育っています。ここは原子核研究所の跡地です◇今年も様々に現代の忠敬さんを皆様にご教示頂きました。豊かな展開を新年に繰越します◇時節向寒。おい、とい下さい。(F)



# THE INOH TADATAKA JOURNAL

## STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.46 2006



### TOPICS

Biography of Inoh Tadataka Written by Kohda Rohan  
 A Poem in Praise of my Grand Mother "Goshintsama"  
 Tadataka? or Chuhei?  
 "Edohunaizu" in Hitotsubashi University  
 Katori City Memorial Exhibition of Takami Senseki  
 "The Map of Sawara Area" Housed to Inoh Memorial Museum  
 An Error of the Large-scale Inoh Map  
 Kageyu in Heian Period

### FROM VISITORS' REGESTERS

An Anecdote

### FEATURE ARTICLES

About Education for Children  
 A Wish for Decreasing Crims  
 Soutaido Library will be Opened

### NEW MATERIALS

Inoh Tadataka as a Pioneer of Culture(3)  
 Study of Old Books about Astronomy  
 Tadataka and Aohdo Denzen  
 A Panorama of Korean 9 Mountains on Inoh Maps

### ARTICLES

The House Inoh Survey Team Lodged was Found out  
 Measurement of Latitude by Inoh Survey Team (1)

### AUTUMNAL ESSAYS

1.Kabuki "Drum of Matsura"  
 2.Azumino and I  
 3.The Nemoto Society Visited Inoh Memorial Museum  
 4.The Stars Observed in Kamiyoshida Village

### REGIONAL MATERIAL

Inoh's Survey in Iwafune "Yosoemon's Memorandum"(4)  
 MEETING ROOM Daily Topics and Informations

Syonen Dokuhon	1
Inoh Hiroshi	2
Sakuma Tatsuo	6
Inoue Yasuko	10
Inoh Memorial Museum	27
	41
Tsujimoto Motohiro	44
Fukuda Hiroyuki	49
Inoh Yoko	11
Murai Sumitaka	14
Nakatomi Michitoshi	16
Editorial Department	17
Miyauchi Satoshi	20
Ueda Katsutoshi	28
Matsumiya Teruaki	34
Tsujimoto Motohiro	42
Katoh Koji	46
Sakuma Tatsuo	60
Sugiura Morikuni	50
Kashiwagi Takao	51
Kawakami Kiyoshi	52
Ogiwara Tetsuo	53
Kazama Hirokichi	54
	67

Edited and Published  
 by  
 THE INOH TADATAKA SOCIETY